

あらず。唯かゝる性質の著しき事を述べむとするのみ、日本國語が纖弱なる風に傾き易きは、聲音の状態にも、互爾乎波を多く使用するにもよるなるべしと雖も、又かくの如く抽象的傾向強きが爲に他國の語が一單語にてあらはすものをも二以上の單語にてあらはすが如きも一の原因なるべしと思はざるを得ざるなり。

かく語の性質異なるが故に外國語にては一の單語なりとも、之を國譯して一單語たること能はざるものならば、吾人はこの譯語を以て單語として取扱ふことなく、單語の叢りとして其の成分たる單語に分解すべきなり。この故に外國語にては一の單語たるものが、吾人の國語にては數個の單語たること頗多きことを豫め知らざるべからず。

吾人のこの論に於ける單語の分類は專單語の本性的研究によりて得たる結果なれば、かの西洋語の分類によりて鍛鍊せられたる頭腦を以て見る時は奇異の感を抱くと同時に矛盾を有するが如く見ゆるなるべし。かくれば深く注意せずば衝突せざるを免れず。こゝにこれらに關する注意として單語性質論の本旨を明言すべし。

單語性質論は單語につきての本性的分析的研究にして活用的の研究にあらず。この際に分類の原理となるべきは國語の單語夫れ自が有せる特性あるのみ、吾人は其の特性の異同によりて分類彙聚すべきなり。この故に自然の結果として西洋

の分類と同一の理路に出づべき必然の運命はあらざるなり。加ふるに西洋文典のなす處を見れば、かれらの單語分類の或者は句論上の説明を混交したるものにあらずや。かの前置詞といひ、接續詞といひ、間投詞といふが如き皆然り。この故に吾人の見る所とは大なる差異あるなり。吾人の研究は單語其の者の本性によりて專特性を發揮し、其の共通の性質によりて異同を分ちたるものなれば、西洋文典とは異なる點なくばあらず。之を句法に關係する點よりいへば、かれは多くの場合に於いて任務を唯一の規準となし、我は其の任務を參考して數多の任務をなしうるものは、其の任務の如何の程度にあらはるゝかを觀察したるものなり。この故にかれの命名の或者は直に句法上の名目ともなりうべけれど、吾人のはしかすること難し。この故に西洋文典の單語論の體裁と吾人の單語性質論の態度とは相違する點甚大なるものとす。一例を擧ぐれば、吾人の用言はかれの動詞に酷似す。しかも吾人の用言は其の應用の點に於いてかれの動詞形容詞副詞に通ずる點あり。わが副詞はかれの副詞に似たりと見えむ。しかもかれの所謂形容詞と副詞との二様に用ゐらるゝもの頗多し。しかも吾人はこれを以て直に品詞の轉成とはなさず、唯本性の發動によれる一の現象と認むるのみ。かくて西洋文典の説く所は吾人の説と衝突すべし。しかれども吾人は單語の本性的研究と運用的研究との差異は必かくの如き説に出づることの適切なるを信ず。

本章は之を五部に分てり。第一には體言を、第二には用言を、第三には副詞、第四には助詞を論ぜむとす。以上にて單語の本體的研究的な全部なり。吾人は之に附隨して、接辭を略説せむとす。之を第五とす。本章の梗概以上の如し。

第一 體言

(一) 體言の一般性質及區分

既に述べし如く體言は、吾人が或實在と認めたる場合の事物を代表する詞なり。他の語に在りては概念の言語にあらはれたるもの之れ體言なり。こゝに概念といふは論理學上の嚴密なる意義にていふものならず、大抵左の意義にて云ふ概念に該當するものなり。スターンと英辭書 Concept の條に曰はく

In a looser and less proper use, any notion in which elements are combined into the idea of one object.

この故に體言の定義を左の如くせんとす。

體言とは或概念を代表せる自用的觀念語たる單語なり。

さて吾人の體言は嚴密に、ある概念を代表するもあれば、直接ならず間接にある概念を指示するもあり。然れども其の究竟する處はとにかく一の概念に止まるのみなり。

吾人の體言の意義右の如し。この故に宇宙の森羅萬象如何なる事物にてもあれ、吾人の意識に於いて、一の箇體として認識せらるるものは、之を單語にてあらはす時皆體言の資格を有す。されば用言にても、副詞にても助詞にても、之を吾人思想の對象とする場合には直に體言の資格を具す。この故に體言の内容を悉あげ示さむことは到底なし。べき事にあらず。

體言はかくの如く、其の内容の廣汎なるものなるが、吾人は其の概念の特異なる性質、其の用法の差異よりして、又このうちに區分を施しうべし。こゝに於いて體言を左の如く分つ。

一、實體言(名詞)

二、形式體言

この二の區別は、其の語が具體的なる概念を直接にあらはすか、廣汎なる形式的概念を以て一定の概念を間接にあらはすかによりて生じたるなり。即實體言は或一の概念が其の本體を直接にあらはすもの、即實質を直接に代表せるものなれば、その實質の異なるものには應用すべからざる性質を有する體言なり。

人、馬、草、石、机、地球、精神、美、勢力、鬼、學術

等皆これなり。其のさす所の實體現存するか、若くは存在すと思惟せられて他の物に交換すること能はず、其の實體の一定せるものこれなり。

形式體言とは實體言と異にして、其のさす所の意義は互に相犯すべからずといへども、其の意義に對しての一定の實在は存せず。吾人の思想によりて或は甲をも乙をも或は丙をも丁をも思惟しうる一の形式を抽象的に發表したるものなり。これらは間接に實體をさすことありといへども、直接に其に固有したる實體は存在せぬなり。

我、汝、彼、此處、一、二、百、千、皆、悉、等これなり。かくてこの類の體言は、又其のさす所の意義の差によりて左の二つに分たる。

一、主觀的形式體言(代名詞)

二、客觀的形式體言(數詞)

主觀的形式體言とは說話者自身の主觀と特別の關係を生じたる場合に於いて客觀其のものを區別して之を指示するものなり。而して其の實質は說話者の觀察の場合によりて補填せらるべきものなり。

我、汝、彼、是、其、誰、此處、等これなり。これらに對する實質は皆說話者の見地次第にて其の指示する所の實質一定せざるなり。

客觀的形式體言は專客觀其の者の存在の形式をあらはしたるものなり。即事物

存在の形式を簡體的に計算したる結果をあらはす一の形式體言なり。而してこれらも又其のさす實質は存在するものにあらず、如何なるものにも應用せらるゝこと即形式體言の一般に通ずる性を有す。これに數を分明にあぐるものと概括的に大まかに量を示すものとあり。

明白に示すもの、一、二、五、十、百、千、萬、大まかに量を示すもの、みな、悉、そこばく、以上述べし所にて體言の分類は終れり。之を表示すれば左の如し。

從來の名目

- 實體言
- 體言
- 形式體言
- 主觀的形式體言
- 客觀的形式體言
- 代名詞
- 數詞

吾人は便宜の爲に、下に示せる從來の名目を以て、これらの體言をさすべし。これら三種の體言の特性意義等區別せらるべきものは目を新にして細論すべし。これより進みてこれら體言の全般に通ずる性質を述べむ。

一切の體言は體言に附屬することをうべき性質を有せりと稱せらるゝ助詞に接しうべし。この助詞は格助詞副助詞及係助詞の全體なり。かくて體言の他の二種の觀念語と異なる點は、文の主位に立ちうるか否かにあ

り之を試みるには格助詞を附屬せしめて意をなすか否かを驗するなり。之を試みて得たるものは皆體言たるなり。本來體言ならぬものにては之に體言の資格を與ふるときは直にこの助詞に接しうるなり。

次には又體言は職能の上より見て他の語類と區別しうべし。即ち體言は思想の骨子となるものなれば或は思想の主體となり客體となり又補充となりうべし。今一二の例をあぐ。

主體となりたるもの。

花は咲かず。我は學べり。一は大なり他は小なり。五は十の半なり。

客體となりたるもの。これは形式用言即觀念の廣汎にして殆ど素のみをあらはす用言に客位觀念として補填せらるるもの。

池の水はうす氷せり。紅葉せぬ常磐の山の松が枝に。

花の如き顔。我が如く物や悲しき。十の如き數。

これは馬なり。之を書きたるは我なり。二と三との和は五なり。

人たらむ者は道を守らざるべからず。

補充となりたるもの。

人に物を與ふ。我は汝に彼を紹介せむ。

五に三を加へよ。

又はゆる修飾的成分となることあり。體言の修飾となれるものはかの助詞の「が」等にて示さる。

櫻の花。我が物。一二の兵卒。

用言の修飾となれるものは多くは助詞に「と」をそへて示す。

我と手を碎く。誠に然らむ。

以上に述べし所は體言全般に通じたる用法なり。之よりかの三別にうきてのハ、

(III) 名詞

一 名詞の性質意義

これは事物の概念を直接に代表せるものにして所謂名目の詞と稱せらるるものこれなり。

名詞は概念其の者を直接にあらはしたるものなり。この故に其の概念は思想の對象として立ちうべく、從つて實在し、又は實在せるものなりと思惟する箇體的觀念ならざるべからず。其の實在すと、思惟せらるるものは想像的のものにては理想のものにては、空想的のものにては、事實的のものにては、具象的にても抽象的にても形而上にては形而下にてはともかくにも或る實在をあらはすものならば、

之を實體言即名詞と稱す。されば、

天帝、神、天堂、寂光土、夜見、常世、美、真、善、道德、權利、勢力、
鬼、幽靈、雷獸、學問、苦勞、運動、人、馬、鳥、魚、山、川、大洋、草、
木、梅、藻、石英、玉、金、鉛、元素、原子、量、數、關係、進化、退歩、
罪惡、

などみな名詞たるなり、眞偽善惡美醜は關する所にあらず。

すべていかなる語にても、之を一の概念として其を思想的對象として思惟する時は直に名詞の資格たるなり、其の例左の如し。

「既には所謂副詞なり。」ばは接續をなす助詞なり。

「咲くは動詞の終止法なり。」散ればは接續助詞を有する用言なり。

「かなは感動をあらはす詞なり。」

かゝるものなれば、いかなる詞にても思想の對象として即一の概念として取扱はれたるものは皆名詞たる資格を與へられたるなり。

用言より體言に轉化せるもの頗多し、今この間の消息を明にせむ、用言は元來屬性をあらはすものなるが、この屬性を具有せる實體を名づくるに其の用言の一變化を以てすることあり、次の例の如し。

氷、かすみ、たしみ、かみそり、使、侍、うたひ、ねがひ、

かく具體的のものに名づくる外に、又其の屬性を抽象的に一の概念とすることあり、たとへば、

赤、白、黒、悲しさ、樂しさ、

等の如し、これらは皆用言より轉じて眞の體言の資格を有するに至りしものなり、然れども用言が體言の資格を有するは頗多様なる方法によるものなれば、その第四章に至りて説明すべし。

二 名詞中特別の注意を要するもの

從來文法家によりて或は副詞の如しと唱へられ或は接續詞と稱せられ、又は接辭と稱せられたるものにして、しかも名詞なるもの、頗多きなり、吾人は今この誤を正さむとす。

かくの如きものは皆名詞中にありても特別なる性質を有せるものにして、自然かゝる誤認も出て來るなり、即その特別なる性質を有せるものとは、一は其の意義頗廣汎にして、單獨にては如何なる意義なるかを仔細に捕捉し難きまで見ゆるものなり、一は事物の間の關係を抽象的にあらはせるものなり、この二つのもの、これ往々世人の誤認を蒙りたるものあれば、吾人は聊之につきて言を立て以て其の本性を説明せむとす。

其の意義廣汎なるものとは事物の理としては、「故」爲「普遍」の形式としては、「時間」

「處」事「物」なり事物の程度にては「ほど」「位」ころ事物の列舉的形式にて「條」「件」の如し。これらは皆其の概念をあらはし文の主となり、客となり、補充となり又添加語となる等は他の體言と異なる點なけれども、其の意義甚廣汎なれば必ず之を制限せしむるが爲に他の語を上加へざるべからずしかれども又まゝ單獨に用ゐられたることなきにしもあらず、之を接辭とし、又接續詞なりといふ人あれども、皆本義をあやまれるものなり。

頃しも秋の長月の。 頃は霜月十五日。 この頃の空のけしき。
夜をあくる頃起き出でて。 元祿十年ごろ起りたる。

時は秋になむありける。 時のみかど。 ちもひいづる時ぞかなしき。
すこしよわき所つきてなよびすぎたりし。 申す所尤いはれたり。
いとむげに心にくき所なきありさまを。 汝が恨む所其のいはれなきにあ
らねども。 ちほされむ所をもはくからずうちいて侍りぬる。

にごりにしめるほどよりも。 おなじほどそれより下らうの更衣。
月のほどになりぬれば。 夜中すぐる程になん。 程は雲のになりぬとも。
きんだちの御ためには。 奈良の都にゆきてこむため。 つくまの神のた
めならば。 此折のさよらをつくしたまはんとするため。
うちなきてやみぬべかりける間に。 桂のみこに住み始めけるあひだにか

のみこあひ思はぬけしきなりければ。 旅へいくあひだに盗人あひたり。

木立ちもしろく前裁などもかしくゆえをつくしたり。 こゝにさへうら
みらるゝゆえになるがくるしきこといなげき給ふぞ。 ゆえしもあるごと人
のみらくに。 人ひとりと思ひかじづき給はんゆえは。

たいめんせて、月日のへにける事わすれやしたまひけむ。
御あくりにもまゐり侍るまじきことなか／＼にもちもひ給へらるべきかな。
かくてこれらの上に來れる文はこの體言を修飾すること、勿論なれど其の體言
の意義廣汎にして唯上に來る文を結束して體言の資格を有せしむるのみに止ま
るが如くなれば、上下二文の意義のみ著しく見え従つてこの體言が接續詞なりと
誤解せらるゝことあり、又單語が之を修飾せる場合にも、なほ其の意義廣汎たるが爲
に修飾せる語の意義が強く聞ゆるによりて、接辭の如く見らるゝこともあれど、そ
はなほ體言たるなり、これらは特別にことわりあかざるべき事なれど、殆ど一
般の人々の惑ひとなれるさまなれば、注意せむとて特に取り出でたり。

事物相互の間の關係をいひあらはせるものは空間にては「前」「後」「上」「中」「下」「左」「右」
時間にては「前」「後」「始」「中」「終」等なり。

これらは或實體概念を以て其の關係を生ずべき基點として、其の方向、轉位、範圍
を示すが爲に多く用ゐらる。かくてこれらは、起點を示す助詞によりて基本たる名

詞の間の關係を示す。

箱根より東を坂東といふ。 泣くより外の慰めぞなき。

今より後はかゝる過すな。 かしこより南は人の領なり。

花より外に知るものもなし。 こゝから西へは行くべからず。

これら皆上の名詞又は其の代用たる體言を起點としてそれよりの方向範圍を示して、こゝに一團の觀念を生じたるなり。この用法は關係を示すものにあらずばなし能はざるなり。なほ助詞の「より」「から」の條をも参照すべし。

又「が」といふ助詞によりて他の名詞との複合語をつくり、事物の存在の時間空間、方向等を示すことあり。

小山の上に田家あり。 橋の下の菖蒲。 今日の中に行く。

箱の中に蜜を貯ふ。 穴の中に住む。 出立の前の用意。

關係を示す名詞は上の如く場所方向等を指示するに用ゐらるゝによりて自然西洋文典の時所の副詞の譯語にあてざるべからざるよりして往々この體言と助詞との合成を副詞と誤認したることあり。我にありては體言と助詞の意顯然たるものなれば、決して之を副詞と稱すべからず。かゝる誤解も往々あるによりて、これも亦特別に注意しおかむとて、かくは取り出でたるなり。かへす、くも西洋文典の譯語に拘泥すべきにあらず。

名詞に附隨して之に關する接辭をも説くべきなれど、すべて第五節に譲りて、こゝにはいはず。

(三) 代名詞

一 代名詞の性質及分類

代名詞は體言の一種にして實體其の者を直接にあらはさずして、たゞ其を間接に指示せるものなり。

英獨文典にいふ代名詞と我が代名詞とは似たるものなり。然れど我がいふものとは範圍を異にす。一にすべきにあらず。又彼には人稱指示物主關係疑問など代名詞中に種類を多く立てたれど我にはかゝる區別を設くる必要なし。關係代名詞は我に存在せず。疑問代名詞も彼れには用法上の必要より一類を立つれど我には唯意義の異同を他の語との上に見るのみ。物主指示は我にありては、所謂人稱代名詞に助詞を加へて示すにすぎず。この故に余は別の方途によりて我が代名詞を分類せむ。

先代名詞を其の指示の性質によりて二類に分つべし。一は反射指示、一は稱格指示なり。反射指示とは說話者の意向を離れて、實體其の者をさすなり。即實體其の者を絶對的に指示するものなり。多くは一旦あらはれたる體言につきて其の本體を

さすに用ゐらる。こゝに屬するものは、唯一語あるのみ。稱格指示とは説話者の意向によりて區別せられたる指示の方法をとれる代名詞をいふ。

二 稱格指示の代名詞

稱格指示とは説話者の意向と相關する點に於いて其の指示の方法に異同を生じたる代名詞をいふ。

稱格は通例之を三種に大別す。説話者自身を指して稱するものを第一稱又は自稱と稱し、其の説話者の對手となりて、説話をうくるものを指示するとき、之を第二稱又は對稱といふ。以上の二者、人ならざるべからず。若人ならずば、人は人に擬せられたるものならざるべからず。説話者自稱するにもあらず、又對者をさすにもあらず、第三者、即説話中にあらはれ來る事物をさすを第三稱又は他稱といふ。この第三者たりうべきは、一切の實在物なれば、人より始めて、事物に至るまでを指示するなり。第三稱はかくの如く事物全般に渉るものなるに、かの譯語的文法に於いては、第三人稱といふ名に惑溺して人のみに限れるが如くいふは陋なり。かくの如き見解よりするが故に大なる誤謬を生ずるなり。なほ進みていへば、かの西洋文典の Personal pronoun といへる術語も吾人の如き解釋をとりて進まばいさ知らず直に人の稱格なりとすれば大なる誤謬を來すべし。見よ、third person は決して人に限らざるなり。且又かれは第三人稱に於いて男女中の三性を分つなり。この第三人稱に

性の區別ある所以は第一人稱及第二人稱にはこの區別なし。これ即あらゆる名詞を代表しうることを示すものなり。即西洋文法にてはすべての名詞を性の區別にあてはめて以て文法上の繁雜なる規定をなせり。第三人稱はこれらすべてを代表するものにして男性の名詞は男性の代名詞にて代表し、女性の名詞は女性の代名詞にて代表し、中性の名詞は中性の代名詞にて代表せしむるが故に、かく三性を區別する必要あるなり。而かくの如く有象無象あらゆるものに性の區別をあたるが故にこれらのものを Person 即人稱と稱するに於いて少しも差支なく、寧かく稱せざるべからざる必要あるなり。しかるに譯語の面のみを辿る日本文法家は、その Person 又は人稱といふ字面にのみ心を奪はれて、第三人稱は彼誰の二なりなどいふに至りては噴飯の極といふべし。第三者の中其のさすものにつきて又區別を立て示すことあり、人をさすもの、事物をさすもの、場所方向をさすもの、かくて又これらのうちにて二種の稱格を區別す。一定のものをさすものと、不定に指すものとこれなり。之を名づけて定稱不定稱といふ。定稱のうち、又三種の稱格を分つことあり。人、事物及場所、方向につきては、第二者よりも、第一者に空間的に精神的に親近せるものは之を近稱といひ、第一者よりも第二者に近きか親しきかを中稱といふ。第一者より見れば近稱よりも遠きか疎きかして、しかも次の遠稱よりも近きか親しきかの關係を有するが故なり。第一者、第二者に共に近きか親しきかの關係を離

れて指示するものを遠稱といふ。之を表示すれば次の如し。

第一稱	第二稱	第三			不定稱	
		近稱	中稱	遠稱		
わ、	な、	こ、これ、	そ、それ、	か、あれ、	た、たれ、	人
われ、	なれ、	こ、これ、	そ、それ、	か、あれ、	なにれ、	事物
あ、	なむち、	ここ、	そこ、	あそこ、	いづづら、	場所
あれ、		こちら、	そちら、	あち、をち、	いづかた、	方向
		こなた、	そなた、	あなた、		

方向を示すものは時間を示す名詞との間に紛れ易き點あれば、一言すべし。こに方向といへるは唯空間にかぎらず、時間進行上の方向にも用ゐるなり。たとへば或一點より説話者に近づき來るものを近稱とし、説話者に遠ざかり行くものを遠

稱といふ。

此しだいに書きつくすべきにあらず、こちよりての事をぞ記すべき。

(榮花物語)

(源、柏木)

此二三年のこなたになん。

(源、蓬生)

第一稱第二稱及第三稱の人及事物の指示なるものには、音の加はりたるものと加はらぬものとの二様あり。この二種は用法上自然に區別あり。第一稱第二稱及第三稱の人の不定稱なるもの、わ「あ」「な」「た」は「が」といふ格助詞に接して下に來る名詞を限定す。

わが物、あが佛、なが親、たが袖

又名詞に直に接することあり。

わぬし(我主) わちもと(我御許) なむち(汝貴)

この「なむち」は通常第二稱として用ゐらるゝものなり。「わぬし」「わちもと」も亦然り、かくてこれらは「の」といふ格助詞には接することなし。

第三稱の事物の指示たる「こ」「そ」「あ」「か」は上の人のと反對に「の」といふ格助詞には接すれど「が」に接するは「そ」のみなり、而して「の」にて下名詞に接するものはなほ

その名詞を限定する意あり。

この人、その物、あの山、かの船、そが中、

又この「わ」「あ」「な」「た」「こ」「そ」「か」は格助詞に接するにも制限あり。即「わ」「あ」(第一稱)

「な」「た」(第二稱)、「こ」「そ」(第三稱)には

「わ」をまつ、あをしぬぶらし。なをまつ。こをみよ。そをとれ。
とをを附屬せしむる例あれど「た」「か」には「を」を附屬せしむることなきが如し、又

「に」に接するものは例少し。
「わ」になたえそね。たにかもよらむ。
などの如きまことにまれなり。

この外「こ」「そ」「か」「あ」は直に名詞に接すること稀にして普通には唯、

あやつ、かやつ、こやつ、そやつ、
の例をみるのみ。

西洋にていふ物主代名詞、指示代名詞は皆「の」「が」にて名詞に冠せられたる代名詞の用法を以て譯しうべきなり。

三 不定稱代名詞の性質

不定稱の代名詞は其のさす處の實體の確定しをらぬものなるがこれに三種の用法あり。

第一は汎稱といふ不確定に、これと定むることなくたゞ漠然と指示するものなり。これらは「皆」「すべて」などの意に同じき用法なり。二三の用例を次に出す。

所詮たれくもかけさせ給へ。

(保元物語)

たが秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色に出ててまださうつるふ。

(古今集)

いづれもくかへりごとみえず。

(源末摘花)

つまとりの里云々いづれもをかし。

(枕草子)

津の國のなにはさもはず。

(古今集)

みちのくはいづはあれど鹽がまの浦こぞ船のつなでかなしも。

(古今集)

いづしにかもかすみにけらし、みよしのやまたよるとしの雪もけなくは。

(玉葉集)

第二は選擇なり。汎稱と似たれど、其の多數のうちにて、自一を選出せむの下心あるもの。これが反語にて打かへさるゝときは甚強き意にて、一切の場合に通じたる汎稱となるなり。

たれをかもしる人にせむ。住吉の松も昔の友ならなくに、
君さふる涙にぬるゝわが袖と秋の紅葉といづれまされり。

(古今集)

(後撰集)

わびはつる時さへものゝかなしきはいづこをしのぶ涙なるらむ。

(古今集)

いづくにかよをばいとほむ心こそ野にも山にもまよふべらなれ。

(古今集)

雪ふれば木ことに花をさきにける。いづれを梅とわきてをらまし。

(古今集)

風ふけば方もさためずちる花をいづかたへゆく春とかは見む。

(拾遺集)

反語なるによりてかへりて強き汎稱となれる例は、

水鳥の玉藻の床のうきまくら深き思ひはたれかまされる。

(千載集)

咲花はちくさながらにあだなれどたれかは春をうらみはてたる。

(古今集)

いさとしいけるものいづれか歌をよまさりける。

(古今集)

世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふはせになる。

(古今集)

君をのみ思ひこしぢの白山はいづかは雪のきゆる時ある。

(古今集)

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきに戀ひんとか見し。

(古今集)

言の葉をたのむべしやは秋くればいづれか色のかはらざりける。

(古今集)

第三は不明なる實體を指示するもの名の明ならぬもの本體の明ならぬものを示す。この用法よりして疑惑質問を陳述するに不定稱代名詞を使用するなり。この用法をのみ見てこの種の代名詞をかの疑問代名詞にあつるは一部を全部に無理にあてむとするものなり。

春まけてものがなしきにさよ更けてはぶらなく鴨たが田にかすむ。

(萬葉集)

たれしかもとめてをりつる春霞立かくすらむ山のさくらを。

(古今集)

花ちらす風のやどりはたれかする我にをしへよゆきて恨みむ。

(古今集)

内外なくなれもしなまし玉たれのたれとし月をへだてそめけむ。

(拾遺集)

うれしきを何に包まむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを。

(古今集)

春霞たてるやいづこみよしの、芳野の山に雪はふりつゝ。

(古今集)

いづかたにゆきかくれなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ。

(後撰集)

わがやどをいつならしてかならのはをならしがほには折にあてする。

(拾遺集)

深く思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきてちりぬる。(後撰集)
これら三種の用法、いひもてゆけば、一になりぬべし。されど、又これを分ちて見る
方惑ひすくなかるべし。余がこの區別を立てしは主としてかの所謂疑問代名詞に
混合せられむを防がむとてなり。

五 反射指示の代名詞

反射指示として、實體其の者を稱格に關せず、絶對に指示するものは、ちのれといふ一單語あるのみなり。

この「ちのれ」といふ語は稱格に關係せぬものなるが故に、第一者にては、第二者にては、第三者にては、それが指示として立ちうべく、随つて其の實體は其處に必存在すべき等のものなり。之を反射といふは實體其の者の本體を射光的に指示するが故に、吾人と其の者との思想上の關係は恰も物影の反射するが如き性質を有せるを以てなり。これに似たるものに「みづから」といふ語あり。こはまゝ指示の代名詞と混同して用ゐらるゝが、そは轉用にして本來は副詞たるなり。しかして其の意似たるを以て「ちのれ」に混同して考へらるゝことあれども否なり。副詞の條にとくべきなり。且又「みづから」と意義の類似あるよりして「ちのれ」は所謂副詞の類と誤認せられたる事もあれど、次に示す實例によりて體言たる性質を有するは明なり。かくて又説話者の自體をもさすが故に、自稱の代名詞に轉用せらるゝこと多し。これを以て

又自稱の代名詞と誤認せらるれど、そは本來のものならぬなり。

紅葉せぬときはの山に住む鹿はちのれなきてや秋をしるらむ。(後撰集)

風をいたみ岩うつ波のちのれのみ碎けて物を思ふ頃かな。(詞花集)

山水にちのれいせぬちよをせきとめてちのれうのろふ白菊の花。(新千載集)

ちのれし酒をくらひつればはやくいなんとて。(土佐日記)

ちのれは又れ音を添へてちのれともいふ。然るときは用法亦局せり。今少しく之を説かむ。

「が」といふ格助詞に接すれど、「の」に接することなし。

ちのが姿、ちのがじ、ちのがむき、ちのがよ、

重ねて多くの人の本體を個々にさす。

ちのちの

又直に名詞に接することあり。

ちのづま

「が」以外の格助詞には接することなし。他の助詞には稀に接す。

ちのもちのも、ちのともちのやうらもつきたり。

さて、これは自稱の指示に轉し、再對稱に轉じて對者を輕侮するに用ゐらる。但自稱に用ゐらるゝときも卑下したる意を寓せらるゝなり。

ものれらがたぐひに至るまでをかけて數ふるに幾多もなし

これはあのれが子にせよ我れは知らず

あのが主は人にてはありなんや

このものれ轉じてあれとなりては全く自稱の指示となりはてたりと見ゆ對稱に轉ずること亦同じ

ほととぎすあれよかやつよあれなきてぞ我は田に立つ

(枕草紙)

あれは何事いふぞとねりたつるあればかりのおほやけ人をわが打ちたらしむに云々

(宇治拾遺)

以上代名詞の大意なりすべてこゝにいふ名詞代名詞は西洋の名詞代名詞に似たりとすとも其の間に差あるなり彼れの名詞代名詞には男女中の性を分ち單複の數を區別し又格を區別すこれら皆其の語形の中に存在するを以て自然にかゝることを説く必要あるなり我には男女中の性を區別する事なく又單複を區別することなし又格といふものはこれらの單語の語形内に存せず若男女を分つべきときは唯これを語をかへて又は修飾語を加へて示すしかもそは意義上然るのみにて動詞等に關係するものならず數も亦然り通例は單複を區別せずして示す然れども複數なることを特別に示す必要ある時は接辭を附して示すしかもそれまた意義上にとゞまり動詞等と關係を生ずることなし格といへるものは助詞にて

示さるこの故に國語にてはこれらにたつきてこゝにいふべきことなきなりこれ實に我體言は唯概念を裸體的に示すに止まるを證するものにあらずや

(四) 數詞

一 數詞の性質分類

數詞は客觀的形式體言にして事物の個數分量をあらはす詞なり

數詞は其の示す處の概念の異同につき二種に分つ數をあらはすものと量をあらはすとなり

數をあらはすもの 一、二、三、五、十、百、千、萬、億

量をあらはすもの 皆、少、悉、あまた、幾

從來數詞といふ目を設くる人といへども量をあらはすものを同類とせしを見ず今吾人は一個の獨立概念をあらはす單語を體言とすといふ點より見れば上の量をあらはすものは勿論體言なり而して又體言を其の實體を直接にあらはすものと間接にあらはすものと區別せばこは亦間接に形式的にあらはすものなり而してそは代名詞の類にあらはす數をあらはすものと同種たるべきは本性の然らしむる所なり抑數と量とは一方を一類の詞と立て一方をすて顧みざるべきまで區別あるものなりや大槻氏はく

數詞も亦名詞ノ一種ニテ事物ノ數ヲイフ語ナリ其用法位置文中ニアリテ正ニ名詞ニ同ジ

數詞ハ固ヨリ數ヲイフ語ニテ名詞トハ語性意義異ナレド其用法位置文中ニアリテ正ニ名詞ニ同ジケレバ名詞ノ中ニ加ヘタリといへり然れども所謂名詞の用法と數詞の用法と少差なきにあらず後にとくべし其の性質意義の異なるはいふまでもなししかも語性意義が異なるのみにして用法位置が名詞に同じとして名詞中別に一目を立てしものとすれば量は如何にすべきか量は語性意義に於いて名詞よりも非常に近く數に似たらざるや吾人は別の見地よりして數量を一括しうるものなれどたゞ大槻氏が何故に量を加へられざりしかを知らむとして遂に知ることを得ざりしなり然れども大槻氏が吾人に數詞を西洋文典の意義ならて名詞中の一目と立てむ事を教へられたるは多とすべきなり

他に全然西洋文典の所説に基きて數詞を説く人あり和田萬吉氏の説明最詳なり左に之を引かむ

一より始めて百千萬に至る迄凡そ數字を以てあらはす詞は悉數詞なり然れども數詞とは素名詞に直接若くは間接に添ひてそれがあらはす事物の數又は序次を示す詞の謂にして事物を離れて抽象的に用ゐらるゝ數は數詞より轉じ

て名詞となれるなり

かく氏の説は全く西洋文典の考へなりこれ果して可なるか抽象的に用ゐたると直接間接に名詞に添ひたる數詞と何等の重要な單語上の區別が國語に存在せるか三年五月などいふと松山花がめといふと何等重要な文法上の區別ありや「すぢの道」「もとの松」と「山の杉」「里の梅」との間に如何なる語法上の區別ありや「道」「すぢ」「松」「も」と「子」「正行」「東京市麴町區」との間に何等文法上の區別ありや吾人は西洋文典の觀念の直に我に適用せらるべからぬをいひてやまんのみじかも氏は西洋文典にいふ量を示す數詞をかぞへず片落ちといふべし其他岡倉氏といひ草野氏といひ誰もこれを數詞の目の中に加へたる人なし殊に草野氏に至りては頗怪むべき解釋をとれり

氏は數詞を以て事物の數量を示すものとしながら左の如くいへり
數ノ意義ヲ有スル詞ニテモ幾何若干數多等ノ如キハ名詞ニシテ數詞ニズ
ラズ但シ下ニ數詞ヲ有スル幾萬數百何千ノ如キハ數詞ナリ萬一ノ如キハ
普通ノ數詞ニハアラネド亦數詞ト見ルベシ

氏は全文字によりて數詞といふ目を立てしに似たり語性意義用法は如何に思はれけむかの和田氏の「數字」云々の説によく似たりかの「萬一」は性質に於いて意義に於て用法に於いて到底所謂數詞にあらず全く氏が立つべき副詞の類にあらずや

然るに文字に拘泥して數詞とするは誤にあらざらむや、又「幾何」と「幾百」と文法上如何なる差異あるか、又如何なる重要な意義上の差異あるか。「幾萬」「幾百」「何千」が數詞ならば「幾何」「若干」「數多」等も亦當然同部類にあらざるや。

抑數と量とは其の本一なり、共に事物の存在の形式を俱存的に觀察したるものなり、其の異なる所は數は或單位を確定しこれを基本として、其の單位と其の見ゆる量との間の數量的關係を明にしたるものにして、量は單位を以て精密に比較せずして大まかに其をあらはしたる點に存す、この故に數は量を基本とす、量は事物存在の基本的概念なり、而してそれらは事物の俱存的形式の概念をあらはしたるに於いては一なり。

かくて、これらは又用法に於いて一致す、文の主體客體となること、助詞に接するさま、これらは皆體言通有の資格として數へらべし、しかも之を有する外になほ特別の用法あり、そは他の體言の上において、其の數量を限示し、他の體言の直下に來りて其の數量を限定し、又體言についての述語たる用言等の上において、はるかに體言の數量を限定して示す、かくて其の概念には別に異同を生じたるにあらず、數量を示す概念としては終始一なり。

二、量を示す數詞

量を示すものには、定量を示すものと不定量を示すものとの二種あり、定量を示

すとは其の量を一定して示すもの、不定量を示すものとは其の量の不明なることをあらはすものなり。

定量

皆、悉、少、あまた、こゝたく、もろく、

不定量

幾何、若干、いくら、いくぞ、

等なり、今この用法の一例を次に示さむとす。

一、のどいふ助詞を伴ひて名詞の修飾語となる。

皆の衆、悉の人、少の物、幾何の田、若干の黄金、大方の人。

二、のを伴はて直に名詞に修飾語となる、但例少し。

皆人、

三、文の主となり、客となり、補充となりたるもの。

これはもろく、にまさりていみじう時めき給へば、

(榮花花山)

殿の中將の君、内の大殿の公達を、こらにすぐれてめやすく、花やかなり。

(榮花初音)

もろもろはさけくとまをすかへりくまでに。

(萬葉集)

四、名詞の下にありて其の量を示し、體言の有する一切の格をなす。

諸の神たち皆はかり申さく。

(延喜式祝詞)

いづれの御時にか女御更衣あまたさふらひけるなかに云々。

(源桐壺)

かきほなす人の横ごとしげきかもあはぬ日あまた月のへぬらむ。

(萬葉集)

これらは(五)の場合と紛るべくいづれともいはれむなほ二三の例をあぐ。

一生いくばくもあはせじ。

(榮花峰の月)

長き夜のやみをたどる人いくそばくかある。

(榮花鶴の林)

作りいだせる文そこばくの中にはすぐれたり。

(空穗祭の使)

五、述語の上において語をへだて、體言の量を指定するものなり。

我が友は皆學生なり。

親族は 集まれり。

紙を少借し給へ。

柿の實そこばくみのれり。

(源帚木)

人のありさまをあまた見あはせん好みならねど、

(源あふひ)

さておねの子はいくつかつかうまつらすべう侍らむ。

あぼつかなくまの神のためならばいくつかなへのかすはいるべき。

(後拾遺集)

吾人がいへる量を示す體言を以て所謂副詞とするもの滔々として皆然り。然れども、そはただ西洋文典の直譯にして取るに足らぬことは以上の實例之を證して

餘りありあへて多言を費すを要せざるなり。

三 抽象的の數をあらはす數詞

我が國語の數をあらはすものには二種の語源あり。一は漢語源一は固有語源なり。今此の二種に分ちて述べむ。

固有語源の數をあらはす詞の單位及單位の集まりの十以下なるを示すものは

ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつ、むつ、ななつ、やつ、こゝのつ、

あり、ひとつの十倍をあらはすは「とを」にして以上十進の法をとるなり。

とを、そ、ひとつの十倍、とをは獨立に用ゐれど、そは附屬的にのみ用ゐる。

もも、ほ、とをの十倍、ももは獨立に用ゐれど、ほは附屬的にのみ用ゐる。

ち、ちの十倍、よろづ、ちの十倍、

各十進單位の十倍に満たざる倍數を示すには基本數をあらはす詞を十進單位をあらはす詞に冠して相當の倍數となす。

みそ、とをの三倍、いほ、五百、

すべて上なるものは下なるもの、倍數をあらはすが故に、よろづ以上は、よろづに相當の數詞を冠せしめて如何に大なるものにも示すことなり。これ、よろづ以上には十進單位の名稱なきが故なり。

やほ、よろづ(八百萬)

なほ特別なるものあり。即二十を「はたち」といひ、五十を「いふ」が如きこれなり。かくて或十進單位の數にその單位に満たざる數を合せて示すには其の満たざる數を十進單位の數の下に連ねていふ。この場合には其の中間に「あまり」又は「其の約なる「まり」といふ語を置きていふことあり。例は「はたちあまりいふ。みそぢまりよつ。」

固有語源の數詞は以上の如しといへども、未十分に發達せざりしもの故に、基本數をあらはすもの「及」とをの外は日常用ゐることなし。されば大部分は漢語源のを用ゐるなり。

漢語源の數詞の種類一切をあぐれば左の如し。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬、億、
なり。億以上兆京等あれど、日常用ゐることなし。「一」より「九」までは「一」より始めて順次に「一」を増加したる數なり。「十」は「一」の十倍なり。「百」は「十」の十倍、「千」は「百」の十倍、「萬」は「千」の十倍、「億」は「萬」の萬倍なり。各階級の倍數をあらはすことは固有語源のと同じ。
二十、五十、三百、四千、八萬、三千萬、五十億
「十」百等の階級に充たぬ數をそれらに添ふるには固有語の「あまり」の如く、「有」「又」の間に置きて示すことあり。然れども通例は直に下に添へて示すのみなり。
二十有五、三十又六、百一、二百五十八、三千七百六十九

四千三百六十七萬八千六百二十九

分數を示すには二様あり。又固有的方法と漢語源的方法となり固有的方法にては所謂分母たる數を先いひて次に分子たる數を示し其の分母と分子との結合に「が」といふ助詞を用ゐる。

みつがひとつ

されどこれは用法甚少し。漢語源にても又右の如くなれど、「又」といふ助辭にて示すこともあり。

三の一、十が五まで

嚴密に分數を示すには專漢語的方法を用ゐるなり。そは分母には分といふ體言を添へ、分母と分子との關係を「の」にて示すなり。これ現今最廣く用ゐらるゝものなり。

百分の十、五分の三

小數を示すには小數單位を示す體言を添へて示すなり。其の例

一分二厘五絲

等これなり。

四 具體的に數及量を示すもの。

上に述べしものは數を抽象的に示したるものなるが、之を具體的にせむが爲に其の數を示すと同時に如何なる事物の數なるかをも合せて示す方法あり。

一、ひとと夜、ふたり、みつぎ、よとせ、いつ月、むゆ日、七くさ、
しやこえ、九たび、とかへり、はたとせ、みそ文字、八十日、八千ぼこ、
これらは固有語源のにして、

二、一冊、二枚、三本、四脚、五輛、六尾、七度、八回、九人、百圓、
などは漢語源なり。

かく數の具體的なるものを示すが爲に數詞の下に附屬する詞に接辭なるあり。
體言たるあり。今其の大意を左にあげむ。

接辭の接するは固有語源の語根のみに限る。

たり、人を數ふることを示す。
ひとり(この場合には「音省かる。ふたり(これも)みたり、
か、目を數ふることを示す。但ひとかといふことなし。

ふつか(ふたかの轉じたるものなるべし。みか、よか、
へ、物のかさなりたるを數ふることを示す。

ひとへ、ふたへ、とへ、はたへ、
名詞を固有語源の數詞の語根に附屬せしめて具體的數をあらはすことあり。其

の例、
ひとより、太刀長刀の類を數ふ。

ふたはしら、神祇皇族などを數ふ。

みはり、弓提燈幕などを數ふ。

よかさね、衣服などを數ふ。

いつこし、腰刀を數ふ。

ひくみ、一定の數に束ねられたる物品の件數。

なごさ、ながもち等を數ふ。

やすぢ、細き形したるものを數ふ。

とながれ、旗の類を數ふ。

漢語源のには又漢語源の體言を添へて具體的の數を示すなり。

一枚、紙などの薄きものを數ふ。

二冊、書物などどぢたるものを數ふ。

三軒、家屋をかぞふ。

四本、樹木棍棒の類をかぞふ。

五人、人を數ふ。

六輛、車を數ふ。

七艘、船を數ふ。

八足、靴等はきものをかぞふ。

九首

詩歌をかぞふ。

十挺

墨又は鐵砲の類をかぞふ。

百帖

紙等をかぞふ。

千雙

屏風など對をなしたるものを一として數ふ。

かくて固有語源のには十以上のはあまり例なし。漢語源の數詞を以て固有語源の體言に接せしむることあり。

一羽

「は」とよむ。固有源なり。鳥をかぞふ。

十一ふり

二十五はり、百さを、六十すぢ 等。

不定量を示す詞「いく」を前述のすべての接辭及體言に接して不定の量を具體的に示すことあり。

いくたり

いくか、いくへ、いくふり、いくはしら、

いく枚

いく冊、いく軒、いく首、いく挺、いく人、

などの如し。又不定稱指示の「な」を轉用してこの「いく」の如くに使用することあり。但音を變じて「なん」と呼ぶこと頗多し。これは接辭に接することなく固有語源の體言に接すること稀に、唯漢語に多く接す。

なん枚

なん冊、なん軒、なん本、なん人、なん輛、なん艘、

なん足

なん首、なん挺、なん帖、なん雙、なん羽、

固有語源のには「羽」に接することあるのみ。

其の他の量をあらはすものはかゝる用法なし。

五 助數詞といふものにつきて論ず。

さてかの抽象的數をあらはす詞の下に附きて其が如何なる物の數を計ふるかを示す爲の體言を助數詞として之を數詞の一部と見る說世に行はるゝやうなり。今之につきて意見を述べむ。

先この助數詞と稱せらるゝものは、かの數學上にいふ諸等數の概念を示す距離度量衡貨幣等の階級的單位に該當するものも、又このうちに入るべき筈にあらざや、これらは唯一枚一冊などいふ類よりは遙に必要なるものなるは論ずるまでもなきことなり。思ふに助數詞の說を取れる人は之をも其の中に入るゝことに異議なかるべし。吾人も亦これを以てかの數の具體的なることを示す體言とすることは勿論承認する所なり。

かくてこの助數詞といふ目を設くとすれば、それは數詞のうちなるか、數詞の外なるか、若數詞の内なりとせば、それは所謂數詞と對立的に存在する價値を有せざるべからず。然れども吾人の思想はかゝる詞を數詞内のもものとして真正に數をあらはすものと對立的に認むること決してなし。之を數詞以外とすれば、助數詞などいふ名目は設くる必要なし。若なほ數詞以外にしてしかも之を一類とせば所謂接尾語

の類に入るべきなり。現にかゝるものを接尾語の中に入る、論者あるなり。かくて
數詞の接尾語は實に夥しきものとなりぬべし。

抑助數詞といふ一目は何に基きしものか。吾人は英獨文典などにて。

pair, dozen, pound, yard, pair, duzen, pfund, elle,

が我が所謂助數詞に該當する用法あるものなるを知り、且又これらが彼の所謂名
詞なることを知りたり。これを以て、吾人はかの助數詞といふものは西洋文典に
はなき名目にして全、我文法家一流の見地より生ぜしものならむを想像す。かの英
獨文典にて強ひて、助數詞とも名づくべきものを求めば所謂 *suffix* の中にて求む
べきなり。これ我が國語にては「ひとり」「ふたり」「たり」「ふつか」「みか」の「か」を以て之に
比すべし。これを以て、余はかれらを接辭といへり。かれの *suffix* の見地よりして見
ば、岡倉氏などの助數詞は到底接尾語の類として見るべからず、當然所謂名詞の類
ならずや。既に英獨文典になきものなればこれを置きし人はこれを以て國語特有
の法格と思ひての事ならむしかれども抽象的の數詞にそひて、其のさす實質をも
示すはわれのみに存する語法上の習慣にあらずして、彼にも存在する事實なり。今
大體に於いて西洋文典の典型をとれる人が、この點に於いてわざと異を立つるか
らには、何か特別の状態存すべしと思はるゝに吾人の見る所にてはかの英獨文典
の習慣と大なる差を發見しえざるなり。但國語の性質の異なるからは多少の相違

あるべきは自然の勢なり。少しの差を見て直に之を斷じ去るは學者のとるべき態
度かは。

今この説の由來する所を察するに、これは全、所謂助數詞なるこれら體言の説明に
窮せしより生ぜる一種の提案ならむ。さらば吾人はかゝることの數詞に限らず、他
の體言にも存在する性質なることを明示して以て助數詞の名稱の不當なること
を論ぜむ。

國語の體言の熟合法は種々の状態を以てあらはるゝものなるが、其のうち、實
にこの場合に該當するものあり。それ單語と單語との結合せらるゝに大別二種の
方法あり。一を主從複合といふ、一を同格複合といふ。同格複合のことは今用なし。主
從複合とは、二單語相結合するに上の單語が下の單語の從となりて、下の單語の意
義を限定するか、下の單語が上の單語の從となりて、其の意を確定するか、の關係に
よりて結合するをいふ。即、二者のうち、いづれか主となり從となりて、こゝに一の混
然たる概念をあらはす所の複合法をいふなり。

今この主從複合のうち、この具體的數をあらはす詞に類する他の體言の複合例
をあげさて數詞の例に及ぼさむとす。

(一) 上なる語が其の名稱を示し、下なる語が其の資格を示すものかくてこれら
は明確に指示する處ある一種の詞として使用せらる。

大日本帝國 東京市 豊臣秀吉公 富士艦

(二) 前と反對に上なるが資格を示し下なるが名を示すもあり。

太閤秀吉 大進生昌 能登守教經 水雷艇小鷹

(三) 又上の語が名目又は其の所在所有を示し、下の語が其の實質をさすものあり。

加賀絹 奉書紙 陸奥出羽按察使 吉野山

以上の如き關係は數詞と名詞との間にも行はれ、數を示すと同時に如何なる物の數を示すかをも明示するなりこれ上にいへる三例に於けるが如きものなり。

五人 十月 二篇 五十度 一石二斗五升

第一 二十五號 十番

上に述べたる第一、第二、第三の例と最後の例と其の歸する所は同義にして、一は其の實質を示し、一は其の名目又は數を示すなり唯先の例と後の例との異なる點

は名詞と數詞との區別のみ最後の例の如き體言を以て助數詞といはゞ其の他の例は助名詞といはるべきか。さる事は到底いはるべき等なきなり。これらは實に實質を示すが爲に附加せられる體言なり。名詞のこの用法は第一より以下の例明に之を證せり。この故に吾人の目より見れば單語と單語との複合より生じたるものなることをいはむと欲す。強いて之が名を求めば複成的數詞といはむ。

すべてこの章の初にもいひし如く、國語の本性は文法上の役目を分擔するに各特別なる語の存在するあり。かの西洋語の如きは名詞等に數、性、格、人稱等の變化を具へて一概念をあらはすと同時に、其れが關係をもあらはすものなるに、われにありては概念をあらはすものは、唯單に概念をあらはすのみ。されば數にありても亦かくの如し。この故に數の特別なる意義を示すには自然他の詞の助をからざるべからず。この故に我ありては所謂接辭の外に具體的數を示さむが爲に體言を添ふること西洋文典のよりも頗多きなり。さて西洋文典の接辭にてあらはすもの、又唯の數詞にてあらはすものも、國語にては複成的數詞にてあらはすを以て、かゝる用法を見ること多きならむ。

六 順序をあらはす數詞

さて世には順序數詞といふ目を設けて説ける文法家もあり。その説の可否はともあれ、數詞を以て順序を示すものを左に述べむ。

順序を示すには固有語源のにては「め」といふ接辭を加へて示す。

一ツめ 二ツめ

漢語源にては「號」「番」といふ體言を下に添へ、又「第」といふ體言を上添へ、又「第」と「號」「番」とを上下に同時に添へてあらはすなり。

一號 二番 第三 第四號 第何番

又これらに上の「め」を添へてあらはすことあり。

五番目の息子、七號目にあり。

第八番め 第九號め

但「第一」など「第」を上冠せしたるものに直に「め」を添ふることなし。

又具體的に數を示すものに「め」を添へてあらはすことあり。

三人めの娘、五合目に至る。

麴町三丁目、何人め、幾枚め

以上は數詞にある種の語を附屬せしむるによりて順序を示す用をなせるものなり。次にあぐるものはかゝる補助をまたずして直に順序をあらはすに用ゐらるるものなり。

「一」「二」「三」等を名詞上に冠せしめて以て順序を示すことあり。たとへば

明治二十三年十月三十日教育勅語を下し賜ふ。

の「二十三」「三十」は數量にあらずして順序を示したるなり。この時は「二十三年」十月

「三十日」は具體的の數量を示すものと形を同じくすれどその意義は異なり。而その

差はこの數詞の用法上の意義の差に基づくこと論なし。

さて上の如く用ゐられたるものゝ上に更に「第」を附くることあり。

第五卷 第六月 第七聯隊

の如きこれなり。

なほ一層單純なるものをいへば「一」「二」等にて直に順序を示すものなり。

一は甲某にして二は乙某なり。

なといふが如く又次の如きものもあり。

第一條 賞勳局ハ内閣ニ隸シ左ノ事務ヲ掌ル

一 勳位勳章及年金ニ關スル事項

二 記章褒章其ノ他賞件ニ關スル事項

三 外國ノ勳章記章ノ領受及佩用ニ關スル事項

これらの數詞は實にそのまゝ順序を示すに用ゐられしものなりとす。

さてこゝに聊論すべきは數詞本來の用如何といふ事なり。普通には數量を示すものを基本とし、順序を示すものを副次的のものとして説けり。されども「一」「二」「三」等そのまゝにて順序を示すに用ゐらるゝ事の例は上にあげし如くなり。之を以て考

ふるにこれらの發生順序は一の臆説にすぎず、或は順序を數ふるより轉じて數量をあらはす詞となりしものかも知られず、今少しく之を論ぜん。

今量を示すものはさておき數を示すものにつきて考ふるに、例へば「九」といふ數を示すまでには必一より始めて「九」まで數へ至らざるべからず、かく數へ至らずしては精確なる數を示すこと能はざるは論するまでもなきなり、かくて數をかぞへ至るといふ事は之を仔細に考ふるに、其のものを一個づゝの單位として順序を追うて進まざるべからず、この時の數詞は數量をかぞふるにあらずして、實は順序を立てて數へたるなり、かくてその順序を追うて進みたる「九」なる順序にあたるものにてすべてをかぞへ終れる時はその數量は「九」なりといふものゝ如し、この方面より見れば、數詞の本源は順序をあらはすものなるべきなり、即數詞の基本なる「一」「二」「三」「四」「五」「六」「七」「八」「九」は必順序を示す語ならざるべからざるなり。

こゝに於いて順序を數ふるものと數量を數ふるものとの本末論は遽に決せられざるものなるを見るべし、吾人はこれが本末に關する研究は文法學の範圍に屬せずと認むるが故に、上の數言にして之を止め、他日機を得ば別に之を發表せんとす。

七 數詞の用法上の特質

數詞はその順序をかぞふるものを別にして考ふるときは「一」の外は皆集團をあらはすものなり、即「二」は「一」の二個集まれる集團、「五」は「一」の五個集まれる集團、「十」は「一」の十個集まれる集團、「二十」はその「十」の更に二個集まれる集團、「百」は「十」の十個集まれる集團、「千」はその「百」の十個集まれる集團なり、さればいづれの數詞も順序を數ふるものは別として數量をあらはすものは皆數の集團を名づけたるものにあらずなし。

今この見地よりすれば「屏風一雙」「鉛筆一ダース」の「雙」「ダース」も數詞なり、何となれば「雙」は「一」の二個集まれる集團、「ダース」は「一」の十二個集まれる集團の名にして、明に數詞といはるべきものなり、これらは從來名詞と稱せらるゝを普通とす、しかれども數の集團をあらはす點に於いて他の「一」「五」「十」「百」等と何等の差なし、「一雙」「二ダース」「三十」「四百」これ皆同一の組織をなせり、今「一」「二」等を普通の名詞と區別して數詞と名づくる以上は「雙」「ダース」も亦普通の名詞の類よりいてて數詞の一種たらざるべからず、「百圓」「十石」「五斤」「六尺」などの「圓」「石」「斤」「尺」等は著しく數量に關するが故に數詞と誤る恐あり、されど、これらは數詞にあらずして名詞なりとす。

余はこゝに於いて數詞の特質を述べべき必要あるを感ず、勿論この特質につきは既に上に述べたれど、余はなほこゝに之を説くべし。

數詞が體言全般に通じたる用法を有することは今更之をいふを要せず、こゝには數量を示す方法を説くべし、これに六種の形あり、その第一、第二、第三は體言すべ

てに通ずる形なれど第四第五第六は數詞としての特性をあらはしたるものなり。

第一は直に名詞の上に冠せられたるものにして

ナポレオン一世は身を陸軍の一將校より起せり。

の如し。二世の「一は順序を示し、一將校の「一は數量を示す。これ既に説明せし所のものなり。

第二は連體語として名詞の上にあることなり。

七冊の書籍、三分の一の價、五人の朋友

第一の人、六番の生徒

の如し。これ亦順序にも數量にも用ゐらる。

第三は名詞を連體語として數詞の上におくことなり。

かゝる時に友の四五人も來れば嬉しからむ。

兄弟の中の五人目なり。

の如し。これ亦順序にも數量にも用ゐらる。

以上は順序にも數量にも用ゐらるれど、次下のものは順序には用ゐられず數量にのみ用ゐらる。但順序のものにも似たる用法あれど、意義を異にす。

第四以下のものは共に名詞の下にありてその數量を指定せるものなれど、その意義と用法との差によりて區別して説明を下したるなり。

第四は名詞の下述語の上に置かるゝものにしてその名詞が助詞を伴はざる場合の形なり。次の如し。

兄弟五人皆善良なり。

賣家五軒ありて此を買はむとする人五人あり。

この場合には名詞の直下にありてその數量を指定せるものなり。これが助詞を伴ふ時は、名詞と數詞とを直につらね、助詞をば數詞の下に附するなり。この形をば第五とす。

狐三匹と雉子五羽とを獲たり。

一間には檜五本を書き、一間には鶴二十五羽を書けり。

即第四と第五とにありては數詞と名詞は一團となりて他に對して一語の如き關係に立てり。

第六は名詞の下述語の上にあるて數量を指定せるものなり。

梅の木一本あり。兄弟五人皆善良なり。

の如し。かくぞの上下に助詞のなき者は第三のものともぎるゝ恐ありしかれども、意義は明に區別せらる。之が助詞を有する時は次の如く、

我が郷人は五人行きぬ。

この花を一枝賜はれかし。

となりて助詞の下に來るにて明なり。このものと第四のものとの別はその數量を示す意義の上に於いて差あるものなれば、注意を要す。

第六の用法に似たるものは順序にもあり。たとへば

我が朋友の性質は第一善良にして次に活潑なり。

の如し。この時の「第一」は明に順序を示してしかも述語に關しての順序を示したるものなり。しかれどもそれは述語にのみ關係して上の體言とは關係を有せず。この故に數量を示す第六のものとは著しき差あるを以てこゝに之を同一列に説かざるなり。

數詞のこの第四、第五、第六の用法は頗注目すべき價あるものにあらずや。吾人は國語と西洋語との差異も幾分かこの點に存在すと思惟するなり。さてもかの獨逸語などにていふ

Der Fisch ist einen Fuss lang.

の用法は我に譯して

この魚は一尺長さがある。

となすかより外に適當なる方法を發見せずとせば、これらが我が第六の用法に似たるものかなほ十分に研究すべき價値あるなり。第四の用法は

Uner zwölf ging zu ihm.

Es sind ihrer neun.

兄弟三人更王豈不賢乎哉 (史記)

博士諸生三十餘人前曰人臣無將將即反 (史記)

などの例を見ればなほ存在の廣き語法なりといふべし。

第二 用言

(一) 用言の一般性質及區分

用言とは體言に對して其の屬性觀念を表明すると同時に人間思想の統一作用をあらはす詞なり。而して其の統一作用をあらはすとが、即用言の用言たる所以なれば、中には其の屬性觀念の甚廣漠にして殆形式的なるあり。共に思想の統一作用に關するを以て用言の分類に統括せらるゝなり。

上述の如く用言は人間思想の統一作用を表示するものなるが其の統一作用の發現する場合は決して一樣ならず。こゝに於いて其の種々の場合に應ぜむが爲に用言は其の語形を變ず。かくて語形の變化するにつれて其の語の應用の場合を異にせり。然れども其の語形の變化につれて變化するものは用言の運用の場合の異なるのみにして其の根本の意義は更に變ずることなし。この語形の變化を稱して用言の活用形といふ。從來活用又ははたらきといへるものこれなり。今吾人はその

變化する作用をいふときにのみ活用又ははたらきといふ語を用ゐる。

用言の活用の方式は用言の種類によりて一定せず。舊來の國語學は之を四段活用上二段活用下二段活用上一段活用下一段活用加行變格活用佐行變格活用奈行變格活用良行變格活用久志幾活用志久志幾活用等に分つに略一定せり。然れども吾人は加行變格佐行變格奈行變格の三種につきては之を變格と稱するよりも加行三段、佐行三段、四段別格の名を以てするの便なるを主張す。

用言の本體は單獨に文の述語となりうる處に存す。之を用言の原形といふ。その用言を呼ぶにはいつも原形を以てするなり。この形は同時に普通の終止に用ゐらるゝが故に従來終止形といへり。

活用の數は用言の種類によりて一定せざれど、之を調攝して一定の模型を編成す。今次に之を説かむ。

第一は「ば」といふ助詞に接して述語となりつゝ之を假設條件的前行句として下句に接する語法をなしうる特徴を有する形なり。之を未然形と稱す。第二は述語となりつゝ之を次の文に重ねるが爲に用ゐらるゝ特徴を有する語形なり。之を連用形といふ。第三は文の述語となり、又はさならでも體言の裝定をなさむが爲に體言の上に冠せらるゝが如き特徴ある形なり。之を連體形といふ。第四は未然形の如く「ば」といふ助詞に接して假設的にあらて既存せる條件を示して前行句となれるも

を示すが如き用法を有せる語形なり。之を已然形といふ。次に命令希求の語法をなす爲に用ゐらるゝ語形あり。之を命令形といふ。以上五種原形をあはせて六種なり。用言の用法はこの六種に限らず、又悉くこの六種を具すとは限らねど、便宜の爲この六種を標榜して説明の規準となす。

用言は其あらはず觀念又は語の性質よりして種々に區別せらるべし。古來この區別につきて種々の説あり。富士谷氏は「裝」と「事」と「狀」との二つに分ち、鈴木氏は之を「作用」「形狀」の二種に分ち、富樫氏は「説動用詞」「説容體詞」の二つに分ち、大槻氏は之を動詞「形容詞」といへり。其のさす所鈴木氏までは「あり」を「狀」に入れ、富樫氏は「あり」を動詞の部に入れたり、かくて今人は殆富樫氏の説を奉ぜり。とにかくに動作作用と「形狀」との二様に分つことは古今一致せるなり。吾人は「あり」をいづれに入るゝかを外にして考ふとして、その命名寧ろ定義の實質に吻合せぬものあらむことを思ふなり。たとへば動詞の定義にて「草野清民氏の頗前後を顧慮して立てられたるものを見て、も直ちに知らるゝなり。

動詞ハ事物ノ動作ト狀況トヲ呼ブ詞ニシテ語尾ノ活用ヲナス者ナリ。例ヘハ「書を讀まん」船に乗めて行く「花落つる時」大なる山ノ「讀ま」乘り「行く」落つる「以上働作」大なる「有様」ノ如し。又「沖の坊に船見ゆ」ノ「見ゆ」モ一種ノ有様ヲ呼ブ詞ナリ。といへるに一方にては

形容詞ハ事物又ハ事柄ノ有様ヲイフ詞ナリ。

といはれたるに於いて二者の區別は明に知ることを得ざるなり即有様は兩者に通じて存す。然らば如何なる有様が動詞的にして如何なる有様が形容詞的なるかは明ならず。

岡倉氏又この二者を區別して

形容詞とは長短、輕重、善惡、美醜の如き、一切の性質を示す用言。

動作詞とは行爲若くは状態を示す用言。

とせられたれば、一見甚明瞭にして性質をあらはすものと行爲若くは状態をあらはすものとの別によれるが如し。然れども「淋し」「賑はし」の如きは状態にして性質に「あらず」かく考ふれば又迷はざるべからず。

岡澤氏の説明に曰はく、

用言ハ實ニ甲)スベテノ物ノ運動スナハチ作用ヲイヒテアラハス類ノモノト

乙)スベテノ有様スナハチ形状ヲイヒテアラハス類ノモノトニヨリテ二種ニ分類

セラル。甲ヲ作用言トイフ。乙ヲバ形状言トイフ。

いはれたり。然れども

作用言ノ例ヲアグレバ、云々「あり」^(在又)「居り」^(在)「似る」^(在)「成る」^(在)ナドノ如ク動モスレバ

有様ノ如ク思ハル、モノモ之ニ屬ス。

と自いはれたる如く、明瞭なる區別はあらざるなりしかしてこれらは到底十分に區別を立て、定義を與ふること能はざるものゝ如し。

然れどもかの二種の別は大體に於いて従ふべきものゝ如し之を獨逸文典に徴するに、

Das Prädikat oder das Ausgesagte kann zweifacher Art sein, wovon zweiertei Attributiva zu unterscheiden sind. Es ist nämlich entweder a) ein im zeitlichen Wenden begriffener Zustand, eine vorübergehende Thätigkeit; oder b) eine bleibende, feste Beschaffenheit oder Eigenschaft.

と云へりかくて所謂動詞を Zeitwort と稱するに徴してかんがふるに動詞形容詞の區別は其の文章の構成上の職能を外にしては動作状態性質といふよりも寧一時偶發性のものと多少固定的永在性のものとの區別なるが如し。これによりて試にこの區別を立て、所謂作用言を以て偶然性屬性を顯はすものとし、形状言を以て存続性屬性をあらはしたるものとせば、多少抵觸する處少かるべし。これによりてかの形状言作用言に新意義を與へむと欲す。かくして一切の用言はこの二つに區分せらるゝかといふに然らざるものあり、ありの如きは兩者のいづれにも通じらべし。しかも「あり」は兩者のいづれにも定むべからず殆純粹に統一作用のみをあらはすことあり。こゝに於いて之れと他と分つが爲に他の方面より用言を二分して一を實質用言といひ一を形式用言といはむ。形式用言と稱せらるべきものはあ

りのみに限らず、他にも存在するなり、それは後に至りて説明すべし。かくせば、實質用言の區分として、かの形狀作用の別を持来しうべし。しかもなほかの助動詞の類は歸する所なきなり。これら助動詞のうち吾人が形式用言のうちに收容したるものを除きたる殘餘は所謂動詞の統一作用の不足を補ふのみにして、所謂形容詞には直接何等の關係なきなり。而してこれらは一の單語にあらずして、所謂動詞の語尾の一部たるものなり。以上述べたる處を概括すれば、一切の用言は形式實質の二つに分れ、實質用言は亦形狀動作の二つに分る。其の系統左の如し。

形狀用言形容詞 (一)

實質用言

用言

形式用言

動作用言動詞 (二)

(三)

吾人は下に記したる順序を以て、次に説く所あらむと欲す。而して所謂助動詞の類は用言の本幹と同時に説くべき性質のものなれど、其の作用頗複雑にして混亂を生ぜむ恐あれば、別に一項を設けて之を説かむと欲す。今こゝに前の三者の意義を略述せむ。實質用言とは其の意義に屬性觀念充實して明瞭に存在せるものにして、形式用言とは其の意義甚廣汎にして臆げに或屬性をあらはすと見ゆるもあれど、それは唯極めて形式的なる普遍的觀念にして之に實質を有する語を添へては完

全なる意義を成就し得ざるものなり。實質用言の一部分なる形容詞は或實體につき、其がある固定性の性質状態にて存することをあらはすものにして、其の屬性觀念は更に發動的ならず、固定的存続的の靜止的性質状態につきて述べたるものなり。動詞とは時間的發動的の性質状態をあらはすものにして、其の屬性觀念は時間的制約の下に起れる發作的變遷的性質状態ならざるべからず。

(二) 形容詞

一 形容詞の性質定義

茲に形容詞と稱するは舊來形狀言と稱せられ、又形容詞といはれたるものなり。然れどもこのうちには形狀をあらはし、形容をあらはさぬものも頗多し。たとへば「無し」「同じ」「等し」「欲し」「空し」「惜し」「全し」は如何なる性質状態を形狀するか、殆其の意を了すべからざるなり。又事物又は事柄の有様をあらはすといふともかの動詞中にも「聞く」「眠る」等はなほ一の有様と見るべからずや。この故に有様性質状態等の語を以て區別すること殆困難なり。吾人の見地よりすればかの形狀言といはるゝも作用言といはるゝも共に性質状態有様をあらはすものゝ如し。しかも其の間に隠然區別すべき點の存在するを何人も認めざるはなかるべし。さりとて之を十分に説破することも亦頗難きわびなり。

吾人はこゝに一の解釋を試みたり。竊に思ふ。從來の説より一步は進めつらむか。形状言又は形容詞と稱せられて彙集せられたる語類は所謂「じきじき」活用の詞たるなり。吾人も之を一括して形容詞といへり。しかも從來の名は襲ひたるものゝ意義は別に與へむとす。抑これら活用詞の詞の特徴は、時間の制約に關せず存す。超時間的といはむも、没時間的といはむも共に語弊あり。吾人は未適當に之を名状すること能はずといへども、少くも時間に關せず、時間の豫想を有せぬは事實なり。この故にこれらは皆時間的形式の外に卓立す。しかして一切の陳述は没時間的に發表せらる。しひて之を時間的形式にあてむか、現在といはむか、恒といはむか、吾人は強ひて定むること能はずといへども、それら以外に過去の事實として之を陳述し、未來の事實として之を否定推測豫想せむことは、全この用言の關する所にあらざるなり。しかして又これらは空間に關しても頗無豫想なり。此の如く時間空間に關して所謂動詞と重大なる差異あり。これ其の區別せらるべき一大要點ならずや。之を以てかの所謂時の助動詞と稱せらるゝものゝ分出することのこの用言に存在せざることの本旨を領會すべしにあらざるや。次に又この形状言といはれしものは、其の事物の性質状態を靜止的に觀察し、內在的に説明すれば、其の性質状態は其の事物の存在する限り、其の本性の變易せざる限りは、永時移動することなく固定せるものなりとの條件の下に思惟せられたる、屬性の陳述なり。これ即ち

方より見れば超時間的、没時間的なる理由にして、かの所謂相の助動詞と稱するものゝこの用言より分出することのなき本旨も亦こゝに存す。この故に「惜し」といひ「樂し」といふ時は、其の屬性觀念は靜止的に固定的に心内に描かれたるものなり。「惜む」「樂む」といふ場合には發動的に心内に活動せる状態をあらはすものなり。吾人はかゝる意義によりて形容詞を設けたり。なほ動詞の條を参照すべし。之を以て試に定義を下し見むか。

形容詞は事物の性質状態の靜止的觀念として超時間的に心内に畫かれたるをあらはせる實質用言なり。……
ともいふべし。

今若形容詞を以て發動的なるもの時間的なるものゝ如く使用せむには、一旦形式用言に熟合せしめたる上ならざるべからず。かくて時間的性質をも發作的性質をも帯びて更に動詞の如き關係をも生ずべし。

次に形容詞の用例を挙げむ。
この山は高し。この海は淺し。

注意 この場合にありては「山高し」「海淺し」といふが如き例はなるべく避くべきなり。如何となれば、山又は海は高しとも、深しともいはるべし。本性なきなり。この故に何かこれを制限してその指す所を一定せしむる必要あり。然らずば

抽象的の「山」又は「海」とも見らるべきが故なり。その「山」その「海」の状態を心内に書きたるなり。

甲は善し。乙は悪し。

の「善し」「悪し」は静止的觀念として甲乙の性質を心内に書きたるなり。

逢ふは嬉し。別るは悲し。

の「嬉し」「悲し」は静止的觀念として心意の状態を心内に書きたるなり。

疾く走る馬。烈しく降る雨。

の「疾く」「烈しく」は静止的觀念として「走る」「降る」の事實の有する状態を心内に書きたるなり。

これら皆實は活動し時間的經過を有する事物につきての陳述なるにもせよ其の形容詞は皆ある性質状態の内在的、静止的、超時間的、没時間的觀念として心内に描寫せられたるものなり。

形容詞の活用は左の如し。

語幹	原形	未然形	連用形	連體形	已然形
あし	あし	あし	あしく	あしく	あしき
よし	よし	よし	よしく	よしく	よしき
あし	あし	あし	あしく	あしく	あしけれ
よし	よし	よし	よしく	よしく	よしけれ
あし	あし	あし	あしく	あしく	あしけれ
よし	よし	よし	よしく	よしく	よしけれ

こゝに原形と稱するものは用言の本體として通常用ゐる形式をさせるものにして、吾人がある用言を指名せむとする時にはこの形を用ゐ、又單純なる陳述をなす際にもこの形を用ゐるなり。即この種の用言の本體として主體に對して其の屬性觀念を陳述して統覺作用を完くす、これを終止の形と稱す。一切の用言然り。

こゝに示すが如く形容詞の表中にはいつも二種の語をあげることは所以あり。元來形容詞は形體上より見れば「し」「く」「き」「けれ」の四種の語尾あるのみなり。然れども其の中「久し」「悲し」の類は語幹に既に「し」音あるを以て原形の時に「し」の語尾を領して「久し」「悲し」といふを當然なりとすべき事、先哲既に論ある所なれど、古來の慣例は同音の重複して耳障りなるを避けてか必し「音一のみ即語幹のまゝ」にて原形として使用するを通例とせり。この故に權田氏の説もあれど一般に行はるゝ所によりて表には猶二種の語を標示することゝはなしたるなり。

未然形は主體に對して其の屬性觀念を陳述し、こゝに一の文をなしながら、なほ之を以て一層大なる文の成分として、之を假設條件を示す前行句たらしめむが爲に「ば」といふ助詞に接せしむるに使用せらるゝ形なり。

さてはこゝに未然形連用形と區別せるが如き差をたゞに用法の上とのみあらはすに止まらずして形の上にも差異を呈せるが故に之を一般に及ぼして三様に別てり。この故にこゝの差別は單に形式によりてのものにあらずして性質上の區別なりと考ふるを便とす。畢竟便宜上の方法にすぎず。

連用形の特徴は之を以て他の句又は語に重ねる作用をなすにあり。而してその重ねる状態は一ならず。通例五種の場合を見る。

(一)は句の述語として立てるものがその句よりも一層大なる文を構成せむが爲に並列的連文の前行句をなし、こゝに陳述の終結を中止して次の句に重ねるものなり。これ即句を句に重ねる場合なり。

例 かの人は丈高く、この人は低し。山高く氣すみたり。月さやけく、風冷なり。

例 松青く、砂白し。この例は「山高く氣すみたり」の如き一層大なる文を構成するに「山高く」が「氣すみたり」の前行句をなし、之を以て「山高く氣すみたり」として一層大なる文を構成せむが爲に並列的連文の前行句をなし、こゝに陳述の終結を中止して次の句に重ねるものなり。

(二)は或る體言に多數の連體語を有する場合にこの形容詞を以てしたる體言の直に體言に接せるものを除く外は、この形をとりて相重なりたることを示すことあり。

青く赤く白き貝

太く逞しき馬

この例の「赤く」「青く」「白き」と同等の資格を有し「太く」は逞しきと等しき資格を以て「貝」及「馬」の裝定たるなり。

(三)は同一の主體に對して多數の述語ある時最後の語の外はこの形をとりて重ねふなり。

例 水清く流る。壁を白く塗る。

かくの如く動詞に相熟して述語となれる場合と形容詞のみを重ねたる場合との如きものは文法上同形なりとす。然れども近時この場合の用法につきて論議するもの少からねば聊之を論ぜむと欲す。

抑從來の翻譯的文法家はこの第三の場合の如きもの殊に形容詞が動詞に重なりたる場合のものを以てすべて副詞なりとなしたり。近來に至り吾人の例示せしもの、如きにつきて所謂副詞ならぬ性質あることを唱ふる人あるに至り、實例

この「清く」「白く」は「流る」「塗る」に對してそれが屬性的概念を修飾せずして體言の屬性を指示せることは明なり。流る「塗る」の修飾ならば「早く」「遅く」の如きものこそよきはしからぬ。こゝに於いて之をかの「清く」「白く」の場合と區別せむが爲に一は形容詞的にして一は副詞的なるものとせる論あり。或は甲乙の命名をなせる人あり。これら

の論者頗國語學者を愚弄せるが如き口吻を洩せり。然れども吾人より見ればかれら論者こそ反省すべき必要あるなれ。いてやこれを論ぜむ。先問よべきは。何が故に形容詞副詞の區別を持ち來りて國語に強ひむとするか。先に吾人が論ぜし如く、吾人の形容詞は決してかれの形容詞と一ならず、唯僅に觀念の類似あるのみ。その職能に至りてはかれら形容詞の企て及ぶべからざる自由を有せるものなり。吾人はこの點に於いてかれら論者が猶深く國語を研究せむことを望む。又或論者は「烈しく」「速く」の如きは元來副詞なるものなりなどいふなり。これ亦西洋文典に惑溺せる言のみ。西洋文典の副詞はわが「烈しく」「速く」の如く、其の本性としこの職能が述語となり、體言の修飾となりうるが如き自由あるものなりや。これ亦唯觀念の類似によりて臆斷したるもの、而してこの論者に從へば吾人の形容詞は當然形容詞と副詞との二種に分たれざるべからず。然らば之を分つ文法上の法則は如何。希くは聞かむ。吾人の見地よりすればこれらは唯空の論議にして文法上何等の價値なきものなりとす。次に又用法、專用ゐられられたる意義によりて形容詞ともなり、副詞ともなるものとせるあり。たとへば

帽子を軽く造る。

帽子を軽く打つ。

といへば「軽く」は「造る」の修飾ならずして「帽子」の修飾なれば形容詞にして「帽子を軽く打つ」

の「軽く」は「打つ」の修飾なれば副詞なりといふなり。然らばこの形容詞副詞の別は何によりて生ずるかといふに、唯その用ゐる意義によりて、專思ひなしによりて分るるもの、如し、吾人は亦この説につきては前と同じき駁撃を加へらべし。かく副詞形容詞と時によりて何等文法上の制約なしに區別せらるゝが如きは文法上何の理由によりて語類の異なるものに分屬せしむべきか。又この論者の形容詞副詞の區別は單語の區分たるが如くにして又用法上の區別なり。吾人はそのいづれに従ふべきかを知らず。これ亦大なる西洋文典惑溺家といはざるべからず。今こゝに吾人の見地につきて述べ、上に掲げしが如き説をなせる人はその胸中いつも形容詞副詞といふことのみの往來せるあり。殆之に麻酔せられたるが如き觀あるなり。吾人も亦事實上まことに論者の如き意義上の差の存在せることを知れり。先二三の例を集めむ。

所謂形容詞的のもの

風涼しく吹く。

水清く流る。

帽子を軽く造る。

所謂副詞的のもの

風烈しく吹く。

水速く流る。

帽子を軽く打つ。

意義の上よりすればまことに論者の如くならむしかれども文法は單に意義の穿鑿に止まるべからず。今吾人は之を解するにこの上なる形容詞と下なる動詞との

間に如何なる權衡を保てるかを見るに勿論下なる動詞が主たるには相違なければ
ど孰なほその上に差等あるを見る。即形容詞的のものは文主に對しては形容詞も
亦多少述語的の性質を有せるなり。かくて下なる動詞と相熟して渾一體となりて
共に共に述語たるものにあらずや。副詞的のものは主として下なる動詞の意義を
修飾したるものなるが故に、自然かくの如きものを副詞と稱するに至りしなり。さ
てこはたゞ形容詞のみの相重なれる場合にも見ることもあるなり。

この山は高く大し。この山は著しく高し。

かくの如きを以て形容詞副詞の意義上の説明は決して全然誤謬なりと斷すべか
らざるに似たり。さりとはいへどかの論者は何が故に、こゝにのみ眼を奪はれて他
の類似の場合を顧みる餘裕を有せざるか。吾人はかくの如き例の動詞相互の間
も等しく存在することを見る。試みに例をあげむか。

風はいよく吹きすさぶ。鏡をつげうつ。
我心なぐさめかねつ。牛と熊とあひ争ふ。
雪きははつ。書をくりかへしむ。
父母は飢え寒からむ。木葉あらそひ落つ。
山をすぎゆく。衣をいそぎかふ。
この下なるは其の意義よりいへば皆副詞的なり。下なる動詞の修飾限定をなせる

ものなるは明に認めらるべき事實なり。吾人の造語ならぬことを證せむ爲に次に
古來の例を援く。

夏衣急ぎかへるかひもなく立ちかきねたる春の面影。(新後拾遺)
くりかへし思ひつづけて歎かな何を迷ひをしづのをだまき。(新續古今)
くりかへし我身のどがを求むれば君もなき世にめぐるなりけり。(新古今集)
跡慕ふ涙の袖のくれなるにあらそひ落つる筆のみみちば。(新千載集)
のりの師は我れも我れもとあをやぎのいと所せくみだれきて。(増鏡)
かくまでたどりありきたまふもをかしろ。(源夕顔)

これらの例いづれもこの用言の意義は上なる體言に關するよりも寧下なる用言
の意義に關するものなれば一方より見ればなほ副詞的用法に立てりと思ゆるな
り。然るを動詞の此の如き例にはいささかも論じ及ぼすことなく、形容詞にのみ偏
して論ずるは如何。
然れどもなほ一步を進めてぞは動詞には稀にして形容詞には多ければなほど
いふ論者もあらむ。そは一面に於いて然らむと答へむ。然れども形容詞として悉くこ
の副詞的用法あるにあらずしてそのかゝる用法に立てるは其の意義本來よりし
てかく一の屬性の限定をなじうべき性質のものたとへば程度を示せる烈し甚し
強し著しの類又は「遅し」「早し」の如き時間的程度のものに存するなり。動詞に少きも

亦この理より生じて動詞は本來屬性の屬性を示すが如きもの少きによりて自然比較的少きに至りしものなるべしと信ず。果して然らばこれらの駁論の價值も亦問はずして明なり。

今これらの別の生ずる原因を述べむ先にもいへる如くすべて國語の單語の複合方法は二種あり。一は同格複合にして一は主從複合なり。同格複合とはこの複合の要素たる單語は互に對等の資格を有しての複合をさす。主從複合とは一を主たる意義を領するものとし、一を從としてその附屬物の如くならしむる複合方法といふ。體言にていへば

月日 東西 山水

の如きは同格複合にして。

牡牛 酒樽 谷川

の如きは主從複合なり。之を動詞二個の場合にていへば、さきに吾人が例示せし上段のものは同格複合にして下段のものは主從複合なりとす。形容詞にても亦然り。所謂形容詞の相重りて同等の資格を有して叙述せるものは同格複合にして所謂副詞状のものは主從複合なりとす。この故に吾人はかの種々の説明に服すること能はず。

同格複合と主從複合との前述の場合に見ゆるものは外形上之を區分すること

能はざるが如く、形容詞の熟して成せるものも亦外形上區分しうべきものにあらざることを承認せざるべからず。かくの如くにしてかの紛々の議論は煙散霧消すべきなり。

まことや(三)の例はたゞ同格複合につきて論を起したりき。こゝに至りては又次の言を加へざるべからず。四は一の用言に對して其の意義を限定修飾すべくその上に重ぬる時この形を以てするなり。その例。

今日の氣候は甚しく寒し。

富士山は東海の天に著しく高く聳ゆ。

(五)は(三)の一轉したるものといふべくや。形式用言あり「す」に接して一の熟語を組成するに用ゐらるゝなり。この際は聲音の變轉さへあり。

かちどりけしきあしか(ク)らず。

衣冠を軽くして馬車をのみ重くす。

人を輕んずるものは又人に重んぜられず。

第一より第五まですべて重ね用ゐる方法の種類といふべし。第一は句を句に重ぬる時の述語の形、第二以下は語を語に重ぬる時の形なり。この故にこの形をば名づけて重語形といふべし。然れども從前連用といふ語用ゐられてあればなほそれに從ひて連用形と稱す。又近頃中止法といふ名目を用ゐて第一の場合の如きもの

をさせり、然れども、これは斷言を中止したるまでにて眞意は中止するにあらで重ぬるにあれば、なほ重ぬる作用と見るを妥當なりとす。しかして別に中止法と稱して可なる方法あり。これは俳諧者流の好みて用ゐるものにして普通の文章には存すること稀なるものなれど、しかも捨つべきにあらざるべし。これが例、

初花の世とや嫁のいかめしく、 杜 國

鶯のなけば何やらなつかしう、 鬼 貫

梅遠近南すべく北すべく、 燕 村

一は形容詞の純粹なるもの、二はこれが音便により、くが、うに變ぜるもの、三は複語尾の形容詞的の形を有せるもの、以て傍證に供す。動詞にも多し。

松たけや知らぬ木葉のへばりつき、 芭 蕉

春雨や花まつ人の心知り、 貞 室

春雨や火たつの外へ足を出し、 來 山

うき草や流れては又咲きかはり、 千代女

山吹やこぼれし泥に上かはき、 北 枝

大雪やとなりの翁さゝあはせ、 浪 化

此の如きは皆本來語を重ねる形のもの、この語にて句の終をなし、下に來るべき委曲の語を省略し、こゝに所謂陳述を中斷して後なからしめ、專讀者の想像にまか

せたるものにして聯想を生命とし、しかも短詩なる俳句には似つかはしき語法といふべし。吾人はこの類を以て中止の形とすることの妥當なるを主張するものなり。

連用形の他の用法は句の述語となりつゝ、接續助詞と「ともに接してその句をばなほ一層大なる文の成分として戻續的假設條件を示す前行句たらしむるなり。

月影の宿れる袖は狭くともとめても見ばやあかぬ光を、 (源須磨)

愛敬なくと詞しなめきなどいへば、 (枕草子)

連體形は體言に對して其の屬性觀念を以て裝定せむが爲に其の直上におかるる形なり。

美はしき色 長き髪 心の善き人 名の悪しき者

又この活用は文の終止として用ゐらるゝことあり、然る時は助詞の「ぞ」「なむ」「や」「か」が上において、勢力をこの用言に及ぼす場合、及特別に餘韻を含ましめたる句なる場合に限るなり。

その花の香ぞ香しき、 鳥の聲なむちもしろき、

この山や高き、 いづこの人か情深き、

ほととぎす峯の雲にやまじりにし、ありとはきけど見るよしもなき、 (古今集)

冬の來て山もあらはにこのはふり残る松さへ峯にさびしき、 (新古今集)

又この活用は體言に準ぜらるゝものなり。委細はその條にのぶべきが故に今は唯大凡に説明すべし。

一、句を以て體言の資格にたしむるに用ゐたるもの。
心の正しきは君子なり。 たゞ浪の白きぞ見ゆる。

二、性質状態を一の事實として之を體言の資格に立たしめたるもの。
白きと黒きとは相反せる光學的現象なり。

樂しき、苦しきは人情の活動なり。

三、或實體を装定しながら、之を傾し去りて外形上存在せねど、なほ然ることは明瞭なるもの。

嬉しきはこの事にさふらふ。

赤きは花にして、青きは葉なり。

已然形は句の述語となりつゝ、接續助詞「ば」等に接して、その文をなほ一層大なる文の成分として、確定條件を示す前行句たらしむる形なり。

水冷ければ河を渡らず。 月清ければ見る人もなし。

さて又この語形は文の終止をなすことあり、さる時は、上に「こそ」といへる助詞ありて、其の勢力をこの用言に及ぼす時に限るなり。

山里は秋こそ殊に侘しけれ。

命より名こそ惜しけれ。

上に述べし所を見れば終止に三の形あり。原形と連體形と已然形となり。今この形容詞の活用及其の用法、並に陳述を助くる接續助詞の接續を表につくりて示すべし。

形容詞活用一覽表

語幹		原形		未然		連用形		連體形		已然形	
形	用法	形	用法	形	用法	形	用法	形	用法	形	用法
あし	終止と なる、 語の本 體とし て用ゐ らる	よし	終止と なる、 語の本 體とし て用ゐ らる	く	假定の 條件を 示す	く	句を重 ね、語 を重ぬ る、中 止の形 を示す	き	體言に 連ぬ、 體言に 準ずる に對す る終止 等	けれ	已定條 件を示 す、こ そを對 する終 止
あし		よし		く		き		けれ		ども	

こゝに活用につきて一言附加すべきことあり。この用言の連用形を以て「と」といふ格助詞によりて名詞の装定をなすことあり。元來動詞より體言に轉化するものは其の抽象名辭なる限りは必連用形を以てするものなれば其の性質の幾分かこ

の用言にもあらはれたるもの、如し然れどもこれは一般に行はるゝものにあらず

慣例あるものゝみに限るなり其の例
とほくの國の人、多くの軍勢、時じくのかぐのこのみ、
等なり俗にいふ、

遠くの親類、近くの他人
なども然るなり。

三 語幹

形容詞の語尾の變化すべき部分を除き去りたる残りを語幹といふ。この語幹は
其使用せらるゝこと或る點に於いては單語と同じき用法に立つことあり。今この
語幹につきて述べむ。

語幹が單語と同じ用法に立つといひても、元來形容詞の意義は屬性觀念なれば
いづこまでも屬性たることを離れず、稀に性質状態の抽象的觀念として名詞の資
格を有するもあれど多くは唯結體せられたるのみにて獨立の觀念をなすことな
く他の詞多くは體言又は用言に依存するのみなり。しかもその依存する状態は體
言の他の體言用言に依存する方法を借りて之に據る。
かくて又語幹其のまゝにて體言に準ぜらるゝもあり、又、接辭の附屬するものあ
り。今順次に説明すべし。

一、語幹其のまゝにて體言となりたるもの
しろ、くろ、あを、あか、たか、

二、「み」^みといふ接辭に接して名詞となる。
深み、厚み、高さ、甘さ、早さ、

をかしみ、うらめしさ、たのしさ、くるしさ、うれしさ、

第一のものと第二の「さ」の接するものとはかく體言に變じたる語幹を以て、述語的
地位にたゞしむることあり。かゝる時の文は皆感動をあらはすものなり。すべて感
動をあらはすものに體言を以て述語的地位に立たしむること往々あるなり。

あなう世の中。 あなたふと。 あらさむや。 ありがたや。

うつしにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見るがわびしさ、(古今集)
風をだにまちてぞ花のちりなまし心づからにうつらふがうさ。(後撰集)

以上の例中の「をかしさ」「くるしみ」「わびしさ」等を以て形容詞の原形即終止形に「さ」
「み」を添へたりとする説一般に行はるといへどもそれは誤りなり。その誤りなること
は、義門師の研究に端緒を發し權田氏に至りては動かすべからぬ定論となれるを
や、今氏の説の一端を引かむ。

淺瀬、深淵、高山、短山などの如く、あさ、ふか、などのみいひても語を成すを嬉悲等
はうれ、かな、などのみいひては語をなさず、又げさみ等の辭へ係るときも淺深等

はあさげ、ふかげあささ、ふかさあさみ、ふかみなどいはるれども、嬉悲等はうれげかなげ、うれさ、かなさ、うれみ、かなみなどいはざればうれしげかなしげ、うれしさ、かなしさ、うれしみ、かなしみ、といふ格なる故に淺深等は云々。こはもとよりあさふか等に對へて、うれし、かなしといへるが本言にて、將然連用はうれしく、かなしく、截斷はうれし、かなし、連體はうれしき、かなしきなるをし、と同音重なるときは一音略きて截斷にてもうれし、かなしとのみいへる事と知られたり。

とあるにて明かなり。之につきて小田清雄氏は三の例をあげて、「し」と二音重ね用ゐるべき由を論ぜり。しかれども吾人はあへて古來の用例に反對すべくもあらねば、なほし一音にて原形と定めたり。さりとて、又し、といふもすべて排斥すべきものといふにもあらず。ともかくにもかの「をかしみ」「くるしみ」の類の形容詞の語尾に接辭を添へたるものといふべきにあらぬを知るべし。

三、全く體言となりはてたるにはあらねど、體言の裝定をなすに體言と同じ方法によるもの。

其一、語幹其のまゝ體言に添ひて熟語となるもの。

とほ山、ふる里、むくつけ男、ありがた涙、

ながくし夜、くはし鏡、うれし涙、おなじ人、

其二、「の」といふ格助詞の媒介によりて體言の裝定をなすもの。これは又かの

體言に變じたるものが述語的地位に立てるものゝ例の如く感動的調子を帯びたる文に限れり。

つれなの人の心かな、あなちもしろのけしきや。

あな心なの村雨やな、あなあさましのこの身。

をかしの詞や、くちをしの有様かな。

四、副詞となり、又は副詞に準ぜられたる用法に立つことあり。この際は多く接辭をよむ。

其一、語幹の最終の音が「げ」ならぬ者は「げ」といふ接辭を加へ、更に「といふ」助詞を以て裝定す。

淋しげに見ゆ、楽しげに裝ふ、心よげに遊ぶ。

其二、同上の場合に又「ら」を加ふることあり。この「げ」と「ら」の意義の差は第五節接辭の條に述べむ。

わびしらにましらななきそ。

うまらに聞召せ。

其三、同上の場合に於いて「み」といふ接辭に接して動作性形式用言すに熟す。但全般然りとはいふべからず。

嘉みす、無みす、輕みす(かるんず)

重みす(重んず) 心地あしみて。

以上の如く種々に使用せらるゝものなれば、頗錯雜せるものなるを知るに足るなり。

(三) 動詞

一 動詞の性質

こは舊來の學說にては作用言と稱へられ、西洋流にては動詞と稱せらるゝもの大部分なり。然れどもこの種の詞のうちには動作または作用を表はすに止まらずして状態有様を表はすものあることは既にいひたり。たとへば、ひるまる「始まる」などは作用動作といはむよりも寧ろ状態といはむかた當れるが如き心地するなり。

吾人は從來の名稱をとりてしかも他の義を寓せしむること形容詞に於けるが如し、先こゝに余がいふ動詞は從來の作用言又は動詞に比し内容の範圍や、狭し。そは他にあらず、余の動詞は實質用言の一種なれば形式用言と稱せらるべき「あり」を除き去りたる殘餘なり。

次に意義の上にて於いて形容詞との比較を試みるべし。かくせば其の意自明ならむを以てなり。さて此の種の用言と形容詞との差は如何にといふに、彼は存続したる、固定したる状態又は性質をあらはして靜止的觀念として、これを心内に畫く

に、これは一時の状態又は一時發作したる性質状態を其のまゝ代表せる詞なり。この故に余が動作といひたるは、通常いふ動作にあらずして、唯其の屬性が推移的傾向を有するものにして、永續のものならず、一時的發作的の性質状態なることをいふなり。この故に形容詞といふは存続的固定的なる屬性をあらはす用言、動詞といふは推移的發作的なる屬性をあらはす用言をいふものと知るべし。

なほ、他の方面よりこの二種の差をいはむ、形容詞は殆、超時間的に時間の制約を離れたる如きものなるに、動詞は其の推移的發作的なる特性として著しく時間の制限をうけ、又空間に對しても、形容詞よりは頗緊要なる關係を有するものなり。これ又其の特、質より自然に導かれたるものなり。

更に又他の點より見れば、動詞は動作をあらはし、時間的狀態をあらはす處よりして、用言本來の語尾のみにては、未、十分に其の應用をなすこと能はざるよりして、複語尾又は再度の語尾とも稱すべきものを伴ふ。この性質は形容詞になき處なり。この複語尾と稱せらるべき性質のものは吾人は別に一項を設けて論じ、動詞の直接の語尾をのみこの項には説かむと欲す。而、これら直接の語尾を複語尾に對して本幹といふ。

今試に動詞の定義を下さむ。

動詞は事物の性質、状態が推移的發作的の觀念として意識内に發動するもの

をあらはしたる實質用言なり。

例へば、

人行く。 犬走る。

の行く「走る」は「人」犬の動作を發作的觀念として、又或時間内に存する事實として活動的にあらはしたるものなり。

心動く。 花落つ。 春過ぐ。

の動く「落つ」「過ぐ」は「心」「花」「春」の發動的状態を或時間内に存する事實として活動的にあらはしたるものなり。

彼の容貌は父に似る。 志成る。

の「似る」「成る」は「彼の容貌」「志」の状態を發作的觀念として現に存在する事實として活動的にあらはしたるものなり。

以上の如く皆一種の状態にして、其の状態たるや、いづれも一時的發作的事實として推移的性質を有するものが、或瞬間に吾人に捕捉せられてあらはされたるものなること明なり。

二 動詞の形體上の種類

形容詞の活用は一種のみなれど、動詞の活用は數種あり、これによりて其の活用の形體によりて動詞を區別することあり。これはかの語尾變化の方式を概括して分

類したるものなり。かくてこれを四段活用、三段活用、二段活用、一段活用の四種に區別す。

四段活用とは一切の語尾變化を通覽するに母韻四即「ア」「イ」「ウ」「エ」の間に活用の存するものをいふなり。たとへば、

書を讀まず。 書を讀みぬ。 書を讀む。 書を讀め。

水湧かず。 水湧きたり。 水湧く。 水湧けども。

の如きものをいふなり。古來この四段活用を以て熟音の變化するものとし、カ行四段「サ」行四段など六種の區別をなしたり。しかれども其の變化する所は唯母韻のみにして熟音の變化するにあらぬなり。さればこれらは唯四の母韻の間に變化するものなりといへば、足るものにして煩雜なる名目を設くるに及ばざるなり。而してこれは動詞中最多き種類なり。

三段活用とは三母韻の間に變化するものにして動詞に在りては「來」といふ詞の「オ」「イ」「ウ」三母韻に變化するもの、唯一あるのみなり。この用言は其の母韻の變化のみにては十分に用言たる用法を完くすること能はざるが故に、別に「レ」の二熟音を「ウ」韻の形に附屬せしめて其の不足を補ふ。この故にこの三段といふも、上の四段といふも、又次の二段、一段もともに主たる母韻の變化数を計へたるものなることを知るべし。元來これは五十音圖によりたるものなるが故に「段」の字を使用するなり。吾

人も之を改めずして襲用する、れの添加は以下各種に通じてあるものなり。之を離れて命名したるは深き理あるにあらず、唯便宜を計りたるものなり。この詞の用例は、

五月こばなきもふりなん。さし方ゆく末、伴ひくべし。
馳せくるを迎へて。秋はくれども人見えず。

二段活用は二母韻に變化するをいふ。しかして其の變化に二種あり。一は「エ」の二母韻一は「イ」の二母韻に變化す。共に其の變化を「レ」の二音の助勢すること三段活用に同じく、又「ウ」韻に接するなり。之に屬する詞の例「イ」の二音のものは、

老いばくやしからむ。我老いにけり。年は老ゆらむ。
年老ゆる人。年老ゆれど心は老いず。

この類の詞は數多からず、「エ」韻なるものは、
寄せなばよせよ。敵押寄す。押寄する敵は誰ぞ。
心を寄すれば命に従ふなり。

この類の詞は四段のにつぎて多し。

一段活用とは一韻のみにて母韻の上にて變化なきものなり。かく母韻の上にて變化なきを以て「レ」を加へて助勢し、以て其の用を充足せしむ。その韻は「イ」韻と「エ」韻となり、「イ」韻の例は、

かれは洋服をきたり。彼は常に粗服をきるなり。
衣服を重ねてされど暑からず。

なり。この類の詞は多からず、「エ」韻なるは

鞠を蹴けて遊ぶ。日毎に鞠をば蹴るなり。鞠をければ面白し。
なり。これに屬する詞はこの「蹴る」のみなり。或は他にも存在すといふ説もあり諸説紛々として歸する所を知らず。吾人は大槻氏の説に従ひてこの「蹴る」のみを承認せり。現在の話語にては二段活用なるもの殆ど皆一段活用となれるが如し。しかも九州地方にはなほ二段活用は明に存在するなり。かくて一段活用のあるものは四段活用に轉じたるもあり、蹴る「蹴る」等これなり。

蹴らり、る、れ。 蹴らり、る、れ。

しかれども現今標準記載語とするものはすべてこれらの轉化を承認せざるなり。これらの事實は歴史的文典の職とする所なれば今論ぜず。

上に述べし如く、四段活用を除く外は皆「レ」二音の補助あるものなるが茲に四段の如く、四母韻に變化することもありてしかも「レ」の補助にまつものあり。かゝる單語は唯二あるのみなり。其の用例

立ちわかれないなば。狩にいにけり。都へ往ぬ。往ぬる時。
いぬれどもかひなし。早く往ぬ。

これに属するは「往ぬ」「死ぬ」の二のみ。この詞の特徴は「ア、イ」二韻は異なることなし。ウ韻は單純なる「ウ」韻のみものとする。れの加れるものとの三様あり。しかして「れ」の加はれるものは普通の四段にての「エ」韻のなす。職能の大部分を負擔し、僅に希求放任の語法に属する部分を「エ」韻に負はしめたり。これ一種奇異なる現象にして、古來變格と稱したる所以なり。然れども吾人は別に見る所あるを以て之を四段別格と稱せり。

古來この種の詞及余が所謂三段活用等を變格と稱し、今は殆定まれる名となれり。然れどもそれは頗いかゞはしき名目にてたゞ變格といひては其の實質を示すことなきが故に其曖昧なる感を與ふるなり。この故に余は一を三段と稱し、一を四段の別格と稱せり。所謂正格と等しく母韻の變化數を數へたるなり。唯四段の別格と稱するものは普通の四段と異にして母韻の外、るれ音の補助あるが故に之を特別に標示する要あり。かく吾人が三段活用などいふ名目を立つるを、世人或は目して徒に奇を好み、異を立つるものとせむ。然れども是は敢へて吾人の創意に出づるものならず。近來一二の文法書この傾向を呈せるものなきにあらず。古くは黒澤翁滿の「言靈のしるべ」にも見えしものなり。こゝに一言辯すべきことあり。天保嘉永の頃海野幸典と稱する人ありき。國語學上に一種の意見を有し所謂天言活用の説を唱へたり。之が子弟たり、友たりし人に越中富山城主前田利保といふ人ありき。頗語學

に精しく、あらはす所の語學の書あり。網の綱手といふ所謂天言活用説より一轉して、天言地言流言等の説あり。その別記とも稱すべきものを、手線の絲といふ。未定の稿と思し。その他、著者なほ二三を藏す。その説また變格を認めず、活用を分ちて、

四段、上段一、上段二、上段三、上段四、中段、下段、

として説く所あまりに微細にまで入れるが故にかへりて錯雜し、今の吾人の眼より見れば頗傾かるゝふしは多し。然れども變格といふ名目を除きたること所謂形状言の活用を微細に分析せしことは當時希觀の見なりとす。著者が郷里の古老、國學に志せるもの侯の教を蒙らざるもの殆なし。著者の研究も亦侯の餘澤に浴せるものなからずといふべからず。余はかゝる系統よりして變格といふが如き漠然たる名の不可なるを思ひてかく命名したるなり。

因にいふ。今の世國語學の歴史を云爲する人漸多くなりたるやうなれど、侯の事を知れる人殆なきやうなり。これ當に舊臣の情として慨ふべきのみならず、又語學研究の上に於いても不利ならむことを思へば、こゝに一言して世人にあまねく告げおくなり。その著書の系統をいへば、先歌學辭彙とも稱すべき詞の大綱六卷あり。これが運用をときたる一種の語學書は所謂網の綱手にして、その別記と稱すべきものを、手線の絲となす。詞の大綱網の綱手は共に刻本なり。門人たり臣下たるものゝ名にて上木せらる。然れども發售せしにあらざり、又諸侯の書なる

を以て坊間に施さず。之を以て知る人少し。手線の糸も亦下臣の筆になる。然れども未定の稿とちばし。著者傳襲のもの恐らくは唯一のものなるべし。其の他歌學秘事十五ヶ條といへる侯自筆の稿本亦著者の珍藏にかゝる。其の所見確に時流に卓絶せるものあり。

なほ著者の郷里には語學書の殘存せるものありて、往時研究の風盛なりしを知るに足る。弘化四年の著なる奥田香居の詞のつかねをの如きも亦本居一派の語學書として玉の緒の後繼として多少價值あるものなり。これらの書も亦天下の知らざる所なれば、古人の功を没せざらむが爲に、こゝに一言するなり。

從來の活用研究の基本とする所は實に五十音圖の組織なりき。これによりてかの本居春庭氏が四段一段、中二段、下二段の名を命じたりしなり。かくてこの五十音圖に基因せる「段」といふ術語は今に至りてますます、活用の上に固定し來りぬ。春庭氏以後林國雄氏は下一段を唱導して、一段は上下の二種となりぬ。次に中二段といふを上二段と改めたるのみにて遂に今日に至れり。今日普通の説にては四段上二段下二段、上一段下一段及變格といふ分類なり。今この例にならへば、吾人の二段一段は又上下の二つに分たるべし。しかしてなほ、吾人はかの熟音を以て活用の語尾と見る説の煩なるを厭ひて純粹に變化する部分のみを以て語尾と稱す。かの五十音圖によりて何行にはたらくなどいふことは實は文法上の説明として、さまで必

要ならぬ事にして、説くべき限にあらざるべし。さて又辭彙の體をなして其の單語の意義を一々説き、又はあらむ限りの語を集めて示すなどは文法上の根據を示す必要なき限りは不用の事なりとす。
動詞を形體上より分類して見れば、以上の如し之を一覽し易からしめむが爲に左に表を示す。

動詞活用種類一覽表

種類	小別		語幹の一例	原形	未然形	連用形	連體形	已然形	命令形
	通	別							
四段	通	別	(咲く) Sak.	ウ	ア	イ	ウ	エ	エ
			(往ぬ) Ju.	ウ	ア	イ	ウ	エ	エ
三段			(來) K.	ウ	オ	イ	ウ	ウ	オ
			(起く) Ok.	ウ	イ	イ	ウ	ウ	オ
二段	下	上	(寄す) Jos.	ウ	エ	エ	ウ	ウ	エ
			(起く) Ok.	ウ	イ	イ	ウ	ウ	オ
一段	下	上	(見る) M.	イ	イ	イ	イ	イ	イ
			(蹴る) K.	エ	エ	エ	エ	エ	エ

注意、羅馬字は語幹の音素を示し、片假字は語尾の韻を示し、平假字は添加の熟音を示す。

三 活用

動詞の原形は一段は「る」音の加はりたるもの、其の他は皆「ウ」韻なり。これは用言の本體として、その屬性に對する主體の状態を陳述して統覺作用を全くす、終止形と稱するものこれなり。

原形は「ま」ともといふ助詞に接せしめて其の用言が文の述語となりつゝ、己が屬する句を以て更に一層大なる文の成分として、具續的假設條件を示す前行句たらしむるに用ゐらるゝなり。これ形容詞の連用形の有せる作用に等しきなり。

人は見ると我は見じ。

譏るとも苦まじ、譽むとも誇らじ。

繪にかくと筆も及ばじ。

よそに分るとも我はまたむ。

未然形は其のまゝにては動詞の用を全くせず、主體に對して其の屬性觀念を陳述し、こゝに一の句をなしながら、なほ一層大なる文の成分とし、其の句を以て、順續的假設條件をなす前行句たらしめむが爲に「ば」といふ助詞に接せしむるに用ゐらる。

櫻花ちらばらばらなむ。

待つとしさかば今かへりこむ。

五月こばなきもふりなむ。

戀ひしなば誰が名はたゝじ。

玉くしげあけば君が名立ちぬべみ。

月をみば心澄まむ。

原形より連用形に至るまでは、又これよりして複語尾を分出せしむるなり。これは複語尾の項に至りて述べむが故に、こゝには言はず。古來この變化に將然言又は未然段などいふ名を附せるは皆この複語尾の分出に因みて名づけたるなり。しかれどもそは間接にあらはれたるものにして、直に文の述語たりうるに接する用法を以て標識となすの直截なるに及ばず。この故に余はこれに強ひて名を下さば假設條件の形といはむと欲す。されども各目の上に特に異を立つるにも及ぶまじければなほ未然形と名づけつ。

近來西洋文法の輸入ありてより、その動詞の Infinitive Mood といへる術語をかり來りて、この未然形にあてて不定法などいふ名目を課するあり。又連用形を以て Partitive にあてたるもの、洋人の日本文典又邦人のにもまゝ、見る。これは實にいはいはれなきことにしてかの不定法とは未一定の用法に立たざる動詞を指示するものにして、動詞そのものを一の箇體として取扱ふものなれば寧ろ吾人の原形に該當するものなり。唯吾人の原形は同時に陳述の用に供しうるが故にかれと異なりとす。若又この活用は意義不定にして所謂助動詞をもちてはじめ明なるものなればといはむ。然れども所謂助動詞をまつはこの變化に限らざるなり。とにもかくにも、かゝるまぎらはしき名目を用ゐて、名のみ西洋文法に合せむとするが如きは吾人は國語のために長大息して吊せむと欲せざるも得ざるなり。

連用形は形容詞の如く五種の重語形を有す。(一)は句の述語として立てるものが、その句よりも一層大なる文を構成せむが爲に重文の前行句をなし、これに陳述を完了せしめずして次の文に重ねる形なり。

我は書を読み、彼は文章を作る。

彼は往に、我はかへる。

花落ち、鳥なく。

衣服をき靴をはく。

(二)は體言の裝定語として立てるものが重なりたる場合、

出て入る人。 いたりいたらぬ里、

身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げたる人。

(三)は同一の主體に對して多數の述語ある時の重なりたるもの。

彼は智に富み、才に長じたれば、

友達大に集まり、歌ひ舞ひなかつ。

(四)は一の用言に對して其の意義を修飾限定すべく、その上に重ねる時、これはかの形容詞の條に例とせる

衣服をいそぎかふ。 木葉あらそひ落つ。

の類なり。しかれども例は多からず。(五)は熟語的に他の用言に重ねるものにして、

形容詞には多からぬかほりにこゝには頗多く見はるゝなり。

行き煩ひてかへり來れり、 一室に閉ぢ籠る。

きたちよばひぬ。 見返りもせてすぎぬ。

以上は動詞との熟合、次は形容詞との熟合なり。

酒など呑み散すは見苦し。 讀み易き文なり。

勤め難き役なり。 悔りにくき敵なり。

但これは慣用あるものに限り、濫に用ゐる事かたしなほ形式用言「あり」すに熟するも亦これよりす。

連用形の他の用法は又かの中止形なり、これは形容詞の條に述べし如く、比較的

近世のものに見ゆれど、なほ文學上に承認せるものなれば之を述べむ。その例は形容詞の條にも挙げたれど、なほ二三之を示す。

小田原やおもひのまゝに苅おほせ。 豊太閤

花もりや白き頭をつきあはせ。 去來

黍の穂は残らず風に吹き倒れ。 野坡

この變化は又動作そのものを行為の目的とする場合に用ゐらるゝなり、これは從來

の文法にては注意せられざりしものなれど、重要な用法の一なり。

花を見に行く。

釣りに赴く。

金を預けに来たり。

衣服をぬひにやる。

の如し。これらは體言に準ぜられたれども、體言となりたるにをらず。

以上は用言としての連用形の用法なるが、又之が體言として用ゐらるゝ場合あり。即この場合には用言の性質を脱して體言となりたるものなれば、用言の條に述べべきものならず、されど念の爲に一言すべし。

一、實體の名となりたるもの。

氷り、霞み、つゝみ、のわき。

二、抽象的の體言となりたるもの。

讀みを覺ゆ、悲みつきて喜び來る。

三、他の詞と相待ちて熟語體言をなすもの。

うづみ火、み物、うけとり。

四、形式用言の客語となれるもの。

隔てあり、盛りなり、盡きす。

逆體形は體言に對して、之が屬性觀念を以て裝定せむが爲に用ゐらるゝ形なり。其の裝定をなす状態に種々あり。例へば、

落つる涙(涙が落つる、其の涙なり) 走る犬(其犬が走れるなり)。

の如きは用言の屬性の基く處の體言を裝定するなり。これらは主體を裝定せるなり。

讀む書(誰か書を讀むべし、其の書なり) 勤むる事(人の事を勤むる、其の事なり)。

まつ人(誰かある人を待つ、其の人なり)。

住む野(誰かある野に住む、其の野なり) いぬる床(誰か床にいぬる、其の床なり)。

これら「を」等の助にて文の成分として、補はるべきものを用言が裝定したるなり。この故に、又次の如くいふ事を得べし。

我が讀む書、人の勤むる事、君が待つ人、蟲の住む野、人の寝ぬる床。

かく主體たるものは別に存在すれど第一の例にはさる事なく、主體自身が裝定せられたれば、再之を補ふこと能はず。然れども、この二例は共に其の用言が述語たる場合に之に關する體言を裝定したるものにして、かの西洋語の文法に所謂關係代名詞を用ゐる場合に相當するものなり。我國語には關係代名詞なしとはいへ、其れに代りて、しかも夫れよりも簡易なる語法はこゝに存在するなり。

次には他の體言を裝定したるものなり。たとへば、
春くることを誰かしらまし。人の訪ひくる望みもなし。

櫻花散るといふ事はならはざらなむ。人々のいひ傳ふる所によれば、

これは句の述語をなすつゝ、體言を裝定したるものなり、又別に、

恨むる心。 檢印を付する慣例。

これらはたゞ體言を裝定したるなりしかるを世にはかゝる用法あるよりして連體形を目して、分詞法などいふ名を與へたるあり。これかの西洋文典の Participle のある用法に似たるより思ひつけるものなるべしといへども、かれの分詞は管に動詞が形容詞の如く體言の裝定をなすのみにあらず、吾人の所謂重語連用の用法も亦之に該當する點あり。たとへば現在分詞の

I am loving.

Being tired of work, the man went home.

の如きは決して吾人の連體形にあたらざるなり。又吾人の未然形より複語尾に移行するものも亦之に該當するなり。たとへば過去分詞の

I am loved.

I have been beaten.

の如きは連體形の如何なる用法を以てしても決して該當せざるなり。これを以ても又かれの分詞をこの一活用にあてむ事の不可能なることを知るべきなり。この活用は又終止として用ゐらるゝことあり。然る場合の生ずるに二あり。一は

上に係助詞の「ぞ」「なむ」「や」「か」ありて勢力をこの用言に及ぼす時、この用言が述語たる場合にこの語形を以て文の終止となる。二はかの助詞なくとも特別に餘韻を含ましむる時は之を終止とするなり。四段は原形と連體形と同形なるが故にこの徴とならず。

風ぞ吹く。花なむ散る。 月をや眺むる。 誰か來る。

さがしらに夏は人まねさゝのはのさやぐ霜夜をわがひとりぬる

(古今集)

あふ事や涙の玉のをなるらむじはし絶ゆれば落ちてみだるゝ

(詞花集)

萩の葉にこととふ人もなきものをくる秋ごとにそよとこたふる

(詞花集)

又この活用は三種の方法を以て體言に準ぜらるゝことあり。こは次章に説くべきなれど今其の用法の大略をいはむ。

一句となりたるものを體言の資格に立たしむるには述語をこの形になす。

雁の空高く渡るも見ゆかし。

さるそら事などの出來るこそ苦しけれ。

大國を治むるは小鮮を煮るが如し。

二、動作状態を一の事實として之を體言の資格に立たしめたるはこの形にて示す。

生るゝはうれしく死ぬるはかなしきものなり。

さわぐはよろしからず遊ぶはよし。

三、或實體を裝定しながら、之を領し去りて外形にあらはさねども意義の上にて明瞭に認めらるゝもの。

鳴くは鶯にして囀るはひばりなり。

かの見ゆるは菊にあらずや。

已然形は述語となりつゝ接續助詞「ば」「ど」等に接して、その句をなほ並層大なる文の成分として、確定條件を示す前行句たらしむる形なり。

月見れば千々に物こそ悲しけれ。

風は吹けども花は散らさじ。

雪消ゆれば若菜もつまる。

この活用は又、上にこそといふ係助詞ありて其の勢力をこの用言に及ぼす時はこの形を以て終止となす。

月をこそ見れ。花こそ散れ。

山より月のいてこそくれ。

涙のみこそしたにながるれ。

次には命令形なり。しかれども嚴密にいへば、こは一活用となすべきものにあらずと信ず。如何にといふに四段のみは已然形と同形の者にして他は未然形と同形なるものに助詞「よ」を添へざれば、完き命令の形をなさず、かくの如くなれば唯其の所用の活用の相違あるのみならず、又發表方法にも大差ありて決して一樣に論ずべからず。かつ又助詞「よ」を以て用言變化の内に算入する説もあれど、こはまさしく助詞にして四段のにも附屬しうべきは明瞭なる事實なり。然るを四段以外に附屬するものは用言活用中の一部にして四段には活用外のものなりとするは不合理なりとす。この故に余は命令といふ特別の一變化を認めずして各變化に分屬せる用法なりと斷ず。しかれども便宜の爲に今之を説くこととせり。

命令希求等をあらはすには、特別に存在する一活用を認めず、四段活用と其他とは大に其の状態を異にせり。即四段活用にありては已然形別格にては「エ韻のもの」を用ひて助詞の助をからずして示しうるなり。たとへば、

早行け。この文をよめ。散らば散れ。とくく往ね。

四段活用以外の助詞は未然形に助詞「よ」を添へてあらはす。但古風の文法にては三段及二段のあるものは「よ」の助をまたても命令等をあらはし得たり、されど、今はすべて助詞をまちて用をなすのみ。

早くこよ。月を見よ。古人に恥ぢよ。
以上の活用はなほ複語尾を分出し、助詞に助けらるゝに種々の約束あり。それらはそれ／＼の條に述べべきなり。

動詞活用形一覽表

種類	原形		未然形		連用形		連體形		已然形		命令形	
	形用法	詞助	形用法	詞助	形用法	詞助	形用法	詞助	形用法	詞助	形用法	詞助
一段	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上
二段	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上
三段												
四段	別	通	別	通	別	通	別	通	別	通	別	通
	る蹴	る見	る流	く起	く來	ぬ往	く咲					
	件條設假的續戻				止終							
	もと											
	エ	イ	エ	イ	オ	ア	ア					
	件條設假的續順				ば							
	エ	イ	エ	イ	イ	イ	イ					
	目的		中止		重語							
	るエ	るイ	るウ	るウ	るウ	るウ	ウ					
	準體		終止		連體							
	れエ	れイ	れウ	れウ	れウ	れウ	エ					
	終止ども		條件		確定							
	ども		ど		ば							
	エ	イ	エ	イ	オ	エ	エ					
	放任		希求		命令							
			よ									

備考表中片假字は韻を、平假字は熟音をあらはすに用ゐたり。

四、動詞の性質上の分類

動詞の性質上の分類をはじめて系統的に企てたるはかの本居春庭氏なり。氏の著書詞の通路は主として之を研究したるなり。爾來氏の説の系統はたえずして今日に至れり。而して一方には又西洋文典の動詞の自他の範疇を齎し來りて我に加ふるものあり。こゝに於いて二の流派は現時の國語學界に存在するなり。今二者の可否を決して吾人の執るべき所を明にせむ。

吾人は茲に動詞の性質上の分類といへり。そは、單に意義を以て種々の區分を試むる義にあらず。其の性質に基因して何等かの文法上の制約を生ずる點に著眼して分類を企てむと期するものなることはあらかじめ訴へおくべき要點なり。

さても詞の通路にはかゝる性質上の分類を企つることを詞の自他を研究すと稱せり。其の言にいはく、

歌よむにもふみかくにも、事をするすにも、よるづの事をわから、其さまをくはしくしらするなれば、もはら此自他の言葉の活をむねとこゝろらべきわざなり云々

さて自他の詞六つにわかれれば、今六段に次第して、その詞をほどこし、一目に見わたし、こゝろをやすからむために、圖をつくりて、さとしたるなり。とて圖を示せり。今便宜を以て其の六種に分れたる用言の例を一二抽出して名目

第一段	功にぐる おのづから然る みづから然る
第二段	功にがす 物を然する
第三段	功にかする 他に然する
第四段	功にがさする 功にかさする 他に然れや
第五段	功にげらるゝ 功にかるゝ おのづから 然れらるゝ
第六段	功にがさるゝ 功にかるゝ 他に然せらるゝ

かくの如く名目は七種ありて、其の種類は六あり、かく差異を來せるは、おのづから然るとみづから然るとは意義異にして實質一なるが故なり。權田氏に至りてはこの七名目に對して七種をあげたり。今之を抽出せむ。

加行四段	おのづから然る	みづから然する	物を然する	他に然する	他に然せさする	おのづから然せらるゝ	他に然せらるゝ
			同 下二段	令	令	被	被

多行下二段	のく	のく	のくる	のかする	のけさする	のかるゝ	のけらるゝ
第一段	さする	佐行四段	さだす	さしおする	さたおする	さてらるゝ	さたさるゝ
第二段		第三段		令	令	被	被

舊來の説かくの如し、其の分類は頗精密なるが如し、然れども其の説く所果して一點の疑惑をも挟ましめざるか。第一に問ふべきはこの六種若くは七種は如何なる順序を経て別れたるものなるか、其の分釋の原理は如何といふことなり。然れども其の書ども更に分釋の原理を示さず、この故に今其の名目の間に矛盾を有することなきかを檢して、其の分類の妥當なるか否かを決せむ。先、第一に「みづから然する」とは二様の義に解せらる。即一方よりいへば「みづから」のみの然することとなるべく、一方よりいへば所謂物を然するも「他に然する」も皆「みづから」然するにあらずや。次に又物を然する「他に然する」の差別は如何。物と他とは異か同か、之を明にせざる時は混同する恐なきか。根本の問題たるべき「自他」とは如何なる義か。自とは「おのづから」然る「みづから」然る「の」おのづから「みづから」の意なるか、他とは「他に然する」他に然せらるゝの義か。然らば物を然するは「自なるか、他なるか、かくて自を以て「おのづから」みづから」の義とせば、七名目殆みな「自ならずや、又若自他を唯單に「他に」といふ語の有無によらて、「自」他が發動の主たる場合の區別とせば、次の如き分類とな

るべし。この場合に於いては、おのづからの二種は自他以外にあるものとなるべし。

みづから然する。

物を然する。

他に然する。

他に然せざる。

自

他：他に然せらる。

自他以外……おのづから然る……おのづから然せらる。

かく分類を試むと雖、なほ決してかの自他の分類には適合せざるなり。

ともかくにも、吾人はこの區分につきて理路をたどるに窮せり、而して吾人の最岐路に迷ふは、自他の意義の不確定なることなり。自と他とは相對したるものとせば、而して自のうち「みづから」と「おのづから」との別を立つる必要ありとせば、「みづから」の自に對する他と「おのづから」の自に對する他とは區別なきか。しかも「みづから」と「おのづから」との二義は一に攝する理あるか、これ亦疑を起さしむる空隙なり。他とは「他に」といはるゝ類か、他が發動の主なる意か、又「物を」といふは他なるか、自なるか、これらの疑惑は陸續として生じ來りて遂に吾人を五里霧中に彷徨せしむ

るに至れり。茲に於いて吾人は之を吾人の複語尾と稱するものゝ分出せる形より、解體して果して妥當なるか否かを檢せむ。

「他に然する」「他に然せざる」は大槻氏の所謂使役相なり。この際には「す」「さす」といふ複語尾分出す。この複語尾を解き去れば、用言の原義のみ殘留すべしかくして殘留せるものは「のくる」「のけさす」は「のく」「のけさす」となるなり。「おのづから」然せらるゝ「他に然せらるゝ」は大槻氏の所謂所相なり。この際には「る」「らる」といふ複語尾附屬す。この複語尾を解き去れば、この原義は又「のく」「のける」となりて殘留すべし。こゝに於いてかの六種七種は「おのづから然る」「みづから然する」「物を然する」の三種に減少すべし。吾人はかく減少せしめて用言の性質を研究することの利便多きを思ふ。見よ、權田氏の圖表には下の四種は皆一定に複語尾を有せるものならずや。しかるに其の複語尾は形こそ「る」「らる」「す」「さす」の四種なれ、意義は二種あるのみ。其の二種の意義が、四種の格を生ずるは全く原義が二種あるによる。今これを圖表にて示せば次の如し。

のくる (る、らる) (す、さす)
のける (る、らる) (す、さす)
のけさす (る、らる) (す、さす)
のけらる (る、らる) (す、さす)

かゝれば四種は同一種の四種に分れしにあらで、二重の見地より別れたるものな

ることは著しきなり。この故にこれらは大槻氏の説の如く、分離せしめて考ふるを可とす。さてかの三種は果して至當なる分類なるか、又吾人に曖昧の考を生ぜしめざるか、吾人はなほ立ち入りて檢せざるべからず。先物を然するが令に轉じては、他に然せざるとなり、被に轉じては、他に然せらるゝとなりたり。又みづから然する。又は、おのづから然るが令に轉じて、他に然するとなり、被に轉じて、おのづから然せらるゝとなりたるものとせば、自他とは用言の原義と複語尾の附屬せる體との間の區別かとも思はる。何となれば原義には、他に「といふことなく複語尾の附屬せる體には、他に「といへる名目の多きを以てなり。しかも、おのづから然るものが、他に然する「おのづから然せらるゝに轉じたるか、みづから然するが轉じたるか、これ亦明瞭ならず。春庭氏は第一段第二段は四種のはたらき入りまじりて定りなく、第三段は、おほく佐行下二段のはたらきなれど、まれには外のはたらきまじれりといひ、第四段第五段第六段は、全く複語尾の添はれるものをあげたり。權田氏は第一段第二段第三段の間に於いて、自他の分るゝものとし、第四段より下は皆「令」「被」の助辭につらなるものとせり。然りと雖、又四段の活詞より令被の二辭へうつるのみにて、自他のわかるゝものといへるもあれば、其の言又曖昧なりといふべし。余は先さきの研究によりて、權田氏の第四段以下は複語尾の作用によりて生ずる別とし、自他云々のことは第三段以上の事として論ぜむに、第一に疑ふべきは舊來の語學者は

自他を必對偶あるべきものとせることなり。この故に其の自他に關する常套語といふべきものは、必、自他のわかるゝ格、自他のわかるゝさまなどなり。かゝる思想を以て自他を研究するが故に如何なる語にも一方に自あれば、必他を求めずばやまず。他あれば、自を對せしめずはやまず。この故に自他の二方面を一觀念にもてるものにあらぬ「あふぐ」「あざむく」の類にまで對偶を求めて其のなきに窮し、複語尾の添ひて所謂令被の意あるものを以て之が一方の對者とするに至りしなり。この故に權田氏の説などは通路の説に比して進歩を來せるが如くなれど、自他の觀念の上矛盾あるが故に到底正見をうることは能はざりしなり。氏は

加行四段		あふぐ	令	あふがする	被	あふがるゝ
以上は四段の活詞より令被の二辭へうつるのみにて自他のわかるゝ格なり。						
良行四段	わたる	佐行四段	わたす	わたらす	令	わたさする
	わたる				被	わたらるゝ
以上は諸四段の活詞の佐行四段の活にうつりて自他のわかるゝ格なり。						
					被	わたさるゝ

といへり。活行によりて自他のわかるゝ者とし「令」「被」をも自他の一方とせば、寧通路の説の方條理一貫せり。權田氏は令被の二辭へうつりて自他を分つことを一方にいひながら、又他に活用の差によりて自他わかるゝものとせり。而して更に令被

に接したる別をあげたり。然らば、自他の更にわかれたる自他と元來の自他とは如何にして區別すべきか。權田氏の説の不合理なることかくの如し。この不合理の生ぜし根據は何ぞといはゞ、吾人は自他を必對偶的に論ぜむと欲したる根本主義の誤謬に因せりと判定す。

次には自他の意義如何の問題なり。この問題に關しては、吾人はその解釋の會心なるものを見ず。舊來の自他論者は自他の對偶を求めむことに盡力せしは上にいひしが如くなるが、果して對偶をなせるものとせば、かの第一段第二段第三段のうちにて三者共に具はるべき等なるに通路の表によりて見れば、六十例のうち二者相對せるもの二十七例のみ。語學自在の表によりて見れば、百四十六例のうち自他相對せるもの百二例、そのうち第一段第二段第三段共にあるもの僅に十二、第一段と第三段とあるもの八十一、第二段と第三段とあるもの九、しかして第三段即他のみのものは四十四例なり。之を以ても、自他のわかるゝ云々といへることの事實に合せぬものなることを知るべし。よし又自他のわかるゝことを承認すとしても、權田氏の所謂第一段と第二段とが第三段に對する關係は如何に説明せらるべきか。他は一にして之に對する自が、ちのづからの義なる時あり、みづからの義なるときあり、又兩者なる時ありとするは果して妥當なる分類といはるべきか。かくて自他其の者の意義はますく不明に陥るなり。しがれども吾人は直に之を排斥し去る

べからず、今自他を以て、落合直澄氏の説の如く、がを添ふべき詞は自とし、をを添ふべき詞は他なりとの義に解せむか。次の如きものは自なるか他なるか。

余は本日朝鮮國を退きたり。

夕立や家をめぐりて愁なく。

の「退く」「めぐる」は語學自在の表には、ちのづから然るものとせるが故に落合直澄氏の自といへるものなり。念の爲に氏の説を抽出す。

詞の自他を分つに一定の規則あるもあり、又然らざるものありて、だくし、されどがをこの助辭によりて分別する時はいと見やすきものなり。

が 此助辭を添ふべき詞は自

ホノヅカラ然ル、 ミヅカラ然ル、

を 此助辭を添ふべき詞は他

他ヲ然スル、 他ヲ然セサスル、

に 此助辭を添ふべき詞は自他

さればかくても亦自他の適當なる解釋にあらずといふことを思はざるべからず。かくてなほ他の疑問を有す、他といふ語と物といふ語となり、權田氏の他と稱せらるゝもの、本幹は皆物を然するものと稱せらる。しかして第四段以下に至りて始めて他といふ語を使用せり。この物と他との間には何等かの差異は存在せず

や、「物」といふ語と「他」といふ語とは吾人に異なる感じを興へずや。かゝれば「他」といへるがなかに「物」と「他」との二義含有せらるゝものと認めらるゝなり。吾人はこの區別を明にせざるべからず。

吾人が「物」といひ「他」といふ場合にはこれらの間に何等かの差異を感ずるは必其の間に實際上の差異あるが故にあらざるや。斯道の開祖たる本居春庭氏はかの八衢研究が吾人に證明せるが如く、頗緻密なる、しかも組織的なる頭腦を有せられたるは想見するに難からず。かゝる緻密なる健全なる思想を有せる學者の一言一語は深く味ふべき價あらざるか。ささにもいひし如く氏の説明は氏の説明だけに權田氏のよりも寧合理的なりしなり。これを以て見れば、氏の「物」といひ「他」といへるは必何か認むる處ありて名づけしにて輕々に命名せしものにあらざるべし。吾人は哲學上の議に於いて「自」と「他」と「物」との三者を區別するを知れり。今之を示さむ。

主觀と客觀との差別は認識に必要である。之を認めざれば、認識は全く説明が出来ぬ。自我の認識にも此區別が存して居る。自覺に由て吾々は自我を認識する。其れには自我に活動的方面と受動的方面とが存する。是より主觀と客觀との區別が起る。又自我と外物との差別が同じ異方面から發生して來る。外物と自我との區別が現はれて來る。

然し、外界には他我即他人と非我即物體との區別が存する。此區別は物體には

自我の特色の或るものが備はつて居らぬ。他人には之が備はつて居る所から發生するのである。

(ラッド認識論中島氏抄譯)

今この三者を以てかの「自」「他」「物」にあてむに、「自」のづから「は」この所謂「自」にあらず、「みづから」のみ自なり、物を然するの物は非我の意の物にあらずして外界をいへる義なるが如し。「他」は「いつこまでもこゝの」「他」の義なり。

吾人はなほ念の爲に「自我」「他我」「我」と稱せらるゝものと「非我」との區別を明晰にしおくべし。これ將來誤謬を惹き起さざらむが爲なり。しかれども「自我」其の者の本質などいふ深奥なる論議は哲學者だに研究に苦めるものなり。吾人はかゝるものに手を觸るべからず。唯「我」と「非我」との差異の要點をあげば足らむ。「我」と稱せらるゝものは意識ある實在なり。この故に「自我」が精神的の實在なるは勿論、吾人が「他我」と認むる類のものも、又精神的の實在なることは明なり。かくてこの「自我」「他我」は人間と稱せらるゝ處のものなり。然れども若精神的實在を人間に限らずとせば「我」は精神的實在の意義の擴充せられたる範圍だけ擴充せらるべし。この「我」にあらぬ一切の外界は非我即物たるなり。

こゝに於いて動作作用の「自我」及「他我」即「我」が主體となりて生じたるものと、非我が主體となりて生じたるものとの二種あるべし。之をかの分類にあつるに左の如し。

「我が主體となりたるもの……みづから然する。
「非我が主體となりたるもの……みづから然する。

勿論こゝに「非我」といへるは其の使用せらるゝときの意に於いて「非我」として觀察せられたるものにして精神的實在の動作作用といへども、それが無意識の場合なるは悉このうちに入るなり。かくて「我が主體となりたるもの」がなす動作作用は二様に觀察せらるべし。主體單獨にて營まるゝ動作作用、單獨にては行はるゝこと難く、他に何等かの補充を要するものとの二種これなり。しかして其の補充に「我」と「非我」とあるべし。これをかゝる分類にあつるに左の如し。

非我の主たるもの。(みづから然る)

動作
状態

「我が主たるもの」
(みづから然する?)

「單獨にて行(みづから然する?)」
はるゝもの。

「我が補充たるもの」
(他に云々?)

「非我が補充たるもの」
(物を然する?)

(物を然する?)

吾人の解釋を以てすゝまば、自然にこの表の如き分裂をなすべきなり。如何となれば、非我の主たるものは單獨の作用にして補充を要するものにあらざれば、これには區分を施すべきいはれなく、我が主たるものにしてはじめて單獨なるものと

相對的なるものとの區別を生じ、その相對的なるものは其の對者の我なると非我なるとの區別を更に生じ、その對者の我は「他」にして非我は「物」たることこゝにはじめて明瞭となる。然らずば「自」「他」「物」の三語を使用して分つこととの要なきなり。然るに通路はこの三語を使用しつゝ、其の分類は十字分類に陥れり。何が故にこの誤謬を生ぜしかといふに、自他といふ語を使用するに、意義の不確定なる處より生ぜしなり。かゝる錯雜あるが故に古來この自他につきては異説紛々として適歸する所なかりしが如し。

以上の如く、舊來の研究は第一に自他の意義の曖昧、第二に自他を對偶的に研究することの誤謬、第三に用語の不精確、第四に分類の縱横的なること、この四大要點に於いて大なる缺陷を有す。この故に其のまゝにては之を繼承すること能はざるなり。

然れども其の説の原形は如何にもあれ、吾人か推論の結果として生じたる比較的に合理的なる二八二頁の表の如き形になれるものにては如何か、れたとへ合理的なりとも、國語研究上果して利益あるか、文法上何等の必要あるか、この點に於いて合格せずば、何の益もなき徒勞に終るべし。吾人はかの表の如き分類が必要なるか、否かをこゝに決するは時機にあらずと思ふが故に、なほ未決の問題として之を殘し置き、次に西洋流の自他にうつるべし。

今西洋流の自他の本義を明にせむ爲にハイネ氏の説を左に引かん。

Ausserdem teilen sich allen Verben in : 1) subjektive, deren Begriff auf das Subjekt beschränkt ist; 2) objektive, deren Begriff zu seiner Ergänzung die Beziehung auf einen andern Gegenstand erfordert.

1) Die subjektiven Verben drücken entweder einen ruhigen Zustand des Subjektes aus, oder eine solche Thätigkeit, die ihrer Natur nach keine Einwirkung auf einen andern Gegenstand zulässt.

2) Die objektiven Verben hingegen bezeichnen eine Thätigkeit, die von dem handelnden Subjekt ausgehend sich auf irgend einen Gegenstand bezieht. Sie erfordern also zur Ergänzung eines Begriffes irgend ein Gegenstandswort in einem der drei abhängigen Kasus.

Steht das von dem Verbun abhängige Gegenstandswort im Accusativ, so wird es im bestimmten Sinne das Objekt oder Zielwort genannt. Objektive Verben aber, die einen Accusativ erfordern, heissen zielende oder Transitive, d. i. übergehende, weil der in ihnen enthaltene Thätigkeitsbegriff auf einen Gegenstand übergeht, der als das Ziel der Thätigkeit die Wirkung derselben erleidet.

Im Gegensatz zu den Transitiva aber fasst man die übrigen objektiven Verben mit den subjektiven, also überhaupt alle Verben, die kein Accusativobjekt bei sich haben können, unter der Benennung Intransitiva oder ziellose Verben zusammen.

Wir unterscheiden demnach :

1. Subjektiven Verben.

2. Objektive Verben.

a. Mit einem Gegenstandswort im Genitiv } 1. Intransitiva oder ziellose Verben.

oder Dativ :

b. Mit einem Gegenstandswort im Accusativ } 2. Transitive oder zielende Verben. (Objekt):

西洋流の自動他動といふは全く譯語より來れるなり。Intransitive Verb は自動 Transitive Verb は他動にあてられたるなり。今大槻氏の自動他動の解を見む。

アラユル動詞ヲ其動作ノ性質ニ由リテ、自動ト他動トニ二大別ス。

自動 動詞ノ動作ノ獨リ、自ラスル性質ナルモノヲ自動トイフ。例へバ「花飛ぶ」鳥鳴く」ノ飛ぶ、鳴くノ如シ。其ノ意ソノマ、ニテ通ズ。

又自動ナレハ其動作ノ係ルベキ標準ナケレバ、意ヲ全ツセザルモノアリ。例へハ「鏡は壁に懸る。」顔は前へ向ふ。」ノ懸る向ふノ如キ、唯「鏡は懸る。」顔は向ふ。」トノミイヒテハ、其意未ダ通ゼズ必「何にか懸る。」何方へか向ふ。」ト問ハルベシ。然ルキハ其標準ヲ擧ケテ「壁に、」又は「前へ」ナド答ヘズハアルベカラズ、而シテ後ニ其意全シ然レハ懸る向ふノ動作ハ尙自ラスルナリ。標準ニハ「に」「と」「へ」「より」「から」「まで」等ヲ要ス。

他動 動詞ノ動作ノ他ノ事物ヲ處分スル性質ナルモノヲ他動トイフ。例へバ「蠶

は絲を吐く。蜂は蜜を醸す。ノ吐く醸すノ如キ唯「蠶は吐く、蜂は醸す。」トノミニテハ其ノ意更ニ通ゼズ、必ズ其處分スベキ絲又ハ蜜ヲ要ス、コレヲ他動ノ動作ノ目的トイフ、目的ニハをヲ要ス。

大槻氏のこの自動他動の説明は果してかの Intransitive verb, Transitive verb に該當するか。第一に獨自するといふは如何なる義ぞ。單獨にて他に無關係にて完成せらるゝ動作の義か。しからば有對自動といふは自動の本性と衝突したるものとなるべし。この有對自動の本性は氏の例の示すが如く、其の動作の係るべき標準なくば本義を完成すること難し。この故に氏の獨自するとは單獨にて完成せらるゝ義にあらざるは明なり。即氏の自動といへるは實際に於いて、他動の補缺部分たるなり。この故に氏の説明はともあれ、先他動を明にして之より自動を観察せずばあるべからず。さて他動といふ事の氏の説明は如何。氏は他の事物を處分する性質なるものをいふといへり。この説明を以て正しとせば、自動は他の事物を處分せぬ性質なるものをいふといはざるべからず。しからずば自動に於いて氏の分類の名目と實質との間に空隙を生ずべし。さて動詞の他動なるか自動なるかを判定する標準は何ぞ。氏の説明にては、をといふ助詞の有無を外にしては他に何等の標準なきなり。しかれども、を亦自動を助くることは氏も明言せらるゝ所なれば、をの有無によりては判定すること難し。こゝに於いて他動の動作の目的の有無によりて判定

するより外に道なかるべし。しかも動作の目的とは如何處分すべきものをいふか。處分するとは如何なる状態をいふか。これも亦十分なりとする能はざれども吾人は先この處分することの有無を以て自動と他動との分るゝ所以なりとして説を進めむに、この區別は何等の文法上の必要あるか。かく區別するは國語研究上利便あるか。吾人は若何等文法上の必要なものならば、苦心して之を區別すべき價値なきものと思ふ。たとへば氏の自動他動の説の如くば、自動の説明の實質と合せぬ點あり、他動の本質の不明の點あり、其の區別の標準の不分明の點あるを除きて考ふとも、なほ何等の文法上の効果を發見せざるなり。かの西洋の Intransitive verb, Transitive verb の區別は唯單に意義上の區別にあらずして實に文法上重要な事實の其の間に含まれて存するなり。

Die durch das transitive Verbun ausgedrückte Thätigkeit kann entweder aktiv (thätig), oder passiv (leidend) dargestellt werden. Wenn der thätige Gegenstand als Subjekt des Satzes auf einen andern Gegenstand hinwirkend dargestellt wird, das Subjekt also, im Wirkungsstande erscheint: so steht das Verbun im Aktivum oder in der Thatform, — Es kann aber auch der leidende Gegenstand zum Subjekt des Satzes gemacht werden. Dann steht das Verbun im Passivum oder in der Leideform.

Jedes transitive oder zielende Verbun kann die passive Form annehmen und die Thätigkeit, ein Passivum zu bilden, ist eine unentscheidendes Merkmal der Transitivity.

Aktivum und Passivum sind demnach nicht verschiedene Arten von Verben, sondern verschiedene Darstellungsformen der Handlung, in denen die Verben einer Art, nämlich die Transitive, gebraucht werden könn. Man fasst sie gewöhnlich unter der neuen Benennung Genus oder Zustandsform des Verbums zusammen.

Da die Intransitiva oder ziellosen Verben kein als leidende gedachtes Objekt haben, auf das die Handlung hinwirkt: so können sie natürlich kein Passivum bilden, sondern erscheinen immer in aktiver Form.

かくの如くなれば、他動と自動との差は唯所謂目的の有無に止まらずして實に、active, passiveを構成する實力の如何によりて決せられたる區別なり。しかるに大槻氏の自動の定義は Intransitive の義よりも subjektive Verben に該當するなり。この故に氏の他動を transitive Verben の義に正しくあたるものとせば、自動の定義と他動の定義との間に空隙あること明なり。この空隙は即氏の所謂有對自動なるものなり。吾人は氏の説明中にもこの空隙を暴露せることを認め。

動詞ノ動作ノ獨リ自ラスル性質ナルモノヲ自動トイフ。

自動ナレモ其動作ノ係ルベキ標準ナケレバ意ヲ全ウセザルモノアリ。

獨リ自ラスルものといふ詞は動作ノ係ルベキ標準を要するものといふまでの意を含ましめうるか、吾人は獨自するといふ語には他に直接に關係する處なくしてな

しうる意あるものと認むるなり。然るに氏の定義と實質とはかく矛盾せり。かつ又西洋流の自他を移植したるものならば、必、他動と自動の差別の最大要件として文法上この區別をなすべき理由として、働掛と受身との轉換をなしうるか否かを明言せざるべからず。彼等の自動他動の區別の要點はこゝに存す。若この要點を離れば、所謂自動詞他動詞を文法上研究することの必要は過半損失せるものといふべし。唯目的又は標準の有無を以てするものならば、獨逸文典にて最初の分類として見をたる如く、主言動詞、補足言動詞、獨逸文法教科書の名目に大別したる方可ならずや。然らずば、自動詞の定義を改めて疑を挟ましめざるやうにせざるべからず。かくて余は大槻氏の自動他動の區別は西洋文典の皮相をとり來りて國語にあてたるまでのものと認定す。この故にこの説も又直に服従すべき理由なきなり。

つら／＼西洋文典の自動他動この譯語は的確なるものにあらずといへども通例のいひざまなれば暫從ひつ。といふものを考ふるに、決して意義一偏の觀察より來りしものならぬは明なり。又其の作用状態が單獨にて完成せらるゝか否かの見地よりしたるものにあらざることも亦明にして、實に働掛けと受身との轉換の成否を以て分釋の原理とせることは前に引けるハイゼ氏の言にて明瞭なり。この故に西洋流の分類に理ありと認め、之を採用せむと思はむものは徒に形體の上に眼をとどめず、深く眞義をさぐらざるべからず。吾人はこの區別の眞義を探らむが爲

に其の働掛けと受身との主客の如何に眼を轉ぜむ。先にもいへる如く所謂他動詞とは第四格に立てる目的語を有する動詞なれば吾人はこゝに最重大なる關係を有せるその目的語なるとして觀察せむ。

Die Thätigkeit des Subjekts wird als auf den Gegenstand, welchen die trifft, hinübergehend vorgestellt, weshalb auch die Verben, welche ein accusativisches Objekt erfordern, Transitiva oder zielende heissen.—Nur das Objekt, nicht der Accusativ des (räumlichen oder zeitlichen) Zieles oder der Ausdehnung, kann im passiven Satze in den Nominativ verwandelt werden.—Hinsichtlich des besonderen Verhältnisses, in welchem das Objekt zu der Thätigkeit steht, lassen sich drei Hauptbedeutungen desselben unterscheiden. Das Objekt ist a) das Ziel der Thätigkeit, auf das sie gerichtet ist oder sich bezieht; b) das Mittel oder der Stoff der Thätigkeit, welchen dieselbe gebraucht, um mit oder an ihm zustandezukommen; c) die Wirkung oder das Produkt der Thätigkeit, das durch dieselbe Bezwecke und Hervorgebracht.

これを以て見れば、他動詞の目的語となりて働きを受くるものは三種の別あるなり。一は働きを引受けてそれを完からしむる目的、次は働きが自ら完成せむが爲に要する手段及材料、次は働きが目的とし、或は作り出す所の結果又は製作物これなり。かくてこれらの目的語は働き掛の文にありては目的語となり、受身の文にあり

ては主格となるなり。今左にこの轉換の例を示せむ。

Aktiv

- 1) Der Jäger hat das Wild geschlossen. Das Wild ist von dem Jäger geschlossen worden.
- 2) Der Arzt heilt den Kranken. Der Kranken wird von dem Arzt geheilt.
- 3) Der Wolf zerreißt das Schaf. Das Schaf wird von dem Wolfe zerrissen.
- 4) Der Knecht trünkte das Pferd. Das Pferd wurde von dem Knechte getränkt.
- 5) Der Holzhauer hatte den Baum gefällt. Der Baum war von dem Holzhauer gefällt worden.

Passiv

(獨逸文法教科書の例)

これを以て見ればかの第四格の目的語てよものは即動詞の自他を鑑別するに絶對的に必要なるものなり。

今以上述べし所を概括して西洋文典の自他の觀念を明晰にしちま、以て吾人の研究に進まむ豫備とせむ。其の言に曰はく、

西洋文典にいふ他動詞とは其の動詞が目的語(獨逸語にていはと第四格の目的語)を要し、しかして主格と其の目的語との間に於いて働き掛と受身との二様の文をなしうる性質の動詞なり。然らざるものを自動詞といふ。而して受身の文は必他動詞を待ちて成立するものにして、他動詞は亦必ず第四格の目的語を要するなり。この故に他動詞——受身——第四格は相關連して離るべからざる性質

のものなり。

かく言を立て、おきながら、なほ一の顧るべき點あり、そは他にあらざ、第四格に立
てる名詞は必他動詞の目的語たるか否かといふことなり。それ逆定理は必しも真
ならずとは論理の教ふる所なり。他動詞の目的語は必第四格の名詞なればとて、第
四格の名詞は必他動詞の目的語たりと推論しうべき理由なし。且之を實際に檢す
るに果して他動詞の目的語所謂受身の主たりうる目的語以外に使用せらるゝ第
四格の名詞あるなり。吾人は今こどくしく之を例示せず。いさゝかにても獨逸文
典をうかゞひたるものは悉之を知るなり。

かくて吾人はわが國語に西洋流の自他を適用しうるか否かを檢せむ。余は先、次
の順序によりて論證せむとす。第一目的語の認知、第二、受身の構成この二點よりし
て觀察せむ。

獨逸語に於いて、一概に第四格を以て他動詞の目的語なりとすることの不可な
るが如く國語に於いても又、をを伴へる體言は必しも所謂他動詞の目的語たらざ
るなり。この故にこの目的語を形の上よりして分たむとするは到底不可能の事な
り。何となればこの目的語は、をを伴ふことの外に特徴を呈せず。而して其の認知は
助詞をによりて決して區別しえられざるなればなり。

之を以てかの働き掛け、受身の轉換によりて區別せむか、或は明瞭にすることを

得む。然るに吾人の國語はこの點に於いて頗英獨諸國の語と趣を異にするものあ
るなり。今かの二九一頁の例を譯出せむ。

働き掛

受身

- 一、 獵夫野獸を射たり。 野獸は獵夫に射られたり。
- 二、 醫師病者を療治す。 病者は醫師に療治せらる。
- 三、 狼が羊を劈く。 羊が狼に劈かる。
- 四、 下男が馬に水を飲ましむ。 馬が下男に水を飲ませらる。
- 五、 樵夫が木を伐り倒したり。 木が樵夫に伐り倒されたり。

この五例は同一の程度を以て吾人に首肯せられうるか。二、三、は論なし。四に至
りて少しく異様の感を興へ、五に至りては全く吾人の感情に反せる語法なること
を認むるなり。余はなほこの五の例の如きものをあげて其の直譯を示さむ。

Im Ofen wird Feuer gemacht.

櫻爐ノ中ニテ火ガオコサル。

Das Dach wird mit Ziegeln gedeckt.

屋根ハ煉化石ヲ以テ蓋ハル。

Die Kreide wird aus der Erde gegraben.

白墨ハ地中ヨリ掘ラル。

(以上高橋氏文典ノ例)

Die Brücke ist von meine Freunde gebaut worden.

橋は我が友人に作らしたる。

(崎山氏語法書例)

これらの例は一も吾人の首肯に價するものなし。又吾人をしてこの種の意義を自發的に發表せしめば、誰もこの形式によるものなかるべし。されば、專西洋語を研究せる洋文家も亦この種の語法の吾人の國語に存在せぬことをいへるもの頗多し。之を以て考ふるに吾人の働き掛けと受身との間の關係は所謂西洋の他動詞及目的語の位置及關係によりて生じたる働き掛け及受身とは全く別なる性質を有せるものにあらざるかを疑はざるを得ず。にもかくにも吾人の受身は到底西洋文典流の考へと一致すべきものにあらざるなり。

以上論述せる所に依りて西洋文典の範疇を國語にあてむことの必しも望むべきものにあらず。寧望みうべからざるものなることを知れり。こゝに吾人は自由に國語の性質を討尋することをうるの境に出でたり。

西洋文典の範疇既に従ひらべきものにあらずなりたり。こゝに吾人が先に從來我國に發達せる分類法を批評せし際に得たる分類の如きものが必要なるか否かを研究すべし。今茲にかの既に掲げたりし表を再び抜き來らむ。

動作状態

非我の主たるもの

單獨にて行はるもの

(1)

我の主たるもの

補充を要するもの

我が補充たるもの

(2)

非我が補充たるもの

(3)

然れどもかく分類し得としても、それ果して文法上要用あるか否か。かの西洋文典が自他の區別を受身働き掛けの融通の有無によりて區別するが如く、國語にてもこの分類中の一項が彼の他動詞に該當するものあるか否か。余はこれにつき、岡田正美氏の説の頗注目するに足るものあるを以て左に之を引かむ。

母子を抱く。
教師、生徒を叱る。

此の如く説述部中に補足部ありて、その補足部が生物なる場合、即ち對部なる場合にはその「抱く」「叱る」の類の動詞を係對動詞といふ。

右自己動詞、自然動詞、反照動詞、係補動詞、係對動詞のうち、に於て英文典にいとところの他動詞に該當するものは係對動詞一種のみなり。此係對動詞のある文に於てのみ主客を轉換して新一文を作ることを得るなり。
母子を抱く。

子が母に抱かる。

教師、生徒を叱る。

生徒、教師に叱らる。

の如し。

(文章法大要)

實に氏の言の如く、英獨語にていふ他動詞の如く主客轉換しうるものはこの生物を以て補充とするものに限れることは吾人が既に暗々裡に默示し來れるものなり。この故に吾人の分類に従へば、第三種のみが彼の他動詞に該當すべきものと見ゆるなり。然れども果してこれが所謂他動詞に該當するか否か、未遽に斷ずべきものにあらず。

翻つて思へば西洋文典にありては其の補充たる目的語が生物非生物たるに關せず、受身の主語となりうるものなれば、今たとへかの第三種の動詞岡田氏の所謂係對動詞が之に似たればとて其を以て直に彼にあつるは大早計に屬す。よし又其をあてたりとて、名のみ相當りて實は即ち吻合せず。この故に吾人は未之を以てかれの他動詞にあたるものなりと斷定する勇なきなり。かくて岡田氏の説の詳細なる説明は之を聞くを得ざれども、吾人はなほ氏の説にも疑を挟むべきなり。

先氏は之を動詞の性質上の分類とせられたり。叱るの如きは實に生物と生物との交渉になれる作用なれば氏の説の如く係對動詞たるべし。しかしてこはたとへ、

無生物を補充としても必之を擬人したるものと見らるべき性質を有するなり。罵る「敬ふ」仕ふ等は此の類なり。たとへば次の例の如し。

菩提樹を神として敬ひ仕ふる人民あり。

すべてこの類の動詞に補充とされるものは、たとへ無生物なりとも、必生物に擬せられたる場合のものなり。この故にこの種の詞は岡田氏の所謂係對動詞なり。

然るに「抱く」に至りては如何。「抱く」といふ動作は其の抱かるゝものは必生物なることを要するか。なほ嚴密にいへば必生物を補充とせざるべからざる働きなるか。吾人の見る所にては「抱く」といふ動作の本質は生物ならぬものをも對象とする如く思はるゝなり。少くも其の對象は生物なりとて、無生物なりとて更に區分すべき必要なきが如きなり。

つきくしきをのこにさうぞくをかじうしたる餌袋いだけかせて。

(枕草子)

この場合にては、いかにしても生物と見るべからぬなり。かゝればかの係補係對の區別は動詞の性質に依存するものか、又補充を待ちてはじめて判別せらるゝものか、未遽に決すべからざるなり。

以上の如くなれば、吾人はなほ岡田氏の説に賛成するをうべからざるなり。今一步を譲りて受身の文をつくりうるものは他動詞とせむか。我が國語にありては全

然この説を可なりと認むべからざる事實存す其は即他にあらず岡田氏の説の如く第三種の動詞は主客轉換して受身の文をつくりうべししかも受身の文は必他動詞を待ちて構成せらるゝものにあらざるなり今一二の實例を左にあげじ

夫妻に病まる。
母子に泣かる。

(廣日本文典の例)

の例にありては「病む」「泣く」は實に吾人の所謂第二種の動詞にして西洋流にいはば自動詞なり而して其の動作の主たる妻子が受身の文にありては標準となること西洋文典にいふ他動詞の主が受身の文に於ける位置に異なることなし今吾人の擧げし例は近時の文なりなほ古文の例をあげて其の事實を確めむ

今は野山しちかければ春は霞にたなびかれ夏は空蟬泣きくらし云々

(古今集長歌)

はじめの例に於いては「病むもの」「泣くもの」はなほ人なるが今の例にありては「たなびくもの」は無生物たる霞なりこゝに於いてかの西洋文典にいふ受身と我が國語の受身との間に到底一致すべからぬ差異をあらはせりこの故に西洋文典流の觀察を以てしたる自他の區別は之を撤去すべく更に他の見地よりして必要に應じたる分類を執るべきなり斯くて其の結果が或は西洋文典の所説に暗合すともとは偶然の出來事にすぎざるものと見ざるべからず

前に屢論せしが如く我が國語の受身は西洋文典にいふ受身とは頗意義を異にするが如し受身についての詳細の説明は複語尾の條下に譲りて今論せずさてかく受身の對象となるものの有無によりて自他を區分することを排斥せる以上は別に自他の區別を求むる理由を定め之を分釋の原理とせざるべからず

こゝに吾人は古來自發的に我國の學者の間に發生せる説は何等かの必要に迫られて自然にこの種の區別をなすべきを感じたりしによるならむことを思ふが故にそれら學者の態度を探索して吾人の研究の基礎とせむと欲す

富士谷成章氏の自他に關する説明は裝抄の世に傳はらざるが故に詳細なる事は得て聞くべからずといへども聊伺ひ得べき端緒なきにあらず「あゆひ抄」大いぬの下に名目抄のぬき書として出せるうちに

一内外の詞 世にいふ有情非情なり内とは有情をいふ外とは非情をいふ又非情なりとも有情になしていふ時は唯内なり師説深き理ありこゝにいひつゝしがたし

一裏表の詞 裏とはみづからの上なり表とは人物事のうへなり但人物事のうへなりともしばらくそれが心になりていはゞ唯裏なり師説しるしつくしがたし

とありて「あゆひ抄」六「何む」の條下に曰はく

たのもしげに人にいひちぎるをたのむ^靡とよみ人のちぎりをたのみちぎるをもたのむ^靡といふにつきて、装のことわりしらぬ人まことふ事あり人のたのむるは靡ありてたのめてとかよひ人をたのむは靡なくしてたのみてとかよふやむとやむる^{いたむ}といひたむる^{いたむ}とあるがごとし、みな裏と表とのたがひにてたのむる^{やむる}いたむる^{いたむる}はたのます^{やます}いたます^{いたます}のころなり装抄にくはし、これを以て見れば氏は装を其の性質によりて表と裏とに分ちしもの如し。しかして其の表は所謂他に^{して}裏は自にあたるもの如し。然れども必しも然らざるは、何んの條に曰はく

みづからちもひたちていませゆかん^{いさかへらん}などいふは裏なり思ひやりてとあらん^{かゝらん}などいふは表也。

といへるを見れば今の所謂自他よりは意義頗廣く、専主體につきて言へるが如し。さて内外の詞といふものは又之に類する分類とは見ゆれど、あゆひ抄有倫の條下に

里言には外に^{あり}といひ内に^{ある}といふをうたにはあしなべて^{あり}とのみよめれば心しらひして^{ある}たがひに里すべし。

とあるを見れば、文主の非情有情の差なるに似たり。しかして何の必要ありてかく區別を立つるか明ならず。

本居春庭氏の詞の通路は其の研究の必要を明言せり。曰はく

詞の意をしらむよりはそのつかひさまをよくわきまふべきことなり意をしらむはやすくつかひさまをこゝろ得むはかたく又ふみかき歌よまむにもたとひ詞のころはよくしらすとも用ひさまを心えゐたらむにはいさゝかも用ひ誤ることはなかるべきを詞の意をのみ心得居ても其の用ひさまを知らざる時はあつから誤も多かるべし。

とてすべて詞の使用法を明むべき由をいひ、さて自他の條に至りては既に上に引用したる詞につきて曰はく、

そはあつからのだまり直くこなたのことをいふにはこなたにつかふべきことばをもちひ、かなたの事をかたるにはかなたに用ふべき詞をつかはざれば其事くはしくわかれず自他混雜して詞とのはず其さま聞えがたければなほざりに思ひすぐさずよくわきまへおくべき事なり。

これを以て見れば唯詞の使用上の混亂を避けむが爲にこの區別を持來したるものなり。かくてこの後の國學者は皆氏の主義の範圍を出でざるなり。

以上述べし所を見れば從來の學者の立脚地は甚單純にして、唯其の據る所は詞の使用上に誤謬を生ぜざらむが爲にすぎず、吾人も亦我が國語にて、受身の文を構成する點を除き去りて即西洋文典流の考を離れて考ふる時はこの外に更に何等

の必要を認めざるなり。

今、上の點よりして觀察すれば、用言が文中にあらはるゝにあたりて如何なる状態を呈するか、其の呈する状態に差別なきか、差別ありとせばそれは混亂せしむべからざるか、混亂するを許さずとせば之を防がざるべからず、之を防ぐには何等か規則を立つる必要なきか、而其の規則は果し立て得べきか、立て得べしとせば如何なる規則を持來すか、これ實に吾人がこの自他に關係して陸續提出したる疑問なり。この疑問にして決せられれば自他に關する論議は殆終局に近づきたるもの如し。

さて、既に諸の學者が等しく唱ふる如くこれらの動詞が文中にあらはるゝに種々の状態あり、即文主と共にあらはるゝあり、然らざるあり、然れども文主と共にあらはるゝとあらはれざるゝとは全般の實質用言に通じたる状態なれば論ずるに及ばず、其の動作、作用が非情物によりて營まるゝあり、有情物によりて營まるゝあり、これ吾人が先に述べし所なり、而、これ果して文法上の混亂を生ずる恐れあるか、吾人の觀察によれば其の文主が有情たるゝと否とは文法上更に混亂を生ずる恐なきなり、見よ春庭氏は「みづから然する」と「おのづから然る」とを一段に總括して區別を立てざりしにあらざや、氏の次にあらはれて自他を研究せしもの長野義言、黒川春村、横山由清の諸氏はみな文主の有情たると非情たるとに關せず、なほ春庭氏の説の如く一括せり、これ畢竟之を區別する必要なかりしが故ならずや、權田氏に至

りては之を分て、然もこれ更に何等の必要もなきものにして春庭氏の所謂詞の意をのみ取りたるにすぎざるなり。

次に文主單獨にて完全なる意義をあらはしうべき動詞と然らざるものとなり、この區別は其の動詞に内存する性質即屬性によりて生ずるものにして文主のみにて完全なる意義を發表し得ざるものは必何等か補填する所なかるべからず、若之を補填せざる時は意義不完に陥るなり、この故にこの區別は頗重要なるものなれば、等閑に附すべからず、たとへば

子似る。

水化る。

の如きは、其の似る標準其の化る結果をあげざる時は意義完全ならず、こゝに至りて動詞は其の性質上より必然二類に分つべし。一は文主單獨にて足るもの、一は文主單獨にては不完全なるもの、舊來の語學説にてはこの區別をなしたるものなし、然れどもこれを區別せざる時は殆動詞を使用すること能はざるなり、吾人が之を容易に區別しうる所以の者は既に語の操縦上の習練を積みたる眼を以てするが故のみ。

さてかく分ちたる上にてなほ考ふべきは文主のみにては其の作用の意義の不完全なるもの、間になほ混亂を生ずべき恐れなきか、吾人の目より見れば場所及時を區別せずば其の意義不完全なるもの頗多きを感じ、たとへば、

山を行く。 山へ行く。 山から行く。

これら悉特殊の意義を有せり。然れどもこれらは「山」と「行く」との間の關係を動詞のはたらきにて示せるものなれば、これのみにては他と區別すべき必要なきなり。今こゝに次の如きことをいはむに果して前と同じかるべきか。

山を見る。 山へ見る。 山から見る。

「山へ見る」の如きは殆何の義なるかを解せず。而して他の「を」からの「示す」「山」と「見る」との關係は前の「行く」とは甚しき相違を呈せり。これらは區別する必要なきか。同じく「山」と助詞とを有してなりたる文にして其の意義に著しき差を呈するはこれ畢竟動詞の屬性觀念に存する性質上の差にあらずや。かくの如き差は何によりて生ずるかといふに、一は「行く」といふが如く進動性を有し、一は之を有せぬによるなり。この點より見れば動詞は又靜定性のもものと進動性のもものとに分つことをうべし。吾人は此の如く種々の方面より動詞の性質を討究しうべし。しかも之を討究せむが爲に一の標準を定めざるべからず。しかしてかゝる標準は體言と用言との間の關係によらざるべからず。しからざる時は其の區別は文法上或は空理に陥ることなきを保しうべからず。又その體言と用言との間の關係といへども言語によりて區別せられうるものに限らざるべからず。然らざる時は亦空理に落つ。吾人はこゝに吾人の格助詞と稱するものによりて區別を判せむとす。これらの助詞は

我國語にありては體用兩言の關係をあらはす主なる形式を表せるものなればなり。既に上に述べし如く落合直澄氏の如きは自他の區別を助詞によりて試みむとしたるは暗にこの邊の消息に通じたりしが如し。今獨逸文典の動詞の區別を顧みるに(かの自他の區別を主とせずしていふ)次の如き分類となるなり。

1. Subjektive Verben.

2. Objektive Verben.

a. Mit einem Gegenstandswort im Genitiv oder Dativ.

b. Mit einem Gegenstandswort im Accusativ (Objekt).

かくて又自動詞と他動詞との中間に立つ再歸動詞といふものあり。しかして又一切の動詞を人稱動詞と非人稱動詞とに分つことあり。これらみなかれの文法上特異なる點を有するによりてなり。非人稱動詞は其動作主の明瞭ならぬ天地間の顯象をあらはすものにしてその主格には必不定の第三人稱代名詞を置かざるべからず。再歸動詞は動作をなすもの自又其の動作を受く。この故に其の動詞は必文主と同一なるものを代表せる第四格の代名詞を補足言とするなり。この點に於いて著しく他の種の詞と異なる點あるなり。この故にかれらの動詞は三重の見地よりして分別せられてあることを思ふべきなり。

しかしてかれらの區分は何に基くかといふに動詞其の者の性質に基くは勿論なれど之を用法上より見れば其に對する名詞代名詞に特別の法格存するが故なり。この見地よりすれば吾人が助詞の如何によりて區分をなさむと企つるは妥當なるものなるを知るべし。

いふ吾人は助詞の如何に著眼すべきことをいへり。果して如何なる現象が吾人の眼前にあらはれ來るかといふに、第一は「を」といふ助詞なり。この助詞は通例他動詞に伴はるゝものとせらる。しかるに

山を見る。(1) 山を行く。(2) 川を掘る。(3) 川を渡る。(4)

の(2)(4)の如く他動詞に伴はれざるにあらざるや。而して(1)(3)の「を」と(2)(4)の「と」とは意義全く別異のものと見えすや。而れども吾人はこの意義の差が「を」にあるか、動詞にあるかを熟考せざるべからず。吾人の考ふる所によれば「を」に意義の差あるよりは動詞の異なるが故に意義に差を生ぜしめたるものとせざるを得ず。少くとも動詞の意義の差が重大なる關係を有するは明なり。これによりて見ればこの四の動詞は其の意義に於いて異なりたる性質を有せるものなるを思はざるべからず。實に(1)の動詞と(3)の動詞とは意義の性質相類似し、「行く」と「渡る」とも亦相似たることは明なり。かく互に二の種類のなすが故に「を」も亦二種に使用せらる。この故にこの點より見ればこの二種の區別は其の動詞を使用するに重大なる要用あるものなり。

らむ。若動詞に性質上の區別なきものとせば到底其の意義を區別すること能はざるなり。

又「山へ行く」といふべくして「山へ見るといふべからず、「山へ登る」といふべくして「山へめぐるといふべからぬ」といふべし。と「を」といふ助詞を伴ひうる動詞等のうちに「も」といふ助詞には同伴し能はざるものあり。これ亦其の動詞の性質によりて生ずる差にあらざるや。吾人が助詞の状態によりて動詞の性質を研究すとは此の如きものをいふなり。

抑「を」に「と」いふ如き助詞の有無を以て動詞の自他を分たむとするに之を混亂せしむるが如きものは皆場所に關係せる動詞の場合なり。この榛莽を開かずば性質の研究の正路は明なることあたはざるなり。こゝに吾人はこの場所に關係せる動詞を研究して之を鮮明にし容易に其の他と識別し得らるべくせん。

こゝに場所的關係といふものは必しも一切の場合に通じての空間的關係をいふにあらず。唯これが助詞に如何にあらはるかを研究するなり。格助詞の中に空間的關係をあらはすを司るものは、「を」に「へ」より「から」なり。而してこの間に空間的關係は確に二様の状態にあらはるゝなり。「は」を「へ」より「から」にてあらはざるもの、「は」にてあらはざるものなり。この「を」以下にてあらはざるものは專其動作作用の移動せるものにして「に」にてあらはざるものは一定の地位に

存するものなり。少くも移動の如何を顧みざるものなり。こゝに於いて一を移動性作用といひ、一を靜定性作用といふ。

今かくの如くにして進み行かむが爲に格助詞の性質の概要を略述せむ。此の如き際に用ゐらるゝ格助詞は「を」「に」「へ」「と」「より」「から」の六なり。之を觀察するに二方面あり。時間的空間的と關係的となり。其の關係は自己關係と他との關係との二方面を見る。

「に」は自己關係にては自體の性質變化の際の標準をあらはし、對他關係にては標準を示す。時間空間に關しては一定の點を示す。

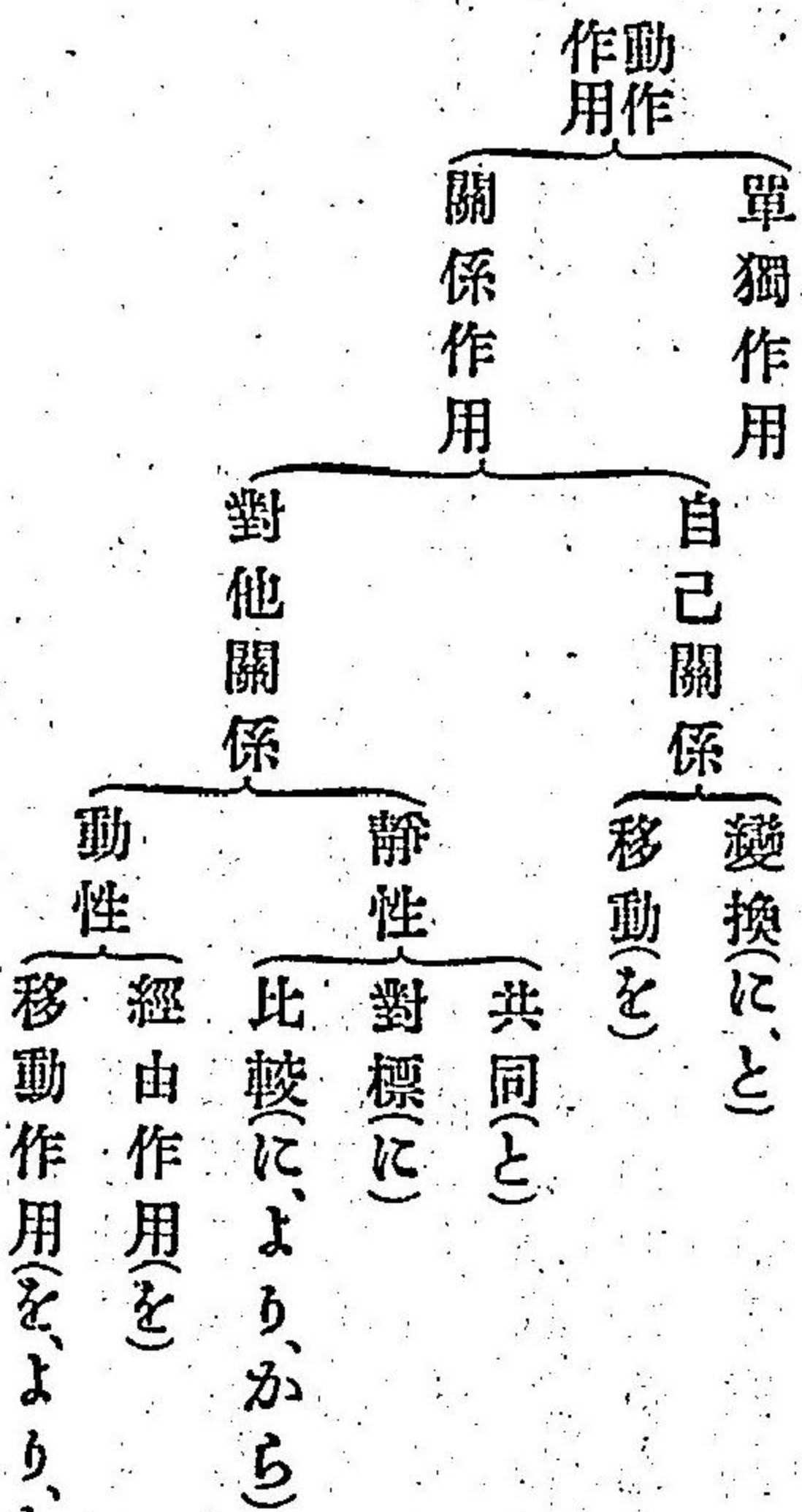
「と」は自己關係にては自體の資格變化の際の標準をあらはし、對他關係にては共同者をあらはす。

「を」は自己的にいへば自己移動をあらはす。而この際時間空間的にいへば經過點を示す。對他的にいへば經由作用の對標をあらはす。

「へ」は空間的に方面を示すのみ。「より」「から」は共に空間的にも時間的にも起點を示す。而「より」「から」は關係的にいへば比較の對者を示すことあり。

これら助詞は或は動作作用の全般に通ずるものあり、時間空間の一定點を示す場合の如きこれなり。或は又僅少なる種類の動作作用に限ることあり、方向を示すものゝ如きこれなり。こゝに於いて特異の状態のみを主眼として他を顧みざる時

は左表の如き關係を生ず。



自己關係と稱するものは事實上對者たるものを要せずといへども、言語上自己が變化するを言明する必要あり。又自己移動の際には經過の地點を言明する必要あり。この故に一の類をたてたり。

經由作用とは從來の所謂他動にあたるべきものにして其の作用が對者に及び對者を経由してはじめて完成せらるゝ如きものをいふ。これに二種の狀態あり、一はその動作作用が直接に對者に行はれ、通常對者に變化を起さしむるものなり。人、犬をうつ。馬水を飲む。生徒文字をかく。

二は動作作用が外形上變化を對者に及ぼすとなしといへども、主者の意識内にて

確に對者に對しての思想を變化せしめたるものをいふ即思想上の影響を與へたるものなり。

この經由作用と自己移動とは共に、助詞を伴ふを以て混亂せられ易し然れども自己移動なるか否かを認たる以上は、辨別に苦むべき恐なし。

以上の各作用は唯視點の異なるによりて生じたるものにして實は二三の作用をかねたるもあり。

右の者を左へうつす。(經由、移動)

生徒師に文字を問ふ。(對標、經由)

市民彼を議員に選ぶ。(經由、變換)

又一の助詞にして場合に應じて性質を變ずるとあり。

我は汝と舞をまへり。(舞ふは元來は單獨作用、一轉して經由作用となり更に

共同性を與へたり。)

かくの如く其の意義によりて性質を察し、かくて必要なる標的を補填するをうべし。かかる事は國語に熟せる邦人には殆無意義の事の如く見ゆべけれども、純粹に客觀的に見たる時に何を標準として標的たる語を補填すべきかを考ふるは至難なる事にして吾人が英獨語の格又前置詞と動詞との關係につきての法則に迷惑を感ずることの一途ならぬを見ても、かかる邦人にはつまらぬ如く見ゆることの

うちに重大なる眞理の顧みられて存することあるものなれば、決して輕視すべきにあらず。

動詞の性質の研究は以上の如し然れども、これ性質の研究に止まりて、一々何作用の動詞などことごとく、しく分類する必要を見ず、唯甲の作用の性質は何作用なれば如何なる標的を要すといふに止まる。この故に邦人の初等の教育にはこの作用の性質はことごとく、しく教へずとも自然に默考してあるなり。唯外人の國語を學ばむものは作用の性質を如何に觀察すべきかを知るは非常に必要なる事件なりとす。

吾人はなほ他の方面よりして動詞の種類を數へらべし。これも亦輕視すべからず。そは他にあらず、分析と混體との區別なり。上に述べし各種の動詞の例は皆分析動詞なり、分析動詞とは補充語と其の動詞とが分離して別々に存在するものにして、混體動詞とは其の補充語等が動詞の形の中に混合して存在するものなり。この故に、其の動詞は、動詞と體言との合一せるものと見らるべき形のものなり。左に二三の例を示す。

なるる(名を宣る) ぬかづく(額をつく)

潮垂る。 鼻ひる。

これら動詞にありては補充語が動詞中にあるが故に其の性質に應じたる補

充語を別に要することなし。

(四) 形式用言

一 形式用言の性質種類

上に述べし形容詞動詞は皆事物の屬性をあらはすと同時に思想の形式的方面即決定要素をあらはす者なるに、こゝに集めたる用言は其の意義極めて廣汎にして臚げに或屬性をあらはすと見ゆるもあれどしかもそれは形式的なる普遍的觀念のみにして之に實質を有せる語を添へては殆完全なる意義を成就し得ざるものなり。かく殆精神の統一作用をのみあらはすが如きものなれば、之を形式用言と稱す。

形式用言は上に述ぶるが如きものなれば吾人は左の如く定義を下さんとす。
形式用言は實質用言の補缺部分にして、其の屬性的觀念極めて廣汎にして、唯思想の形式的能力をあらはすに止まるが如き性質の用言なり。之を使用するに、は殆大抵實質ある語を添へざるべからず。

しかも形式用言といへども微弱ながらも或屬性觀念を有せるものなきにあらず。この故に其の性質より見て、之を次の如く區分す。先之を純粹に形式的なるものと幾分か偏する所あるものとに二分し、其の偏向あるものを又形状性のと動作性

のとに分つ。

形式用言	偏向する所あるもの	形状性形式用言	形式形容詞
純粹形式用言	動作性形式用言	形式動詞	

これら形式用言は其の意義の廣汎なるによりて應用の範圍頗廣く、殊に純粹形式用言の如きは殆用言全般に其の勢力を及ぼしうるものなり。しかしてこれらは直接に述語の地位に立てるは殆稀にして大抵は他の語を伴ひて之をして其の觀念部を擔當せしめ自家は其の決定要素たる統一作用をのみあらはすこと甚多し、かゝる時に其の觀念部を擔當せる語を賓語と稱す。或は客語と稱するも可なり。

二 形式形容詞

これに屬するものはごとしの一語のみなり。

この語は元來ことといふ體言の轉化したるが如く見ゆれば従つて體言を伴ふなり。其の形は形容詞と粗相似たり。唯「けれ」といふ活用即已然形を有せざるなり。左の如し。

原形	未然形	連用形	連體形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとさ

この用言は決して單獨に用ゐらるゝことなし。其の意義は甚漠たるものなれど

も之に觀念を補填するときは明瞭に認むることを得るなり。即己が伴へる賓語を以て比喩の觀念核子となし、自らは其の形式要素となり、かくて形容詞と殆同じき意義を寓せしむるものなり。然れども元來比喩的なることを忘るべからず。

この用言の賓語は體言なり。然るに用言の連體形より體言の資格を得たるものも亦賓語たるなり。而、これらの賓語には直接に連續することもあれど、多くは「が」といふ助詞の媒による體言は多く、のたて媒せらるれど、代名詞は「が」にて示さるゝこと多し。用言より體言の資格を得たるものには「が」を附すること多く、のは殆ど使用せず。又體言ならでも副詞を賓語とすることあり。そは「かく」の二語にて共に「といふ助詞を伴ひ來るなり。

桂の如き木 玉の如し 夢の如し

我が如く物や悲しき時鳥

歲月は流るゝ如し まことも君にあへりし如し

射るが如くも思ほゆるかな 有れども無きが如し

かくの如きことをさけり さの如し

余が先に用言の連體形より體言の資格を得たるものも亦賓語となるといひし用言は「如し」自家を除きての一切の用言をいへるなり。この故に形容詞も動詞も他の形式用言も悉皆この用言の賓語たることをうるものなり。

この用言は其の意義實に觀念を缺知せる形容詞ともいふべきものなるが故に「のやうに」のやうだの意に俚譯すべきなり。これにても其の形式的なるを知るべし。然るに従來漢語直譯の調よりして次の如き用法を生じ來れり。

嗚呼公の如きは千載の下人の龜鑑たりといふべし。

こは元來「如」字を一概に「ごとし」と和訓せるより拘泥して生ぜる誤にして、この際は寧意を強むるにすぎずして、其の意比喩といはむよりは例示に近きなり。何時代よりこの語法の國文にあらはれしかば、未研究の果に達せずといへども、比較的近代の語法なるべし。

この用言の活用は形容詞に同じく、唯已然形を有せざる點のみの差なるが其活用の用法も亦形容詞に準じて知るべし。今次に其の用例の一端を示す。

未然形 「ば」に對して、順續的假設條件を示す前行句をつくる。

さくが如くばまことに容易ならぬ事といふべし。

連用形(一重語形として句を重ねるもの)

遠山は笑ふが如く、近山は迎ふるが如し。

洋々乎として其上に在るが如く、其の左右にあるが如くなるべし。(駿臺雜話)

(二)は實質用言の上に冠せられて其の性質狀態を裝定せむが爲に使用せらる。わが如く物や悲しき時鳥ときぞともなく夜たゞなくらむ(古今集)

(三)は形式用言の賓語の如くになれるもの。

え思ひの如くもしあへてかたの如くいもひの御はち参るべきを。源氏若菜
(四)は「に」といふ助詞を伴ひて用言を装定す。これ特別なる用法なり。

又もとの如くにかへり給ふべきさまになど云々(源氏須磨)
年月の射るが如くに過ぎ去りにけり。

連體形 (甲)連體語として用ゐらるゝもの。

桂の如き君にもあるかな。

(乙)「ぞ」「なむ」「や」「か」といふ助詞の上にある時之に應じて終止となるもの、こは未だ
例を古代のものに發見せねどあるべきことと思はる。

(丙)體言に準ぜられたるもの。

斯くの如きはひとり忠良の臣民たるのみならず云々

次にこの用言の活用形の一覽表を示す。

原	形	未	然	形	連	用	形	連	體	形
語	形	用	法	語	形	用	法	語	形	用
ごとし	終	止	ごとく	件假 を示設 す條	ば	ごとく	中重	止語	ごとく	連終 準止
										體止

三 形式動詞

これに屬するものは「す」の一語のみなり。その活用は三段形にして左の如し。

原	形	未	然	形	連	用	形	連	體	形	已	然	形
す		せ		し		する		す	れ				

この詞は漠然と動作作用をあらはすものにしてそが如何なる行爲、動作作用を
なすか等の如き實質的屬性觀念を捨象したる其の形式をあらはすものなり。さて
この詞はしかく形式的なりといへども動作作用をあらはす點に於いては臆げな
がらも或作用を豫想せるものなるに注意すべし。之を明瞭にせむには其の觀念を
表はす語を加へて意義を明にせざるべからず。今これが賓語の状態につきて述べ
む。

この用言の賓語たるものは體言及體言の資格を得たる用言及び副詞の一部な
り。而これらの賓語は直に接するもあり、助詞を隔て、接するもあり。

先助詞を伴はぬものを説くべし。

體言が賓語たるものは最多し。
罪す。 くみす(與)。 心地す。 心す。

次に多きは用言の連用形の抽象的に體言となれるものなり。そは獨立にては體言となること稀なるものもこの用言には連なるもの頗多し。

形容詞にては(形式形容詞も)

衣冠を軽くして馬車をのみ重くす。

かくの如くす。

動詞にては

欲りする(音を促めて「ほ」するといふ様になれり)

ふりする(舊)

盡きする

死にする

うん(倦み)の轉ずる

副詞にては「さ」「かく」と「しか」の四種なり。

そへにとて、とすればかくり、かくすればあないひしらずあふさざるさに。

(古今集)

(萬葉集)

このくしみたまし、かしけらしも。

知足院殿何事にてかさしたる御のぞみふかがりけること侍りけり。さしたる

(著聞集)

この外また形容詞の語幹に「み」といふ接辭の附屬したるものを以てすることあり。

無みす(蔑)

よみす(嘉)

外來語の動詞の素たるものを以てこの賓語とすること甚多し。

勉強す

稱美す

存す

命す

類似す。

かく漢語は最多けれども、又其他の外國語にてもなしうるなり。固有名詞は素是普通名詞の特別化せしものなり。庶幾くは祝する處多くして詛する處鮮からしめよ。この用言と漢語と連る際にはその漢語が鼻韻を帯びたる時又は又長呼音の語なる時には濁音となることあり。

メイブル(命)

テウズル(調)

ロンズル(論)

第三章 語の性質 第二用言(四)形式用言

アンズル(案) ヘンズル(變)

固有語のものといへども、音便なる時には漢語と同じ變調を來すことあり。

うんずる(倦) うとんずる(疎)

かろんずる(輕) おもんずる(重)

おはさうずる(御座)

賓語が時としては其の意義甚空漠たる體言ものにて示さるゝことあり。然るときは又その意義廣漠にして唯一般の動作作用を代表することなほ名詞と代名詞との關係に似たれば前後の文勢によりて其の代表せる觀念を判定すべきなりとす。

親などものし居たまはぬ人なれば、

阿闍梨にものし言ひつけ侍りにき。

思ふべき人々の打ち捨て、物し去り給ひにけるなごり云々。

世を離るゝさまにものし見え給へば、云々。

賓語なくして單獨に用ゐらるゝことも間々あれど、さる時は大抵其が豫想する屬性觀念を補充して解せざるべからず。

歌合せんとて歌合しける時に云々。

むかじの人の袖の香をする。(句ふ)

田中の明神のほどには時雨のふりしけるにいかゞすべきとおもひけるに。助詞を隔て、接するものには、と又は、をを伴ひて接す。かく助詞を伴へるものも其の意義は賓語と用言と混一して括弧内に示せる如き意をなすなり。

(一)つれなき人をまつとせしまらし間に、云々。

(二)池にすむ名ををし鳥の水を淺み、かくるとすれどがくるれどあらはれにけり。但これらは括弧内の意と全く同じといふべからず。既に別の言ひ方をなせれば、又別の趣ありと知るべし。即かくすれば括弧内に示したる普通の言ひ方よりも一層感を強からしむるなり。

(三)入しれぬ、思ひを常にするが思ひをするは、思ふに意同じなるふじの山こそわがみなりけれ。

なほこの外に係助詞副助詞を伴ふことあるは論をまたず。

こそはして姿はみえぬ。

思ひやるさかひはるかになりやする。

いはで心に思ひこそすれ。

まどかうしあげなどして。

をのこだにせばさてもありぬべきを。

ひるはきて夕さりはかへりのみしければ。

かくてこの用言は其の性質の普通的なるより、殆すべての性質作用を代表しうべきものなれば、其の如何なる性質のものに使用せられたるかは前後の文勢によりて察するより外なかるべし。さて助詞の中にも、をを伴へるものはなほ經由作用の場合多しとす。上に掲げたるもの、ほか一二の例を下に出す。

歌合せむとてしける時に云々。

むかしの人の袖の香ぞする。

かゝる業は人のするにやあらむ。

時雨のしけるにいかがすべきとちもひけるに云々。

つれなき人をまつとせしまに云々。

かくるとすれどあらはれにけり。

この用言の活用は動詞の三段活用に似たるものにして各變化の用法も亦動詞に準じて知るべし。次に其の用例の一端を示す。

原形はウ韻なる「す」なること論なし」ともといふ助詞に接して展續的假設條件を示す前行句をなす。

夜なきすとたゞもりたてよ。

未然形 「ば」といふ助詞に接して順續的假設條件を示す前行句をなす。

かへる雁西へ行きせば玉章にもふ事をばかきつけてまし。

連用形 (一)文を重ねるもの

甲は復習し乙は遊戯す。

(二)語を重ねるもの。

二月にはかんの殿東宮へ参らせ給ふべければその御いそぎしのしる。

(三)他の用言に連ねて熟語用言をつくる。

竹あめる垣し渡して。

(四)動作の目的を示すもの。

勉強しに行く。

釣りしに來れり。

惟喬のみこ例のかりしにおはしますともに。

俗に「師」又は「仕」などの文字をあて、或職業に従事せる人々の名目にせるは、多くはこの連用形の轉じて體言となりたるものなり。但漢語源のものはこの限にあらずと知るべし。

はしはにし、埴を以て物をつくる人)

くすし、くすりを以て病を癒す人)

えし、繪をかく人) ぬし(ぬり物をなす人)

鑄物し。蒔繪し。

然るを多くは「師又は「仕」の義なり」とおもへるものも多きやうなり。こゝに一言注意しおくこと爾り。さりとして又

教師 樂師 兵士

などをまて、こゝの「し」なりともおもふはこれ亦惑へるものといはるべし。

連體形 三様の用法あり。(甲)體言を裝定せるもの。

秋の野に道もまどひぬ、松蟲の聲する方に宿やかからまし。

(乙)「ぞ」「なむ」「や」「か」等の助詞に應じて文の終止となる。又なくても終止となることあり。

むかしの人の袖の香ぞする。

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路にあふ人ぞなき。

わがたましひのなきこゝちする。

(丙)體言に準ぜらるゝにこの形よりす。

余が臍げに理解するは其の精神の儼然として存し云々。

已然形 二様の用法あり。(甲)「ば」「ど」といふ助詞に接して確定條件を示す前行句をつくる。

夏の夜のふすかとすれば時鳥なく一こゑにあくるしのゝめ。

(乙)「こそ」といふ助詞に應じて終止となる。

われこそは見ぬ人こふる病ひすれ。
次に形式動詞の活用形一覽表を示す。

原形		未然形		連用形		連體形		已然形		命令形	
す	終止	詞助	形	詞助	形	詞助	形	詞助	形	詞助	形
件設的戻	終止										
條假續	と										
	と										
	せ										
件	假設	順續的									
	條	ば									
	し										
目的	重	中止									
	語	する									
	準	終	連								
	體	止	體								
	すれ										
終	條	確									
止	件	定									
	と	ば									
	ども										
	せ										
放	希	命									
任	求	令									
	よ										

さて又前に述べし濁音となりし「ず」と稍趣を異にしてなほこの用言の變形なる「ず」てふ用言あり。次の如し。

原形		未然形		連用形		連體形		已然形		命令形	
ず	終止										
	ぜ										
	じ										
	のみに連る	復語尾に連る									
	する	連體言に連る									
終	準	連									
止	體	言									
	すれ										
終	條	確									
止	件	定									
	と	ば									
	ども										
	ぜ										
放	希	命									
任	求	令									
	よ										

この詞は從來とといふ助詞とすととの熟してなれりと稱せられ専むといへる複語尾の分出せる用言の原形即むよりうけたる時に限りて使用せらる。通例は原形と連體形已然形のみ用ゐらる。又命令形の用ゐらるゝとあり。

あしのむきたらむ方へいなむず。 (竹取) (原形の終止)

まかりなむずる事の口惜しう侍りけり。 (竹取) (連體)

さる處へ罷らむずるもいみじくも侍らず。 (竹取) (準體)

ゆゝしからむをいかせむずるといひたり。 (蜻蛉) (連體形の終止)

一和尙になり給はむずればよ。 (沙石集(前行句))

方々の手分をこそせられむずれ。 (保元) (已然形の終止)

かくて中古音便の盛に行はれし時代にはこのむをうの如く發音せしが故にそこよりうけし例又多し。この場合にては未然形以下殆悉使用せらるゝが如し。

(更科) ぬしたちてうどちあはさうぜよや。

(和泉式部物語) 人もなかりけるにそら耳さしあはさうじて。

(狹衣) などかう物ぐるほしうあはさうずらむ。

(源氏) はぢらひてあはさうずるいとをかしげなり。

(同) 清げにあはさうずる御子供の。

(同) 打ちひそみこなさあはさうず。

從來この活用に五種悉備れることを説ける人なかりき。義門師は活語指南に原形と連體形と已然形との三種をあげたるのみ。然れども吾人のあげし例の如く存せるを見るべし。

四 「あはす」といふ用言のはたらきにつきての論

この「あはす」といふ用言は八衢に佐行變格と斷定してより殆一定の姿となり、多くの學者首を傾けつゝもかの創始者の權威に壓せられて十分に否定の聲を發すること能はざりき。篤學大槻氏の如きすらその然らざる殆十分なる證據を有しながらもなほ最後の斷案を下すに躊躇せられたり。吾人はこゝにこの用言が所謂佐行變格の活用にあらずして四段と下二段との二様に活用するものなることを斷定せむとす。

顧みれば吾人は大槻氏の呈供せられし例證の外に殆出づること能はざるなり。しかもこの用言の活用は大槻氏の言の如く、四段と下二段と兩様に活くものなることを決せむと欲す。廣日本文典別記九〇節(參照)

先吾人は語根の同一なるものが活用を異にしてしかも同義同性なる用言として同時に存することを讀者の承認せられむことを請ふなり。かの別記にいへる「もるもる」(洩)「わかるわかる」(分)「うづもるうづもる」(埋)「ひらくひらく」(開)「さくさく」(生)を始とし「よくよく」(遊)「ひづひづ」(沾)「なぐなぐる」(和)「あぶすあぶす」

(浴)をほづ、をほづる「活」ほころぶ、ほころぶる「統」し、のぶし、のぶる「忍」たけぶ、たけぶる「奮」呼、まなぶ、まなぶる「學」うとむ、うとむる「疏」など手近き書を閲して得たるものだに、かくの如し。かくれば四段活用と下二段活用と二様の活用あるものなりとの論の成立すべき餘地あるは明なり。

従來の諸家は佐行變格と稱するに、余は四段下二段二様に活くものなりと主張す。その差異を左に表示すべし。

	原形	未然形	連用形	連體形	已然形	命令形
佐變	おはす	おはせ	おはし	おはする	おはすれ	おはせ
四	おはす	おはさ	おはし	おはす	おはせ	おはせ
下二	おはす	おはせ	おはせ	おはする	おはすれ	おはせ

今佐行變格なることを主張する人は其の活用のさま吾人の所謂原形未然形連體形已然形命令形に於いて下二段活用に同じく原形及連用形命令形に於いて四段活用に同じきことを承認しての上の事なれば吾人はこれが四段活用なることを證せむには未然形連體形已然形の存することを示せば足るなり。又下二段活用なるに於いては連用形の存在することを證すれば足れり。

連用形がせなる實例

(竹取) おておはせねとてなきてふせれば云々。

この「ね」は未然形をうくるものとするもあれど、ねてふ助詞は一切の用言の連用形に接して希望の意あらはすものなればまがふべきにあらず。されば連用形なる證とす。未然形なる時は唯胸中の欲望にとゞまるなり。時代も亦異なり。

(源氏) おはせし方年比。

(枕草紙) 夜中までなんおはせし。

この例多し。舊來の説にては「せ」より「し」しかに連る處即變格なる所以なりとすれど、そは止むを得ぬ説明といふべし。吾人の説によれば安全に統一的の説明をうべし。

(宇津保) なおはせそ

これ亦上の如き説明によりて解釋したるものなれど下二段活用とすれば論なきなり。

最初の例よりこゝまでは舊來の變格説にても説明し得られぬにあらず。

(宇津保) おはせ給ひしより
(榮花) おはせたれど

この二例に至りては、いかしても下二段活用なることを否定すること能はざるべし。

以上の諸例によりて吾人は下二段活用のものなることを主張す。次には四段活用なる例證を示さむ。

未然形が「さ」なる例

(大和) あはさず。

(源氏をとめ) あはさずなりなん。

この二例は共に一本に「せず」とあれば誤寫ならむとの説あり。然れどもそは臆説にすぎず。次の

(盛衰記) 私の敵にてもあはさばこそ。

に至りては決して誤寫なりといふべからず。この點より顧みれば、上の二例も強ち誤寫ともいはるまじ。

(源氏まさばしら) 泣きあはさうず。

(同、末つむ花) あそびあはさうず。

(同、やどりぎ) 清げにおはさうずる御子どもの。

(同、竹かは) はぢらひてあはさうずるいとをかしげなり。

(狭衣) などかう物ぐるほしうあはさうずらん。

(和泉式部物語) そらみきいあはさうじて。

(更科) ぬしたちてうどとりあはさうぜよや。

(大鏡序) あはさう人々

これらの「う」は皆「む」の音便なり。若所謂變格ならば「ませう」といふ俗語の如く「せう」となるべきに然らず。これ亦一の證なり。しかしてかゝる例枚舉に遑あらず。連體形が「す」なる例。

(枕草紙) やかたといふものにぞあはす。

こは「ぞ」の助詞に應じたる終止なれば連體形なること論なし。

(宇津保) さむらひにあはす中將

こは體言に連れるなれば連體形なること又論なし。前の二様の例證にて四段活用なることは明に知らるべし。第五變化の例證は發見せず。然れども「あはせ」といふを以て助詞を添ふることなくて十分に命令希求をあらはしうるは一方よりいへば變格たる證とせらるれど、四段活用といふ點より見れば、これ亦統一的の説明をうるなり。

こゝに一言辨じおくべきことあり。廣日本文典別記、一六四節に曰はく、

又次條「行けり」押せり」ノ如キ語尾活用ヲ作ルハ四段活用ノ動詞ニ限ルト、規定セラレテアリ。此ノ條ノ「セリ」モ趣ハ同ジケレド、佐變活用ノモノナレバ同一ノモ

ノモノト説キ難シ、サルヲ或ル文典ニ爲リ、座セリ、論ゼリ、等ヲ一様ニ列ネテ説ケルアルハイカヤ、オハセリトイフ活用アリヤ、

といへり。吾人は今こゝに「せり」と四段活用の轉せるものと同じとも異なりともいはざるべし。そは次の純粹形式用言の條に説くべければなり。しかも氏が論の粗なるは少しく辨じあかずば、國語學界の典據ともなれる氏が説なれば初學を誤らむ虞あるが故に止むを得ず、一言を費さむ。

氏は「オハセリトイフ活用アリヤ」とてさる活用の存在せぬことを暗示するが如し。或る文典とは何人のをさすか、吾人寡聞淺識にして之を知らずといへども、しかもこの詞は決して存在せぬものにあらざることはかへりて氏の證明する所にあらずや。同別記九〇節に氏が「おはす」の四段活用なるべき例として引けるに

大鏡ノ序ニ「おはせるは云々」といへるは實に用言の原形として之を説かむには「オハセリ」といふより外なきに

あらずや。吾人は氏が千慮の一失をことごとく、しく尤むる本心にあらねども、實に吾人が經驗はこの論をなすのやむを得ざるに出でしめたり。余は懺悔す。實に余はこの大鏡の序なる「おはせる」を以て四段活用なる例證として筆をやれり。偶胸中にかの「せり」が四段のと、佐行變格のと二種あるを思ひ浮ぶるに至りてかの條を閱し、はじめて、其の説に撞著する點あるに心づき、直に稿を裂きて捨てき。嗚呼著述の業を

れ難いかな。吾人は思つてこゝに至り、自ら顧みて流汗背を沾せり。此の論を見む人、決して雷同附和の眼を以て臨むなかれ。さて大槻氏の前後の説を參酌すれば大鏡の序なるはかへりて佐行變格なる證ともなるべきなり。然らずば氏は四段活用説を立せむとして佐行變格の條に之を塗抹し去りしものといはるべきなり。然れども吾人はしかく追及するにあらず。唯吾人はこれを以て四段活用説の證とするに不十分なることを注意し、あき、初學者には活眼をひらきて書を読まむことを冀望するものなり。

余は先二様の活用の存在すべき例證をあげ、次に實際存在することを示したり。なほ歴史的に之を證明して我が説の價值を問はむと欲す。

「おはす」の語源につきては諸説あれど、其の根柢に於いては契合する處あり。義門氏は之を「おほます」(大座)の切まれるものといひ、大槻氏は左の如くいへり。

案ズルニ「おはす」ハ古言ニ「大座座」トイヒシ語ヲ後ニ省キ「おほします」トイヒ、又ソレヲ省キテ「おます」トイヒシヨリ「おはす」ト轉シタルナリ(サレバ「おはす」トイフ語古クハ無シ)

吾人はいづれをとるかといふに、寧義門氏の説に従はむ。如何といふに「おはす」と「おほします」と重ねて更に「おはします」といふを以て考ふれば「おほします」の「おほまし」こそ實に「おはした」該當するものと思へばなり。「おほます」の「おほす」となり、「おはす」となる

は日本音韻推移の法則のゆるす所なり。されば余はこの「あはす」の本原は「ます」にありと断定す。

「ます」といふ用言はいかなる形に活用するかといふに、又四段活用と下二段活用との二種に活用せり。

四段活用の用例

(古今) 君まさで煙たえにし鹽がまのうらさびしくも見えわたる哉。

(萬葉) さかどりの朝こえまして。

(源氏明石) 海にます神の助にかゝらずば。

(土佐) 講師うまのはなむけしにいでませり。

下二段活用の例

(清寧紀) 便起柴宮權奉安置。

(式祝詞) 天皇我御命爾爾坐世云々

「ます」に所謂發語の「い」を加へて「います」といふこと多し。ゆゑを「いゆく」といふが如し。而してこの「います」も亦二様の活用を同時に有せり。

四段活用の例

(竹取) さればかへりいましてにけり。

(源東屋) かく心くちをしういます君なれば。

(竹取) かくや姫にすみ給ふとなこしにやいます。

(古事記) 遠邇伊麻世婆。

下二段活用の例

(枕草子) かく笑ひいまするがはづかしなどの給はする程に。

(伊勢物語) かくる道はいかてかいまする。

(源うき舟) 右大將の宇治へいまする事たえはてずや。

(宇都保) わが子のいませむかたには。

これを以てみれば「います」も「ます」も共に四段活用と下二段活用との兩様に活用するものなれば之より出てたる「あはす」の兩様の活用を具するも偶然にはあらざるべし。この故に吾人はこの形式動詞に同じき活用の他の動詞は存在せずといふを主張するなり。

五 純粹形式用言

これに屬する用言「あり」といふ語一つなり。其の活用左の如し。

原形 未然形 連用形 連體形 已然形 命令形

あり あり あり あり あり あり

これが四段の動詞と異なるは唯原形の彼れはウ韻なるにこれはイ韻なるにあり。

さてこの用言は事物につきて普通の形式の下に説明するものにして、唯之を説明すといふのみにして如何なる屬性をも豫想せざるものなり。が、これら一切の用言の基本的形式的部分を代表せるものといふべし。

この用言の意義と用法とは自然に四様の状態を來せり。この四は必しも區別せざるべからざるものにあらずといへども、今便宜の爲に之を立てたり。

第一は事物の實在をあらはすものなり。即唯事物の存在することをいふのみのものなり。これを名づけて存在動詞といふ。かくの如き意義は本性的用法にして次の第二以下のものは派生的のものなり。この場合にては獨立用言として述語の地位に立ちたるものなり。然れども單に「あり」を以て述語とせる文章は殆稀なるものにして、大抵其の状態又は時間場所を指示する語を伴ふなり。そは存在といふことは甚廣漠たるものなれば之を限定する必要自然に存すればなり。たとへば

昔小野の篁といふ人ありけり。

われ世の中にあらむ限りは。

さもある事とおぼしなから。

しかれども必これらの語を伴はざるべからずといふにあらず。伴はずといへども多くは豫想してあるなり。若更に時間場所状態を豫想せずして之を伴はざるものあらば、そは全く抽象的なる理論的文章に限れり。これ科學的哲學的なる論文な

どにありては時間空間の關係を捨象して理想的に、形式的に抽象的理論を述べたるものなればなり。これを以てもこの詞の純粹に形式的なる特別なる性質を認めらるなり。

この用言の形は實質用言の二様の性質を兼ね有せるが如きさまなり。即未然形より已然形に至る形は動詞の四段活用と同じく原形は形容詞の如くイ韻なるなり。而て各形の用法は大抵動詞と異なることなし。其の用例左の如し。

原形は終止となる外に「と」ともに接して、戻續的假設條件を示す。

たとへざる事ありとも心だに確ならば恐るゝに足らず。

未然形

わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらば往なんとぞ思ふ。

連用形 (一)句を重ねるもの。

花の咲くもあり、實のなれるもありき。

(二)體言の裝定語を重ねるもの。

世にありとありこゝに傳はりたる譜といふものゝかぎり、をあまねく見合せて。

(三)實質用言の上に連ねたるもの。

京にありわびて。

御かたち心ばへありがたくめづらしきまで。
目的言となることなし。

連用形は體言に變化しうるものなるが、あり其のまゝにて獨立にて體言となれるは少く、大抵他と相熟してなれり。

ありどころ。 ありか。 ありかず(有數) ありのくだり。
ありあけ。 ありのすざび。
などの如し。

連體形 (甲)連體言となれるもの。

此のある人々も御心のちろかならぬをみたれば。

またある時はえさらぬめだうの戸をさしこめ。

朝な／＼たつ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり。

この際のあるは往々多くの時又は場所より一の點をとり出したるが如くに用ゐらるゝなり、漢語の或英獨語の不定冠詞の如き意に用ゐらるゝなり。又乙體言に準ぜるゝものは殊に其の意著し。

あるはとしごとにかがみのかげにみゆる雪と浪とをなげき、云々、あるはさよふはさかえちごりて、云々、あるは松山の恨をかけ、云々、あるはくれ竹のうさふしを人にいひ云々。

然れども必皆然りと定むべからず、次の例の如きは唯存在することをいふなり。

つらからむ後のこゝろを思はずばあるにまかせて過ぎぬべき世を。

おぼやけ所にいりたりちする男家の子などはあるが中によからんをこそはえりて思ひ給はめ。

(丙)終止となれるもの。

君をのみ思ひこしぢの白山はいつかは雪のきゆる時ある。

已然形 前行句をなせるもの。

まめなれどなにぞはよけく、おかやの亂れてあれどあしけくもなし。

終止となれるもの。

かくさける花もこそあれ、むがために同じ春とやいふべかりける。
存在動詞の活用用法一覽表左の如し。

あり	終止	形語	原形
件假反終	假設的	止	用法
とも	と	詞助	形
ら	あ	形語	未然形
件設的順	條假續	用法	形
ば		詞助	形
り	あ	形語	連用形
重	中	用法	形
語	止		形
る	あ	形語	連體形
準	終	用法	形
體	止		形
れ	あ	形語	已然形
終	件確定	用法	形
止	條		形
	ども	詞助	形
れ	あ	形語	命令形
放	希	用法	形
任	求		形
	よ	詞助	形

第二種なるはある状態性質の存在せることを特に示さむが爲に形容詞に熟合するなり。かゝる場合には第一種の場合と同じく事物に對してある種の存在的意思をあらはすものなれど、第一種のもは事物そのもの、存在をあらはし、第二種のもは屬性その者が本體たる事物その者の上に存する事をあらはすなり。即屬性をその本體に附屬せしめてあらはすものなり。この際には音の熟合あるなり。然らぬときは唯「あり」に冠せられてありと見るなり。

かく形容詞と熟合せるものは連用形の「く」と「あり」とが熟音をなして「かり」となるなり。こはその意義主體が其の形容詞の示せる性質状態の如き地位に立てることを示す。この際の「あり」といふ義は先にもいふ如く、決して事物そのものの存在をいふにあらずして、その屬性の主體に依存することを示す。この故に主體についていふは、存在といふよりも立脚地を示す意強し、これを名づけて形容動詞といふ。この種のものの活用は第三種のに略同じけれど、なほ多少相違なきにもあらず。

この詞の第一種の「あり」の變化に比して異なるは先、原形なり。即「くあり」を約して「かり」とすといへども、原形的用法には「かり」を實際終止として使用せる例まれなり。

未然形

かゝの如き事多からば必ずべき事なり。

長からむ心もしらず。

連用形

花も紅葉もなかりけり。

この「なかり」につきて因にいふべきことあり。多くの學者は「なし」と「あり」と相對せるものなりといへり。しかれども若し「なし」が非實在をあらはし、「あり」が實在をあらはすものとせば、はた又「あり」と「なし」と論理的反對をなすものとせば、「なかり」といふ詞は何の意をあらはすものとすべきか。即非實在の實在といふが如き矛盾なる語といふべし。しかも「なかり」といふことは日本語の用例として甚廣く存在し、且吾人はこれを不自然と感ぜず、又不理なりとも思はざるは豈故なからむや。「なし」と「あり」と互に補缺をなす如き關係を有すと見るが故に其の説窮して施す所なきに至れるなり。吾人の見る所によれば「なし」は事物の非實在を説く詞なり。而してこれが形容詞として存するは形容詞は事物の性質状態のうち、一時的發動的ならぬものを説くなれば、この「なし」は一時的發作的の事物の状態ならぬば、自然にこの形をとれるなり。「あり」は事物の存在を説くことあり、又屬性の依存をとくことあり。しかれどもそは觀念に關して見たる點よりの説明にして根底に深く入りて尋ねれば、實に人間思想の統覺作用をあらはすが本義なるなり。この故に吾人は事物の非實在といふ觀念が、その事物につきて同時

に考へらるゝことをあらはす爲に「なかり」といふなり。かくの如きものなれば「ありはなし」の對語なりと限るべからず。其の範圍の廣狹著しきものあり。若之を疑はば「有りの否定の位置に「なし」を立たしめ得るか考へみよ。第一種の「あり」にてだに、悉轉換すること能はざるなり。これ吾人が「あり」を純粹形式用言と稱する理由なり。

我妹にこひすべなかり、夢に見むと、あれは思へどいねらえなくに。

わぎもここにこひすべなかり、むねをあつみ、あさとおくれば見ゆる霧かも。

これらは萬葉集以後には用ゐざるに似たり。而復語尾を分出する外には上の用言の隨伴たるもの、外に用例をみず。

唐も夢に見しかば、近かりき。

連體形

女郎花多かる野邊にやとりせば、あやなくあたの名をや立ちなむ。

あしかるべき大事どもなむかたぐ多かる。

已然形 この種の詞の已然形の「こそ對にする終止となれるは未見當らず。

これならず多かれとかいず。

命令形

はげしかれとはいのらぬものを。

この種の詞は形こそ變じたれ、其の意義に於いては殆第一種のものと同じく、共に存在性をあらはせるものにして、唯、其の異なる點は其存在の對象が實體なると屬性なるとの差あるのみなり。この故にこれらは、其の用法殆第一種のものと同じく、複語尾の分出方も殆一致したる方法による。かくて、又原形の終止、連用形の種々の用法已然形の終止などは皆還原したる形にてあらはすか、根元の形容詞のみにてあらはすかの二途をとるなり。

第三の用法は專統覺作用をあらはすに用ゐらるゝなり。即この用法は體言又は準體言及副詞のある者を以て其の觀念部を擔當せしめ、自家は唯其の賓語と主語とを結合せしめて、文の決定要素をなす。しかして陳述の能力は全くこの形式用言に存するものなれば、これ即論理學上の決者 Copula と稱せらるゝものに該當す。心理學上にはゆる統覺作用を具象的にあらはしたるものなり。之を名づけて説明動詞といふ。

さて、この種のものゝ賓語となるものは、多くは直に「あり」に接せずして、「又は」といふ助詞を介して接し、而、多くの場合に於いては、「若くは」と「あり」とが結合して「なり若くはたり」といふ一種の形を新に構成せり。

先「なり」より説明を始むべし。

「なり」は頗廣く使用せらるゝものにして、これが賓語となるものは體言、用言、副詞

の三類あり。

體言を賓語とせるものは次の如し。

位山寮までつける杖なればいま萬代のさかのためなり。

楠木正成は忠臣なり。

これは梅の樹なり。

用言には先形容詞を説かむ。

一、形容詞の連體形を以て體言に準じたるものを以て賓語とせるものあり
とくと思ふ舟なやますは我が爲に水の心のあさきなりけり。

二、形容詞の語幹に「み」を添へたるも使用せらる。

行きかへり空にのみしてふることはわがゐる山の風早みなり。

三、形式形容詞の連體形を以て體言に準じたるものを以てするもあり、

勇を好むはわれなほ由の如きなり。

動詞を以てするものは次の如し。

一、動詞の連體形を體言に準じたるものを以て賓語とするあり。

秋はてゝ人も手ふれぬひつぢぼの我心もておひいつるなり。

春くれば雁かへるなり。

山のたきつせ音まざるなり。

こゝに居て花を見るなり。

二、形式動詞の連體形を體言に準じたるものを以てするあり

我今まさに彼を訪はむとするなり。

しごとの工夫するなり。

三、動詞に複語尾の附屬せるもの、連體形を以てすることあり、

先だゝぬくいの八千度悲しきは流るゝ水のかへりこぬなり。

よをあかし侍りつるなり。

これへまゐるべきなり。

なみだのこぼれさふらひしなり。

たび／＼芋をもらはるゝなり。

又別に存在動詞を伴ふものあり、次の如し。

ありそべにつぎてこがさねから人の濱をすぐればこほしくあるなり。

松風にも水の聲にも自然に美しき調はあるなり。

用言を以てこれが賓語とせるものはいづれも其の概念を結體せしめて「故」「爲」「事」「物」などの意を含めり、而普通には「の」といふ助詞にて結體の代表をなさしめて譯するを得るなり。この故に其の用言は明瞭に賓位をあらはして決定要素とは形の上にて於いて區別ありしかるにこゝに形容詞形式形容詞も以外の用言は普通の

終止に用ゐらるゝ原形を以て陳述せるものに更に「なり」を附屬せしめて其の決定に力を添ふるものあり。

かく原形をとれるものに「なり」を添へて文勢を強むるはなほ動詞に「す」を添へて「力」を強むると同じく意義の上に變動を呈せざるが如くなれど頗勢力を強むるものなれば古來之を詠嘆の「なり」と稱して一種特別のものとしせり。然れどもこの「なり」を詠嘆の「なり」とせば、

従つてかくの如き處置をとれるは當然なりとす。

の「とす」なども又詠嘆のものとなるべし。いづれも感動を強めてその斷定を強勢ならしむるものなればなり。かくてこの種の用法は斷定をのみあらはして聊たりとも疑似を含めるが如き語氣には使用せられぬよりしてか原形と連體形と已然形との用法を見るのみなり。

動詞の例

しら山に年ふる雪やまざるらむよはにかたしくたもとさゆなり。

いづくかとわが松山に今はとてこゆなる浪にぬるそてかな。

形式動詞の例

秋の野に人まつの蟲のこゑすなり。

さをしかの友まとはせるこゑすなり。

存在動詞の例

豊葦原の中つ國はいたくさやきてありなり。

この用法は複語尾にても形容詞の性を帯びざるものには存す。

しきたへの枕の上にすぎぬなり露をたづぬる秋の初風。

うさよかないかにならましすずむしのたのむ山路にこゑたてつなり。

副詞には情態を示すものなり。

しもべどもなどだに此院に參るには心づかひことなりけり。

しろたへのなからの濱のしもの上にあとさたかなるけさのちち人。

さならぬうちとけわざもしたまへり。

かたみこそ今はあだなれこれなくばわするゝ時もあらましものを。

いつよりもこよひの月はさやかかなれ秋の夕もたどるばかりに。

漢語の副詞にて性質情態をいふものも亦この賓語たることを得るなり。

なか／＼やうかはりて優なる方はべりし。

氣候溫和なり。

その生活や質朴なり儉素なり。

滿天地の氣象は一種の暢美なる感情を起したり。

この「なり」は其の形は存在動詞に同じけれど連用形用法のあるものに於いて

相違す。即この「なり」にて重文をつくらむとするときは「あり」の代に形式動詞の連用形「し」を用ひ之に複語尾「て」を添へて示すなり。

葉は緑にして花は紅なり。

又その「し」を省きて「にて」にて示すことあり。

これは木にてそれは金なり。

其の他の用例は左にあぐ。

原形、終止たるものは今殊更にあげず、反續的假設條件たる前行句を示すこともあり。

未然形 頼めずば入のまつちの山なりとねなましものを十六夜の月。

未然形

水の上に浮べる船の君ならばこそとまりといはましものを。

連用形

人ことのしけれる時に吾妹子が衣なりせば下にきましを。

連體形 體言に準ぜられたるもの。

はじめなるはすてに林麓にちちぬ。

うつなるひさは宮もとどろに。

終止に用ゐられしもの。

あとは山けさこえくれは郭公こずゑはるかに今ぞなくなる。
など世の中の玉だすきなる。

この「なり」の連體形の連體言に使用せるはたとへば、

子なるもの、

行くなる人、

なくなる蟲、

の如く用ゐらるゝなり、これにつきて、地名、人名等所謂固有名をなりにてうけたるを誤りなりといふこと國語學者一般の説なり。その故をさくに廣日本文典の説の如く、

此「なり」ノ語原ハ、ありノ約ナルベク、意義ハ、にてありナリサレバ云々「顔
回なる者あり、鈴木なる者來りて、明倫館なる學校を建て、」ナド用キルハ非ナ
リ、斯クテハ「顔回にある者、鈴木にてある者、明倫館にてある學校」ナドナリテ
語ヲ成サズ、是等は「顔回といふ者、鈴木といふ者、明倫館といふ學校」トヤウニ
アルベシ、古訓點ニハ「顔回ト云者」ナドトアルナリ。「顔回ナル者」ナドトアルハ
一齋點ナドノ旨訓ナリ。

といふにあり、思ふにこは「玉霞」などや始めなるべき、かくて傳唱して今日に至りぬ。吾人ははじめは之を信ぜりき、しかも深く研究するに及びて、かへりて非なるを

さとり。今之をいはむ。

先この説の根柢如何といふに、まづ三點の一にあるべきなり。その三點とは第一、固有名を「なり」にてうくる事の不可。第二、第一を可なりとすとも、これを以て其の名稱を有せる本體の裝定をなすことの不可。第三、第二を可なりとすとも、古來例なく、修辭上亦不可なりとの論なるべし。第一の説を立せむには、地名人名を賓位に立てたる際には、この「なり」を使用すべからずといふ結果を生じて、

これは我友鈴木なり。

こゝは京都四條なり。

の如き例は到底生存を認められざるに至らむ、かくの如き愚説は唯一人も唱ふる人あらざるべし。第二の説は第一の説を破したる上は論ずるまでもなき事なり、何となれば既に斷言することを承認する以上は之より一步を轉じたる連體形が排斥せらるべき理由なきなり。且この論者は空間的の有形體の存在と精神的の統一斷定作用との區別を知らざるものといはれても、辯護の餘地なきなり。「なり」は「にあり」なるが故に存在に限るといふが如きは確に統覺作用をあらはす「なり」の勢力を認むること能はざるものといふべし。第三の古來例なしといふは、

父はなほ人にて母なむ藤原なりける。

殿上にさふらひける在原なりける男の云々。

(伊勢語)

(同)

これらは諸本みな然り。こゝは「ける」がつける故に違はむといふ人あるべけれど、それは秋毫もこの争點の累をなすものにあらず。古來例なしといふは證據なきの言なりとす。

さればあます所は修辭上の論のみ。吾人もこの種の語法は頗間接的に又多少冷淡なる態度をとれるものと認むるを以て、之を使用するには頗注意すべきものなりと信ず。しかもこれ修辭上の考察にして文法上これによりて可否を決すべきいはれなきなり。漫然語源に拘泥する時は「白墨」といふ如き語を否認するに至る如き偏狹なる議論に陥るべきなり。

已然形

皆人をねよとのかねはつくなれど、きみをしちもへばいねられぬかも。
今日なれど若菜もつまず。

思へども思はずとのみいふなれば否やあもはじちもふかひなし。

あはれてふことにしるしはなけれど、いはてはえこそあらぬものなれ。

「たり」は用言を賓語とすることなし。體言と副詞とを伴ふものとす。
體言を賓語とせる例。

住みとげむ麻たるべくも見えなくなほほどもなき身をこがすらむ。
汝ぢ文章の人たるに依て他國へ可遣き也と見て夢覺ぬ。

舍利弗和上たり。目連教授として各戒を授けつ。

「たりの伴ふ副詞は漢語にては雙聲疊韻疊字及然焉等を下にふめるものに多しとす。

關々たる雌鳩は河の洲にあり。

茫莫たる平野至る所にあり。

窈窕たる淑女は君子の好迷なり。

この事判然たらば後人の爲ともなるべし。

慨焉たること之を久しうす。

立ちて窓戸を排けば星斗爛たり。

雙聲疊韻疊字然焉等は漢文典上の知識なり。次にそれらの解説及例をあぐ。

今こゝにあげたるものは漢語にても從來形容の語と稱せられしものにして主として事物の外貌を形容してあらはす語たるなり。

雙聲は次の如きものをいふ。

- | | | | |
|--------------------|---------------------|---------------------|--------------------|
| 繽紛 ^{ヒンブン} | 悽愴 ^{セイサウ} | 淋漓 ^{リンリ} | 髣髴 ^{フウフツ} |
| 澎湃 ^{ホウハイ} | 參差 ^{サンシ} | 森茫 ^{センマウ} | 玲瓏 ^{レイラウ} |
| 凜烈 ^{リンレツ} | 劉曉 ^{リウキョウ} | 瀟洒 ^{シヨウサイ} | 流離 ^{リウリ} |
| 浩汗 ^{カウカン} | 忸怩 ^{チウチ} | 飄渺 ^{ヘウベウ} | 倉卒 ^{サウソツ} |

陸離^{リクリ}

これらは皆その語を組立つる語の音の頭にある子音を同じくす。即日本語的に説明すれば同行の音を頭とせる語の重なりたるものなり。

疊韻は次の如きものを云ふ。

- | | | | |
|--------------------|---------------------|--------------------|--------------------|
| 茫洋 ^{マウヤウ} | 嬰黷 ^{エイタク} | 朦朧 ^{モウロウ} | 浙瀝 ^{セキレキ} |
| 絡繹 ^{ラクエキ} | 崔嵬 ^{サイクワイ} | 宛轉 ^{エンテン} | 嵯峨 ^{サガ} |
| 婆娑 ^{ハサ} | 嬋娟 ^{センケン} | 倉皇 ^{サウクウ} | 紛紜 ^{フンウン} |
| 窈窕 ^{エウテウ} | 聯綿 ^{レンメン} | 赫奕 ^{カクヤク} | 燦爛 ^{サンラン} |
| 爛漫 ^{ランマン} | 潑刺 ^{ハツラツ} | | |

これらは皆韻を同じくせる者なり。即「イ」「ウ」「エ」「ク」「チ」「キ」「ツ」等の語尾を同じくするのみならず其上にある音もみな韻を同じくせり。日本語的にいへば同列の音を有せる語を重ねたる者なり。但し音韻に古今の變遷あるが故に今の韻を以てすれば全く同韻ならぬものもあるべし。又日本に來りてのち音のくせによりて多少變りたる者もなきに非ずと雖も、それらの點はとゞしく論ずるにも及ぶまじ。

- | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 茫々 | 悠々 | 蒼々 | 冥々 | 沈々 | 熒々 | 團々 | 昭々 | 皎々 | 蕭々 | 爛々 |
| 參々 | 閃々 | 縷々 | 漫々 | 濛々 | 霏々 | 靄々 | 飄々 | 颯々 | 嫻々 | 屑々 |

紛々 錚々 遲々 焔々 赫々 寂々 巍々 峨々 嶽々 津々 呱々
堂々 綽々 井々 駸々 兢々 戰々 坦々 戚々 殷々 啾々 嘒々
洋々 亨々 隆々 淡々 默々

「然を下に踐めるものは次の如し。

寂々 寂々 漫々 漠々 卓々 豁々 飄々
凜々 凜々 超々 嶙々 蔚々 渾々 默々 悄々
藹々 藹々 泰々 瞭々 皎々 悠々 油々 燦々
慨々 勃々 欣々 愕々 愀々 悽々 兀々
索然 慙々 昂々 憤々 奮々 陶々 依々
「焉を下に踐めるものは次の如し。

忽焉 慨々 悵々 喟々 澹々 颯々 巍々
この外なほ「乎」「如」「爾」「若」を下に踐めるものこの類なり。

「乎」を踐めるもの

茫乎 凜々 確々 昭々 浩々 温々 澹々

「如」を踐めるもの

皎如 紛々 突々 豁々 欣々 淡々 躍々

「爾」を踐めるもの

莞爾 蠢々 漠々 卓々 卒々 確々 渺々

「若」を下に踐めるもの

瞳若 沛々 悒々

又疊字のものを更に「然」「焉」「乎」「爾」「如」の上にあきて用ゐるものあり。
「然」を踐めるもの。

紛々然 茫々 悠々 蠢々 莫々

蠢々然 戚々 蒼々 皎々 蓬々

颯々然 巍々 照々 得々 噴々

「焉」を踐めるもの。

浮々焉 縷々 巍々 淡々 兢々

「乎」を踐めるもの。

蒼々乎 昭々 皎々 漠々 茫々

巍々乎 飄々 斷々 郁々 渺々

「爾」を踐めるもの。

颯々爾 蠢々 騷々 洋々

「如」を踐めるもの

皎々如 怡々 欣々 天々

なほ上の例にあげたる際「たり」の如く一字なるものも少からず。次に數例をあぐ。
般節、赫恍茫寂宛漠儼紛寥鬱。

これらは副詞として用ゐらるゝときは「と」助詞を伴ふを常とす。而、それよりして「たりに」熟合せるものたるなり。

「なり」と「たり」との意義上の差をいへば、「なり」は内面的にして主として断定をあらはし、「たり」は外貌的にして主として状態をあらはせり。

これは子なり。
我れは子たり。

これにて一斑を知るべし。畢竟するに「に」と「と」の區別に基づくものなり。この故に助詞の條を参照するを要す。

第四種のもは動詞及び形式動詞に附屬してその屬性の存在をあらはすものなり。而、動詞全般に通ずるにあらずして四段活用の際に限れりといふが普通の説なりとす。

四段活用の連用形より、ありに接し、その「イ韻」と「ア韻」とが混じて別種の韻「エ」となり、かくて混一して一種の活用形を生じたるもの、これ今説かむとする所のものなり。たとへば「ありと「あり」と相結合して新に「あり」となれるもの如きなり。かく説明するが義門師の説なり。余も亦之に従ふ。他の説には中間に「て」といふものを介し、

約音を生じてかくなれりといへど、しかるときは「あり」と「あり」との別を如何にして説明せむとするか。さけり」と「あり」とは同意義ならぬこと。義門師の説にて明なり。即「あり」と「あり」とは咲きたる結果の存在せるをいひ、「あり」は其の事實の存在をいへるものなれば、混すべくもあらず。

この詞の意義は其の屬性事實が現存せることをいふなり。この故に、或は其の動作状態が現に行はれること即一方より見れば完了に對しての未完了とあらはし、一方にては斷絶に對しての繼續をあらはすなり。今之を名づけて動作存在動詞といふ。

今先、四段活用を基とせる動作存在動詞の例を示すべし。

原形の例。

いせの海のつりのうらげなるさまなれど深きころは底にしづめり。

いさりするよさのあま人出ぬらし浦風ゆるくかすみわたれり。

秋の野にさける秋萩秋風になびける上に秋のつゆあけり。

こは連體形の例も二のあり。

妹が爲命のこせりかりこのちもひみだれてしぬべきものを。

鶴洲に立てり。

春雨を待としあらし吾宿のわかきの梅もいまだふふめり。

わづらはしき御心をとわびあへり。大伴のみつともいはし赤ねさしてれるつく夜にたゞにあへりとも。

未然形の例

天の川はし渡せらば其へゆもい渡らさむを秋にあらずとも。絶えず行く明日香の川の淀めらば故しもあるごと人のみまくに。とりのあと久しくとまれば。

連用形の例

よろづの言葉とぞなれりける。あもへりし妹にはあれどたのめりし子等にはあれど。

連體形の例

いせのうみに年へてすみしあまなればいつれの藻かはかつきのこせる。あふさかの關をや春も越えつらむ音羽の山のけさはかすめる。ちると見て有るべきものを梅花うたてにほひの袖にとまれる。このれるは上にぞなむ等の助詞なくして終止せるもの又このれりといふ活

用に限りにて上にこそといふ助詞あるときに連體形を以て終止すれといひて終止することなき慣例なり。

わかれにし玉はかへすにかたけれどなみだのみこそ袖にかゝれる。榮花物語
こむといひてござりしよるも有りしかばまたぬしもこそまつにまされる。
春霞立てるやいづこ。金銀るりしてつくれるなり。

已然形の例

さかざりし花もさけれど山をしみ云々。
あだなりと名にこそ立てれ櫻花年になれなる人もまぢけり。
あもひの外なる人のいへれば云々。

梅の花それとも見えすひさかたのあまぎる雪のなべてふれれば。先にいひし如くかゝる用法は四段活用の語に限れるにあらずして次にあぐる如く形式動詞にも存するものなり。大方の學者は四段のなれるとすのなれるとの間に差ありといふしかもそは四段なるとすなるとの差の外に何等の文法上の差異を發見しえざるなり。

形式動詞に「あり」の熟合してなれるものは其の意義用法共に動詞に附屬せるものに異ならず即其のあらはせる意義は「す」よりは寛漫にして其の動作の繼續し存在せることをあらはす。

この詞の賓語となりうるものはかの「す」の賓語となれるものすべてなり。

原形

この殿はうべも富みけり、ささくさのみつばよつばにどの作あせぬ。勉強せり。烈しくせり。

明にせり。うるはしみせり。

未然形 この例は活語指南に僅に

道場超絶セラム。

の一を引けるのみなれど、今昔物語などにはなほ例少からず。

若殿提出家セラハ我モ汝カ出家ヲ許サム。

汝チ猶可習所薄シ速ニ無學ノ果ヲ證セラハ入レテ令座ント。

連用形 これは複語尾に接するものを見るのみ。

け長き妹がいほりせりけむ。

連體形

雪ふれば冬こもりせる草も木も春にしられぬ花ぞささける。

思ふとちまとぬせる夜はから錦たまくをしきものにぞありける。

いさらぬはやくの事も忘れじを本のあるじや面かはりせる。

黒はみたる物の弓箭を帶せる向様に歩み來れば。

已然形

今日は社會の進歩著しくて人智開發の機關も完備せればその人の心がけ次

第にて立身出世をなしうべし。

これが終止に使用せられたる實例に接せず。

以上にて純粹形式用言の種類をとけり。之を集むれば次の如し。

存在動詞

形容動詞

說明動詞

動作存在動詞

今これらを動詞として命名したりしものは深き理由あるにあらず。從來の慣例を

採用したるまでのものなり。

さてこゝに又場所を示す體言が存在動詞の補語となりて之に熟合して「なり」の

形をとることあり。

天原ふりさげみれば春日なる三笠の山に出でし月かも。

こゝなる門は誰れが門。

こは説明動詞なる「なり」とは異なるものなれば混ぜべからず。

なほこの形式用言が熟合して一の單語の如くなれるものを次にあげむ。

をり、これは四段活用動詞にして其の原形がイ韻なるところありに全く同じ。これは居とありとの熟語なり。なほ來ありがけりとなりしが如し。この詞の「有」と異なる處は「あり」は萬般事物の存在をあらはせるにこれは有情の存在をあらはすに限れるなり。これが「あり」の變形なることは形よりいふも意義より言ふも否定すべからず。しかれどもそれは既に純粹形式用言と稱すべきものならず。一種の動詞なり。今唯原形の用例のみを示す。

あるにもあらぬ身をしらすしてと思ひをり。(伊勢物語)

はべり、これも「這ひあり」の約して生ぜるものなりといへり。其の語源はとまれ「有りの熟語なること論なきなり。即ち貴人の側に賤しき人が従ひて在る意をあらはすものなれば」をりの謙語なること明なり。されば一轉して其の陪侍の意義を失ひ、かの「あり」の如く、單に形式的にそはるに至ること中古以來の文の例にて知るべし。但其の謙語なることは如何なる場合にても消滅することなし。これ亦「あり」の如く、原形はイ韻なるなり。

おのれが許にめてたき琴侍り。(枕草子)

いまぞかり、又「いまずかり」ともいふ。これも亦一種の動詞なりと稱せらる。しかれどもこれも「います」とありとの複合體なること古來定論あり。しかしてこれは敬語として用ゐらるゝなり。原形はなほ「あり」の如くイ韻なり。

たかい子と申すいますかりけり。(伊勢物語)

(源氏紅梅)

(五) 動詞の複語尾

こゝに動詞とあげたるものは實質用言たる普通の動詞は勿論形式用言中動詞といふ名を附せるもの、即形式動詞、存在動詞、説明動詞、形容動詞、動作存在動詞を總稱していふ。これらは皆複語尾を有するものなり。

一 複語尾の性質分類

複語尾と稱せらるゝものは從來、活きてにをば又は動辭、助動詞と稱せられたる者なり。之につきての研究を歴史的に觀察すれば、確たる分類を始めしは富士谷氏なりとす。氏の六倫十二身は實にこの複語尾に該當す。本居春庭氏は富士谷氏が身中に入れし「らる」「す」等を以て用言の語尾と見たり。さて義門師範に至りては用言の中に收め、富樫氏は之を動辭と稱し、大槻氏は助動詞と稱せり。今吾人の見る所によればこれらは從來多く用言の語尾と見られたるが如く、本來の性質はまさに一種の語尾にして獨立したる單語にはあらざるものなり。いはば再度の語尾と稱すべく、動詞の語尾の複雑なるものと見るべきなり。さればこそ用言本來の變化にて十

分に作用を果しかぬる場合に附屬して其の意義を完からしむる用をなすなれ。かく複雑なる語尾を有するものは形容詞形式形容詞も以外の用言なり。其は何故かといふにそれらの形容詞以外の用言は陳述の方法に於いて種々の變化を要し、之を補填するものを待つが故なり。吾人が之を再度の語尾又は複語尾と稱するは用言其の者の本源的語尾ありてそれ／＼陳述の用をなせるになほ一層複雑なる意義をあらはさむが爲に其の本源的語尾に更に附屬する一種の語尾なればかくの如く稱したり。かく用言に緊密なる關係を有するものなれば用法上より見ても用言を離れて考ふること能はざるものにしてこれと用言の本源的語尾との間は如何なる場合といへども決して分離せしむること能はざるものなり。この故に將來國語記載法の一定せられて或は各單語を分離して記載することありともこの複語尾は決して分離してかさあらはさるべきものにあらざるなり。かくてこれらの複語尾は又それ／＼に活用を具するが故に之を本幹たる第一語尾と同時に説く時は錯雜して甚了解に苦むべきを以て茲に項を新にして説くこととせり。かくてこの複語尾に對して本源的語尾を動詞の幹語尾又は第一語尾と稱することあり。吾人が之を單語とせずして一の語尾にすぎずと斷ぜるは今の文法に非常なる打撃を加ふるものなれば、反對者ありて頗之を難せむと思ふによりて少しく辯ずる所あらむとす。

吾人が單語の解を記憶せる人は必單語は一の單體なることを知れるならむ。吾人は今この複語尾が單體なりうるか否かを決せむ。

先西洋文典の助動詞は如何其意義に於ては確に複語尾に似たるものありといへども、それが文章構成上の職務に至りては決して等しからず。かれの助動詞は誠に一の單語たる資格を有す。即文中にありて單獨の形を有せり。形體上獨立せる資格を以て文の素となれり。何を以てこれをいふか。請ふ次の例を見よ。

I shall come.

Shall I be sixteen years old to-morrow?

Jetzt dürft ihr spielen.

Wir müssen heute zu Hause bleiben.

かれらの助動詞は形體上動詞と差別なく、又其の位置自由なり。これ一の單體として獨立してある以上は自然にしかあるべきことなり。われの複語尾にはかゝる自由なきことは誰も認むる處なり。次にかれにはたとへ直に動詞に接すとも、必ず聲音上一回こゝに斷止あらざるべからず。これ亦單體なるが故なり。我が複語尾にはかゝることなし。若しわが複語尾をかれの助動詞の如く位置をかへて中間に他の單語を挿み、又は本幹の動詞とこれとの間に聲音の斷止ある時は同時にその性質を失ひて何等の意をもあらはさざるに至るべし。かくの如くなればかれのは單

語なりといへども我のは單語といふべからざるなり。かくて又第二の疑問は然らば「や」「か」「かな」「な」よの如きものとは如何なる差あるかといふことこれなり。これらは或論者は既に吾人の複語尾と同種なりとして助動詞のうちに入れたるあり。然れどもこれとそれとは同種ならず。如何にといふにかの助詞共は用言に附屬して其の統覺作用の不十分を助くる點はまことに似たれどもそれらは用言の殆すべてに附屬するをうるを始めとして更に體言にも附屬しうべく、又「や」「か」「な」の如きは用言の上にも來りうべき性質のものなれば形體上一個の單體と見ることを得る徵は十分にありしかれどもこれにはさる自由なきのみならず、その附屬すべき用言は、動詞に限り、又その附屬すべき活用形にも一定の則ありて變更しえざるものなり。かくの如くなればこの種のものは斷じて單語にあらぬものとすべきこと明なり。

複語尾は其の形體より見れば、大體四様に分ちうべし。一は形容詞の形に似たるもの、二は普通の動詞の形に似たるもの、三は存在動詞の形に似たるもの、四は特種の形を有せるものこれなり。

又複語尾は本體たる動詞の如何なる活用に附屬するかといふに、三様の別あり。一は原形よりうくるもの、存在動詞の類には連體形より二は未然形よりうくるもの、三は連用形よりうくるもの、これなり。

複語尾は獨立の詞にあらねば之を單獨にとくこと難し。必動詞に附屬したる形を以て説くべし。この故に今は其の所屬と意義とを個々の複語尾につきてとくべし。

複語尾を其の示す性質によりて分類すれば左の二大別を生ず。

一、屬性の作用を助くる複語尾。

二、統覺の運用を助くる複語尾。

かく二大別を生ずるは素用言の本性を因とし、而用言の本幹と複語尾附屬のものとの對比を縁とす。即用言の本幹たる第一語尾は其の屬性、其の統覺の直接に作用せることをあらはすが、こゝに又其の屬性の直接に營まれざるものをあらはし、又其の統覺の運用を委曲に陳述すべき必要生じ來る。この際にあたりて之をあらはすには複語尾によらざるべからず。かくて用言の所因は屬性と統覺との二者なるが故に之を助くるものにも二者の區分を見るに至る。此の如くなれば二者は必然的に區分せらるべき理由あり。然るに世の語學者この大別に著眼せずして漫然助動詞の分類を企つるが如きは、實に系統なきの甚しきものといふべし。而、この二大別も亦小別せらるることあるなり。そは各類につきて一々に之を説かむ。

動詞の有せる屬性は其の主者によりて直接に行はるるものと主者が現に直接

に行ひをるものにあらぬものとの二種の區別を生ずべし。其の主者によりて直接に行はるゝものは本源的語尾を用ゐるものにして、その間接に行はるものは複語尾を附屬せしめてあらはすなり。この故に屬性の作用を助くる複語尾は直に間接作用をあらはすものといふを得べし。

間接作用の中に亦二種の別をなすべきなり。一は状態性間接作用にして一は發動性間接作用なり。

状態性間接作用とは文の主者が其の作用の主者ならずして對者ありて其者が其作用の主者として文の主者に作用を與へる場合又は文の主者は其作用に對して主者たれども其の作用は現に行はるゝにあらざりて唯行はるべき地位に立てるを示す。共に直接に行はれず、間接なり。而して又共に主者其者の状態を示す傾向強し。この故に状態性といふなり。

發動性間接作用とは文主其者が間接ながらも其の作用を起すべき主因となりて然も直接に自ら作用を營まず、他の對者によりて營まるゝことを示すといふ。之を状態性のに比するにかれは其作用の營爲を現になすにあらざりて營爲をうけたる状態營爲をなし得る状態を示せるに、これはたとへ間接にまれ、其の作用は活動的に營まるべき位地に立てり。これ其の別なり。

(一) 状態性間接作用

状態性間接作用をあらはす複語尾は二あり。左の如し。

所屬	原形	未然形	連用形	連體形	已然形	命令形
未然形ニ「ア」韻アルモノ	行か ^ル	れ	れ	る、	るれ	れ
未然形ニ「ア」韻ナキモノ (受けらる)	られ	られ	らるゝ	らるれ	られ	られ

これらは共に下二段活用形の形にして語形を等しくす。其の差あるは語幹のル音なると之に「ア」韻音の複在するとの別ののみなり。これらの用法上の別は四段活用存在動詞には單形のもの接し、二段、一段、三段活用及形式動詞には複形のもの接す。かく二種の複語尾あれども意義は全く同一にして何の差異もなく唯其の原來の動詞を異にするのみなり。この動詞の本幹と複語尾との關係は全く發音上の一種の諧和に屬するものにして、左の如き關係を呈せり。

即ちこの種の複語尾は動詞の未然形より受くるものなるが四段活用及「あり」は未然形に於いて「ア」韻を有す。かくて單形のもの附屬す。三段二段一段及「す」は未然形に於いて「ア」韻を有せず。かくて頭に「ア」韻音ある複形のもの附屬す。この故にこの區別は唯發音上の諧和にすぎずといふ所以なり。

行か^ル (ア) 受け^ラ (ア) 。

さてこの間接作用に二種あること上に述べたり。即文主其者が作用の主者ならずして其の作用の發者として別に對者ありて之を起し、文主は其が影響を蒙る者

これを受身といひ文の主者が其の作用に對して主者たれども其の作用は現に行はるゝにあらざして唯行はるべき地位に立てるもの之を勢力といふ。さて受身と勢力とは如何にして見分くべきかといふに受身なる時は實際其の作用を起したる者必あらはれざるべからず其の作用を起したる者は大抵其の詞の下に「に」といふ助詞を伴ひてあるなり勢力は文主其の者の勢力をあらはすものなればかゝる作用の起者を他に求むべからずかく二種の別ある上になほ受身と勢力との混合よりなれるが如き一種の間接作用あり之を自然勢といふ何が故に受身と勢力との混合よりなるものといふかといへば自然勢にありては文主は自然的に受身の地位に立ちて自家の意志にて左右しうべきさまならずしかも其は自然に發したる勢力にして他に發動者ありて起したるにあらざこの故に受身なる點と勢力なる點とを具有せりと見るべく自己の勢力にて自己が受身となれるものなればなり。

三種の用例

受身の例

人に推さる。師に勵まざる。人にほめらる。

勢力の例

快く働かる。わが力にてなしえらる。

自然勢の例

筆を取れば物かゝる。昔しのばる。行末のみ案せらる。

(二) 受身についての論

受身については既に動詞の性質上の分類の條下に少しく論じたりしが如く、英獨諸國語の受身とは其の狀態異なる點少からず。先かれらの受身とは如何なるものなるかを明にせむ。トキキール曰く、

By voice we mean different grammatical ways of expressing the relation between a transitive verb and its subject and object. The two chief voices are the active and the passive.

The passive voice is, therefore, a grammatical device for (a) bringing the object of a transitive verb into prominence by making it the subject of the sentence, and (b) getting rid of the necessity of naming the subject of a transitive verb.

トキキール曰く

Die durch das transitive Verbum ausgedruckte Thätigkeit kann entweder aktiv (thätig) oder passiv (leidend) dargestellt werden. Wenn der thätige Gegenstand als Subjekt des Satzes auf einen andern Gegenstand hinwirkend dargestellt wird, das Subjekt also im Wirkungsstande erscheint: so steht das Verbum im Aktivum oder in der Thatform. Es kann aber auch der leidende Gegenstand zum Subjekt des Satzes gemacht werden. Dann steht das Verbum im Passivum oder in der Leideform.